

# 中佐治古墳群

一般国道483号北近畿豊岡自動車道 春日和田山道路工建設に伴う  
埋蔵文化財発掘調査報告書



平成21(2009)年3月

兵庫県教育委員会

丹波市青垣町

# 中佐治古墳群





全景（南から）



全景（西から）



遠景（西から）



2号墳（北東から）



2号墳第3主体出土須恵器杯

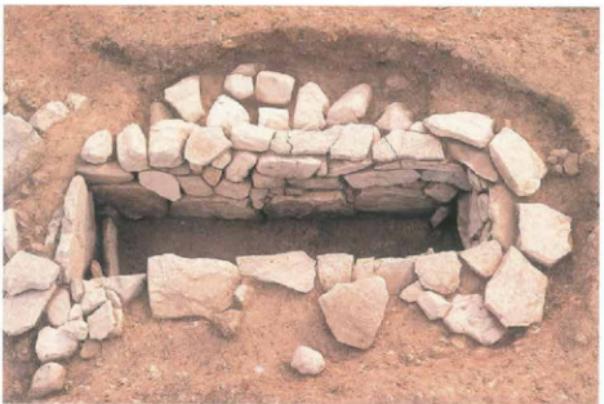




5号墳石室検出状況（北から）



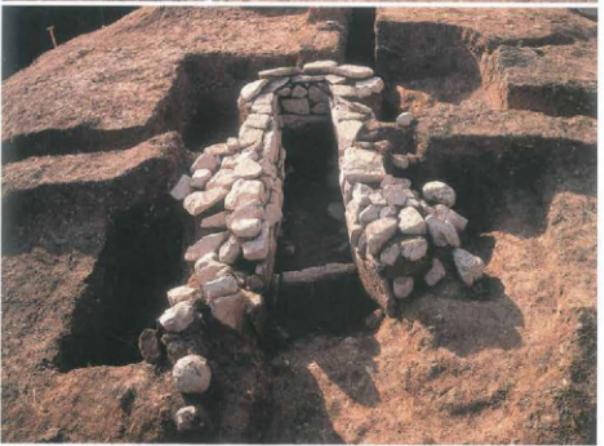
石室内遺物出土状況



5号墳石室（北から）



5号墳閉塞状況  
(東から)



5号墳石室

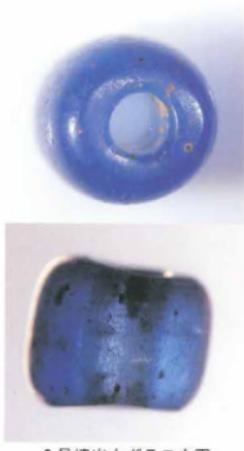


2号墳出土遺物



5号墳出土遺物

5号墳出土珠文鏡



2号墳出土ガラス小玉



2号墳出土遺物

## 例　　言

1. 本書は、兵庫県丹波市青垣町所在の中佐治古墳群（なかさじこふんぐん）の埋蔵文化財発掘調査報告書である。
2. 中佐治古墳群の本発掘調査は、平成13年度に一般国道483号北近畿豊岡自動車道春日和田山道路工建設事業に伴い、国土交通省近畿地方整備局 兵庫国道工事事務所（当時）の依頼を受けて、兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所（当時）が実施し、調査は調査第1班 別府洋二・鈴木敬二が担当した。
3. 報告書作成にかかる整理作業は国土交通省の依頼を受けて、平成19・20年度に兵庫県立考古博物館が実施した。
4. 発掘調査に際しては、発掘調査請負工事を氷上上塙工業株式会社と契約し作業を行った。また、空中写真測量を株式会社リオプランに委託し、その成果である空中写真・遺構配置図を本報告書で使用した。
5. 本報告書に掲載した図は、地形図については国土地理院発行のもの、国土交通省提供のものを使用した。その他の図に関しては空中写真測量図以外は、調査担当者、及び嘱託職員の手によるものである。
6. 遺物写真是㈱タニグチ・フォトに委託して撮影したものを使用した。金属器X線透過写真是岡本一秀によるものである。空中写真以外の遺構写真等は調査担当者によるものである。
7. 木製品の樹種同定及び赤色顔料の分析は株式会社古環境研究所に依頼し、第5章に報告を掲載した。その後確認できた赤色顔料については兵庫県立考古博物館において岡本がエネルギー分散型蛍光X線解析装置を用いて分析している。その他の執筆は別府が担当した。また、本書の編集は、松本豪子の補助の元、別府がおこなった。
8. 出土した金属器等の保存処理は岡本が担当しておこなっている。
9. 発掘調査・報告書作成に際して、国土交通省近畿地方整備局兵庫国道事務所、丹波市教育委員会の方々にお世話になりました。また、尾野幸雄、安達まゆみをはじめ発掘調査に従事していただいた皆さんにも、改めて感謝いたします。
10. 発掘調査中、整理作業中には以下の方々に様々な御指導、御教示を受けました。記して感謝の意を表します。（順不同、敬称略）  
　　岡本誠一（大手前大学）、瀬戸谷　皓（豊岡市文化財収蔵センター）、谷本　進（養父市教育委員会）

## 本文目次

第1章 遺跡の位置と環境 .....	1
第1節 地理的環境 .....	1
第2節 歴史的環境 .....	1
第2章 調査に至る経緯と経過 .....	5
第1節 調査に至る経緯 .....	5
第2節 調査の経過 .....	5
第3章 調査 .....	9
第1節 概要 .....	9
第2節 A区の調査 .....	9
1. A区の概要	
2. 1号墳	
3. 2号墳	
4. 3号墳	
第3節 B区の調査 .....	12
1. B区の概要	
2. 4号墳	
3. 5号墳	
4. 6号墳	
第4章 遺物 .....	17
第1節 1号墳出土の遺物 .....	17
1. 概要	
2. 土器	
第2節 2号墳出土の遺物 .....	18
1. 概要	
2. 土器	
3. 金属器	
4. 玉	
第3節 3号墳出土の遺物 .....	21
1. 概要	
2. 土器	

第4章	4号墳出土の遺物	22
1.	概要	
2.	土器	
3.	金属器	
第5章	5号墳出土の遺物	24
1.	概要	
2.	土器	
3.	金属器	
第6章	6号墳出土の遺物	27
1.	概要	
2.	土器	
第5章	兵庫県中佐治古墳群における自然科学分析 株式会社 古環境研究所	33
1.	樹種同定	
2.	蛍光X線分析（赤色顔料分析）	
第6章	まとめと考察	39
第1節	古墳群の割める位置	39
第2節	古墳群の特徴	39
第3節	堅穴系横口式石室墳について	44

## 挿図目次

図1	周辺の古墳時代の遺跡	4
図2	古墳に伴わない遺物	9
図3	須恵器杯折影	16
図4	中佐治古墳群の木材	35
図5	X線スペクトル	36・37
図6	蛍光X線分析結果	37

## 表目次

表1	周辺の古墳時代の遺跡	3
表2	出土遺物観察表	29
表3	中佐治古墳群における蛍光X線分析結果	38

## 図版目次

- 図版 1 周辺の地形と調査範囲  
図版 2 A区調査前測量図  
図版 3 A区遺構配置図  
図版 4 1号墳墳丘と基本土層図  
図版 5 1号墳主体部、出土遺物  
図版 6 2号墳墳丘  
図版 7 2号墳基本土層図  
図版 8 2号墳主体部  
図版 9 2号墳主体部遺物出土状況  
図版10 2号墳出土遺物 1  
図版11 2号墳出土遺物 2  
図版12 2号墳出土遺物 3  
図版13 3号墳墳丘と基本土層図  
図版14 3号墳主体部、七坑、出土遺物  
図版15 B区調査前測量図  
図版16 B区遺構配置図  
図版17 4号墳墳丘、基本土層図  
図版18 4号墳主体部箱式石棺と遺物出土状況  
図版19 4号墳箱式石棺構築状況  
図版20 4号墳出土遺物  
図版21 5号墳墳丘と基本土層図  
図版22 5号墳基本土層図  
図版23 5号墳天井石の状況  
図版24 5号墳石室  
図版25 5号墳閉塞状況  
図版26 5号墳石室構築状況  
図版27 5号墳遺物出土状況  
図版28 5号墳出土遺物 1  
図版29 5号墳出土遺物 2  
図版30 5号墳出土遺物 3  
図版31 6号墳墳丘、基本土層図  
図版32 6号墳主体部  
図版33 6号墳出土遺物  
図版34 6号墳と7号墳  
図版35 但馬・丹波・丹後地域の初期横穴式石室分布

## 卷首カラー図版目次

- 卷首カラー図版 1 全景（南から）、全景（西から）  
卷首カラー図版 2 遠景（西から）、2号墳（北東から）、2号墳第3主体出土須恵器杯  
卷首カラー図版 3 B区全景（東から）、4号墳石棺検出状況（東から）、4号墳箱式石棺  
卷首カラー図版 4 5号墳石室検出状況（北から）、石室内遺物出土状況  
卷首カラー図版 5 5号墳石室（北から）、5号墳閉塞状況（東から）、5号墳石室  
卷首カラー図版 6 2号墳出土遺物、5号墳出土遺物  
卷首カラー図版 7 5号墳出土珠文鏡、2号墳出土ガラス小瓶、2号墳出土遺物

## 写真図版目次

- 写真図版 1 遠景 遠景（南東から）  
遠景（南西から）  
写真図版 2 遠景 遠景（南から）  
遠景（西から）  
調査前の状況（南から）  
写真図版 3 全景 調査前の全景  
主体部検出状況の全景  
写真図版 4 全景 A区全景（南東から）  
B区全景（南から）  
全景（北西から）  
写真図版 5 1号墳 調査前の状況（西から）  
墳丘盛土（北西から）  
墳丘断ち割り状況（東から）  
写真図版 6 1号墳 主体部埋土（南から）  
主体部埋土（東から）  
主体部完掘状況（西から）  
写真図版 7 1号墳 須恵器出土状況  
須恵器出土状況（No.27・30）  
墳丘上須恵器出土状況（No.29・31）  
写真図版 8 2号墳 調査前の状況（北東から）  
調査前の状況（北東から）  
調査前の状況（東から）  
写真図版 9 2号墳 墳丘全景（北東から）  
北側周溝埋土（北西から）  
南側周溝埋土（北西から）

写真図版10 2号墳	墳丘上須恵器出土状況 墳丘上須恵器出土状況 墳丘上須恵器出土状況
写真図版11 2号墳第1主体部	木棺検出状況（北西から）、木棺内埋土（南東から） 木棺内埋土（南西から） 木棺内須恵器出土状況、木棺内須恵器出土状況 木棺内完掘状況（南西から）
写真図版12 2号墳第2主体部	木棺掘削状況（南西から）、須恵器出土状況 鉄器出土状況、木棺内埋土（南西から） 木棺内埋土（南東から）
写真図版13 2号墳第3主体部	木棺掘削状況（南西から） 須恵器出土状況、墓壇検出状況（南西から） 木棺内埋土（西から）、墳丘断ち割り（北東から）
写真図版14 3号墳	調査前の状況（南西から） 調査前の状況（南西から） 木棺検出状況（南西から）
写真図版15 3号墳	墓壇埋土（南から） 木棺完掘状況（北西から） 墓壇下層の焼土坑（南西から）
写真図版16 B区	調査前の状況（沢野方面を望む） 開発前の状況（北から） 調査状況（北から）
写真図版17 4号墳	調査前の状況（北から） 4～6号墳（北から） 石棺検出状況（北から）
写真図版18 4号墳	蓋石除去後（西から） 石棺内埋土（東から） 石棺内遺物出土状況
写真図版19 4号墳	石棺完掘状況（東から） 石棺完掘状況（北から）
写真図版20 4号墳	北側周溝須恵器出土状況 北側周溝埋土（西から） 南側墳丘盛土（西から）
写真図版21 4号墳	石材据付状況（南東から） 石材据付状況（北東から） 石棺掘り方の状況（東から）
写真図版22 5号墳	調査前の状況（北西から） 調査前の状況（北から）

	填丘全景（北から）
写真図版23 5号墳	石室検出状況（北から）
	天井石の状況（北から）
	天井石・控え積みの状況（西から）
写真図版24 5号墳	天井石・控え積みの状況（奥壁付近）
	天井石の状況（横口部付近）
	石材の加工痕
写真図版25 5号墳	天井石除去後（西から）
	天井石除去後（東から）
	石室内埋土（東から）
写真図版26 5号墳	石室内完掘状況（北から）
	石室内完掘状況（東から）
	石室内完掘状況（西から）
写真図版27 5号墳	横口部埋土（北から）、横口部埋土（東から）
	横口部閉塞状況1、横口部閉塞状況2
	横口部閉塞状況3、横口部閉塞状況4
	横口部閉塞状況5、枢石検出状況
写真図版28 5号墳	横口部南壁、横口部北壁
	枢石の状況（東から）、側壁と枢石の状況（南西から）
	填丘南側盛土・断ち割り状況（北東から）
	奥壁裏の状況（西から）
	石室北側の埋土（西から）、石室南側の埋土（東から）
写真図版29 5号墳	奥壁付近遺物出土状況（東から）
	奥壁付近遺物出土状況（東から）
	奥壁付近遺物出土状況（南から）
写真図版30 5号墳	横口部付近遺物出土状況（南から）
	横口部付近遺物出土状況（南から）
	横口部付近遺物出土状況（西から）
写真図版31 5号墳	銅鏡の出土状況（西から）
	確床上、銅鏡下の木材検出状況
	床面下の断ち割り
写真図版32 5号墳	完掘状況（東から）
	床面下の状況（西から）
	床面下の状況（東から）
写真図版33 5号墳	石室内墓横底の状況（西から）
	石室内墓横底の状況（東から）
	石室北壁の状況（南から）、石室南壁の状況（北から）
	石室北壁基部の状況（南東から）

- 石室南壁基部の状況（南西から）  
写真図版34 5号墳  
葺き石（南西から）、葺き石（南から）  
葺き石（東から）、葺き石（西から）  
北側周溝埋土（西から）、周溝内須恵器出土状況  
墳丘断ち割り状況（南東から）  
石室掘り方の状況（東から）  
写真図版35 6号墳  
調査前の状況（北西から）  
調査前の状況（北から）  
須恵器出土状況、須恵器出土状況  
写真図版36 6号墳  
全景（北から）  
第1主体部検出状況（北から）、第1主体部埋土（北から）  
第2主体部埋土（西から）、墳丘盛土（北西から）  
写真図版37  
写真図版38  
写真図版39  
写真図版40  
写真図版41  
写真図版42  
写真図版43  
写真図版44  
写真図版45  
写真図版46  
写真図版47  
写真図版48  
写真図版49  
写真図版50  
写真図版51  
1号墳出土土器  
2号墳出土土器 1  
2号墳出土土器 2  
2号墳出土土器 3  
3号墳出土土器・4号墳出土土器  
5号墳出土土器 1  
5号墳出土土器 2  
6号墳出土土器 1  
6号墳出土土器 2  
2号墳出土金属器・4号墳出土金属器  
5号墳出土金属器 1  
5号墳出土金属器 2  
5号墳出土金属器 3  
金属器X線写真 1  
金属器X線写真 2

# 第1章 遺跡の位置と環境

## 第1節 遺跡の位置

中佐治古墳群の所在する丹波市青垣町は、兵庫県の北東部に位置し、京都府と接している。旧丹波国においては、その西端として、播磨国、但馬国と接する位置にある。

2004(平成16)年11月1日、氷上郡氷上町、柏原町、春日町、山南町、市島町、青垣町の6町が合併して、丹波市となった。元の氷上郡青垣町は昭和30年に佐治町、芦田村、神楽村、遠阪村が合わさったものである。中佐治古墳群は元の佐治町（旧佐治村）に位置している。

青垣町内は、県下最長を流れ瀬戸内海へと注いでいる加古川の最上流域を占めている。加古川は旧町内では佐治川とも呼ばれており、遠阪川、芦田川、奥塙久川、倉町川などの中小の谷川と合流して、盆地状の地形を形作っている。中佐治古墳群がその流域にある遠阪川は、佐治川の最大の支流であり、鳥帽子山（512.5m）と大箕山（626.3m）に挟まれた狭小な谷間に北西から南東へと流れている。

遠阪川や佐治川から北東へ延びる谷を抜けると蓮根峠、穴ノ巣峠、坂久峠、櫻峠、梨木峠などの標高300m近い峠を越えて、京都府の福知山（旧天田郡）へと結ばれている。また、遠阪川を通りて遠阪峠を越えると、旧但馬国朝来郡である朝来市山東町へと結ばれている。この山東町へ抜ける道は、古代山陰道でもあり、400m近い峠の遠阪峠を挟んだ南東には佐治駅家（沢野遺跡周辺）が、北西には栗鹿駅家（柴遺跡）が営まれていた。この古道はそれ以前からも重要な交通路であったことが考えられる。

中佐治古墳群はこの谷間の古道を見下ろせる南西向きの尾根斜面に立地している。

## 第2節 歴史的環境

北近畿豊岡自動車道春日和田山道路の建設に伴い、多くの発掘調査が行われており、報告書も次々刊行されている。その中で火山古墳群（春日町）、平松古墳群（春日町）、横田古墳群（氷上町）など同事業にかかわる古墳の本發掘調査は限られており、中佐治古墳群の調査は旧氷上郡域で行われた最も北に位置するものである。ここでは、遠阪川流域を中心に、古墳時代の氷上郡内や一部周辺地域を概観する。

氷上郡内の古墳時代前期から中期にかけての古墳では、山南町の丸山1号墳や春日町の二間塚古墳などが前方後円墳として知られており、丸山古墳群は前期後半から後期前半にかけて営まれた氷上郡内の中核的な古墳群である。

その他には、三角縁神獣鏡が出土した氷上町の親王塚古墳、方格規矩鏡・甲冑が出土したとされる柏原町の萱刈坂古墳、竪穴式石室から銅鏡などが出土した柏原町大新屋地区山根2号墳、竪穴式石室から摸文鏡が出土した市島町の久良部1号墳のほか、箱式石棺を主体部とする氷上町の淹山古墳・横田山古墳・明治山古墳などが知られている。長野木戸古墳群では前期中頃～後期前半にかけての18基の古墳と2基の箱式石棺が調査されたが、一部に割竹形木棺・箱形木棺がわずかに認められる他は箱式石棺が主体部に採用されており、この地域の特徴とされている。

青垣町域では前方後円墳は見つかっておらず、前期古墳は確認されていないが、弥生時代から古墳

時代初頭の墳墓群としてボラ山墳墓群(16)があり、主に周辺で産出される板状節理の石材を用いた箱式石棺が主体部に採用されている。ボラ山古墳(17)は堅穴式石室をもつ中期の古墳とされる。この他に沼城跡とされる丘陵頂上には大型の円墳(18)が存在している。

古墳時代後期になると各地に古墳群が造営されるようになる。遠阪川流域では中佐治周辺で、東西に広がる谷地形を合わせて盆地状に平地が広がる。右岸にある応相寺古墳群(2)では、7基の横穴式石室と2基の周溝内埋葬が調査されており、流域で確認された最大規模の群集墳である。中佐治古墳群(1)はその対岸に位置しており、中佐治古墳群に統く中核的な古墳群といえる。周辺の左岸ではビハクビ古墳群(3)・見努ノ尾古墳(4)が存在しており、北に延びる谷の奥には針ノ木田古墳(5)・平野古墳群(6)・早坂古墳群(7)が分布している。

遠阪川を測ると、山垣周辺で一旦盆地状に平地が広がり、この周辺には両岸に古墳が分布している。ここでも単独墳が多く、右岸では瓢殿古墳(8)・唐鏡古墳(9)・上地前古墳(10)・横蔵古墳(11)・西落古墳(12)・荒神ヶ谷古墳(13)、左岸では鉢ノ木田古墳(14)・東寺古墳(15)などが知られている。このなかで、瓢殿古墳・唐鏡古墳・西落古墳・荒神ヶ谷古墳が横穴式石室墳とされているが、先述の応相寺古墳群をはじめ、確認できる石室は所謂畿内型石室である。これらの古墳のほとんどが丘陵標部に築かれているが、ビハクビ古墳群・針ノ木田古墳・平野古墳群は丘陵上の古墳で、中佐治古墳群に近い立地をもつ。

遠阪川を下って佐治川と合流する付近の右岸には、段ヶ谷古墳(19)、段ヶ端古墳(20)が残るが、この周辺にはかつて横穴式石室墳が多く分布していたらしい。丘陵頂部に位置する佐治・丸山古墳(21)出土とされる須恵器は、中佐治古墳群に相前後する時期のものである。

更に下流の西芦田、栗住野には上地古墳(22)、横穴式石室をもつキ山古墳を含めた5~6基からなる防ヶ谷古墳群(23)、その南東には西倉古墳(24)、山田ノ上古墳(25)、梅ノ木畠古墳(26)、下畠古墳(27)、下山古墳(28)が分布している。下畠古墳は横穴式石室をもつ。山田ノ上古墳でも石材が残存している。

佐治川対岸には、上島古墳(29)、月土井古墳(30)、塚ノ本古墳(31)、山ノ神古墳(32)、天神古墳(33)、田井縄古墳(34)、高座神社裏古墳群(35)と沢野奥古墳(41)が分布している。月土井古墳、塚ノ本古墳、山ノ神古墳、天神古墳、田井縄古墳は石材が残存しており、横穴式石室墳である。佐治川の上流域では古墳は確認されていない。

古墳時代の聚落址が調査された例は少ないが、下流域からみてみると、山井縄遺跡(36)の天神地区では弥生時代末から古墳時代にかけての8棟前後の住居址が調査されており、背後の山裾に点々と分布する古墳の母集団の可能性が高い。

沢野遺跡(37)は遠阪川と佐治川に挟まれた盆地の中央部に位置しており、弥生時代後期後半から古墳時代前期初頭の堅穴住居址や、古墳時代後期から8世紀前半までの堅穴住居址、掘立柱建物址、木棺墓が検出されており、周辺では最も規模の大きい集落である。

応相寺古墳群周辺の応相寺遺跡(2)では中期の堅穴住居址が検出されている。また、上流の遠阪遺跡(40)でも唐鏡古墳・上地前古墳・横蔵古墳の周辺一帯で古墳時代の土器の散布がみられる。城ノ腰遺跡(38)では6世紀末から7世紀中ころの堅穴住居が確認されており、遠阪川上流の土井遺跡(39)でも6世紀後半の堅穴住居址が検出されている。

以上のように、旧青垣町内では散漫ではあるが、古代山陰道に沿った地域に古墳時代の遺跡が分布しており、このルートが古墳時代にも主要な街道として重要視されていたことがわかる。

水上郡内で横穴式石室が導入された時期の古墳には、春日町多利向山C-2号墳、同火山10号墳、市島町高坂1号墳、山南町井原至山古墳が挙げられる。多利向山C-2号墳、井原至山古墳は玄室の平面形が正方形で、MT15型式期に位置づけられる。火山10号墳、高坂1号墳は蓋道より玄室が一段下がる構造をもち、TK10やMT85型式期に位置づけられる。(兵庫県2004)

周辺に目を向けると、京都府天田郡夜久野町の流尾古墳、福知山市の池の奥4号墳、綾部市の以久田野49号墳は玄室平面形が縱長の長方形で、その一端に横口部を設け、石室の閉塞をおこなう、堅穴系横口式石室に分類される石室をもつ。また、綾部市の高谷3号墳も古式の横穴式石室をもつ。これらの古式の横穴石室墳はTK10型式期とされている。(林1988)

#### 参考文献

- 水上郡教育委員会1994『プラ山・ボラ山』  
兵庫県教育委員会1995『平松片山古墳』  
兵庫県教育委員会1996『水上郡埋蔵文化財調査概要報告書I』  
兵庫県教育委員会1996『水上郡埋蔵文化財調査概要報告書II』  
兵庫県教育委員会1996『水上郡埋蔵文化財調査概要報告書III』  
兵庫県教育委員会1997『水上郡埋蔵文化財調査概要報告書IV』  
兵庫県教育委員会2003『高坂古墳群』兵庫県文化財調査報告第281号  
兵庫県教育委員会2004『火山古墳群・火山城跡・火山断崖』兵庫県文化財調査報告第283号  
兵庫県教育委員会2005『城ノ腰遺跡』兵庫県文化財調査報告第292号  
兵庫県教育委員会2006『沢野遺跡』兵庫県文化財調査報告第317号  
兵庫県教育委員会2007『上井遺跡』兵庫県文化財調査報告第341号  
林 月佐子1988『丹後・丹波における初現期の横穴式石室』『考古学と技術』同志社大学考古学シリーズIV

表1 周辺の古墳時代の遺跡

1 中佐治古墳群	
2 応相寺古墳群・遺跡	22 上池古墳
3 ビハクビ古墳群	23 防ヶ谷古墳群
4 見勢ノ尾古墳	24 西倉古墳
5 针ノ木田古墳	25 山田ノ上古墳
6 平野古墳群	26 檜ノ木畠古墳
7 早坂古墳群	27 下畠古墳
8 堀殿古墳	28 下山古墳
9 唐鏡古墳	29 上島古墳
10 上地前古墳	30 月土井古墳
11 横蔵古墳	31 塚ノ木古墳
12 西落古墳	32 山ノ神古墳
13 荒神ヶ谷古墳	33 天神古墳
14 鮎ノ木田古墳	34 田井郷古墳
15 東寺古墳	35 高座神社裏古墳群
16 ボラ山墳墓群	36 田井郷遺跡
17 プラ山古墳	37 沢野遺跡
18 沿城跡	38 城ノ腰遺跡
19 段ヶ谷古墳	39 土井遺跡
20 段ヶ瀬古墳	40 遠阪遺跡
21 佐治・丸山古墳	41 沢野奥古墳



図1 周辺の古墳時代の遺跡

## 第2章 調査に至る経緯と経過

### 第1節 調査に至る経緯

一般国道483号北近畿豊岡自動車道春日和田山道路工事業は、丹波市春日町の近畿自動車道敦賀線春日インターチェンジより分岐し、氷上・青垣を経て遠坂峠を越え、円山川中流域の和田山盆地の和田山インターチェンジで、播但連絡自動車道へと接続する事業で、同自動車道建設はさらに北進して豊岡市に至る計画である。

同事業に先立って、春日インターチェンジから遠阪トンネル青垣町側出口までの24kmについて、遺跡分布調査（遺跡調査番号910019）が平成3年度に実施された。その結果、該当地点は周知の埋蔵文化財包蔵地である「中佐治城跡」と「中佐治古墳群」に重複している可能性が高いとされた。

氷上郡教育委員会1996年度発行の『氷上郡埋蔵文化財分布調査報告書(4)一兵庫県氷上郡青垣町一』では、

「中佐治古墳群－中佐治城跡が所在する丘陵の稜線上に位置する：3基の古墳が並んで存在する。いずれも良好に埴丘が残り、石材等の痕跡は認められない。」

「中佐治城跡－中佐治集落北東の丘陵中腹から麓部にかけて立地する。東南を向く曲輪が2段あり、南を向く曲輪を2段確認した。」とあり、中佐治古墳群の調査前の状況をよくあらわしている。

以上の状況をもとに当該地点は、№32地点として登録され、確認調査を実施することとなった。

同事業に関連しては、他に春日七日市遺跡・西野々遺跡・火山古墳群・平松八幡神社窓跡・平松古墳群（以上、旧春日町内）、横山古墳群・横田遺跡・市辺遺跡（以上、旧氷上町内）、沢野遺跡・平野遺跡・城ノ腰遺跡・伝平等寺跡遺跡・上井遺跡・田ノ口遺跡（以上、旧青垣町内）などが本発掘調査されている。

### 第2節 調査の経過

#### 1、確認調査

一般国道483号北近畿豊岡自動車道春日和田山道路工事業に伴って、建設省近畿地方建設局兵庫国工事事務所（当時）の依頼を受け、兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所（当時）では逐次調査を実施してきた。中佐治古墳群は同事業に伴う分布調査によって№32地点として登録され、平成13年1月から2月にかけて、調査第1班 種定淳介、大崎晃司、池田征弘によって確認調査（遺跡調査番号2000340）が実施された。

この確認調査では、同時に青垣町沢野字トメトハタの№30地点（遺跡調査番号2000308）、青垣町中佐治字竹ノ上の№34地点（遺跡調査番号2000341）、青垣町山垣字舟ヶ谷の№36地点（遺跡調査番号2000309）、青垣町山垣字中ヶ谷の№37地点（遺跡調査番号2000310）、青垣町山垣字西ノ上の№38地点（遺跡調査番号2000311）、青垣町遠阪字上井の№39地点（遺跡調査番号2000312）、青垣町遠阪字田ノ口の№41地点（遺跡調査番号2000313）の合計8地点の確認調査を実施しており、中佐治古墳群・土井遺跡・田ノ口遺跡が本発掘調査となった。また、その後の確認調査によって、新たに伝平等寺跡遺跡と田

ノ口経験の本発掘調査を実施することとなった。

No34地点は中佐治古墳群から岡見谷川を隔てた北西の丘陵斜面で、古墳時代から中世にかけての土器の散布が見られ、また見勢ノ尾古墳が隣接しているが、確認調査の結果、工事範囲内には埋蔵文化財は及んでいないことが判明した。

No32地点（中佐治古墳群）の確認調査では、合計11ヶ所のトレンチを設定し、110m<sup>2</sup>を人手によって調査した。その結果、周溝・墓壇・石積などの遺構が検出され、須恵器が多く出土し、古墳の存在が確認された。

当初、古墳群とされていた尾根上の高まりや平坦地のみならず、山城の曲輪と考えられていた急斜面の支尾根の平坦地も古墳であることが判明した。主尾根の延長上や北側緩斜面に設定したトレンチからは造塁・遺物とも検出されなかった。

以上の確認調査の結果、6世紀前半の時期に属する直径10m前後の古墳が、頂上の尾根筋の地区に2基以上、中腹の支尾根にかけての地区で3基、2地区に分かれて存在することが判明し、本発掘調査を実施することとなった。

## 2、本発掘調査

本発掘調査は平成13年10月4日から平成14年2月19日にかけて、他地点の確認調査とともに実施した。調査は兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所（大村敬通所長）、調査第1班（吉田昇班長）の別府洋二、鈴木散二が担当し、一部尾野幸雄の補助を得た。

中佐治古墳群の本発掘調査範囲は、一旦伐採がおこなわれていたが、調査直前では灌木・竹林が再び繁茂していたため、平成13年10月9日から伐採を開始した。また同時に、同事業に伴って残されていた確認調査のうち、青垣町沢野のNo.26地点（遺跡調査番号2001185）、青垣町沢野のNo.27～29地点（遺跡調査番号2001184）、青垣町遠阪のNo.40地点（遺跡調査番号2001183）を実施したが、本発掘調査には至っていない。

中佐治古墳群本発掘調査（遺跡調査番号2001104）では伐採完了後、調査範囲を設定し、10月24日にヘリコプターによる空中写真測量によって現地形測量をおこなった後、人力掘削が開始された。

調査はA区1,018m<sup>2</sup>、B区1,126m<sup>2</sup>、計2,144m<sup>2</sup>の範囲で実施した。当初、B区の西側からの山道を登っていたが、下方に墓地があることから、北側からの登り道を開いて調査に備えた。

笠竹の根が蔓延する表土を掘削し、周溝を検出、掘削を行い、墳丘上では墓壇等の検出に努めた。遺物出土状況・土層など適宜、実測・写真によって記録を留め、一部は主体部掘削段階、一部は主体部検出段階の12月19日に2回目の空中写真測量を実施した。また、調査範囲外の仮称7号墳についても平板測量を実施した。

5号墳の調査では竪穴系横口式石室が検出され、石室内から珠文鏡が出土したことから、学識経験者として大手前大学人文学部教授 横本誠一氏に現地指導を依頼した。また、但馬地域での竪穴系横口式石室の類例について猿戸谷 勝氏（豊岡市教育委員会）、谷本 進氏（八鹿町教育委員会）からもご意見を賜った。

平成14年2月13日には記者発表をおこない、2月16日に地元の岡見公民館にて説明会を開催した。その後、墳丘の断ち割り等を実施し、調査を完了した。

### 3、出土品整理作業

発掘調査によって出土した遺物は、一部は発掘調査現場事務所にて洗浄をおこなったが、整理作業については、平成19年度より、兵庫県立考古博物館にてネーミング、接合・補強、分析鑑定、及び金属器の保存処理を実施した。

整理作業の担当は以下のとおりである。

館長	石野博信
副館長	松下信一
調査部整理保存班 調査専門員	西口利彦
担当課長補佐	森内秀造
担当課長補佐	岡田章一
主査	菱田淳子
主査	岡本一秀
調査第1班 主査	別府洋二
非常勤嘱託員	吉田優子・宮野正子・小野潤子・又江立子
	三好綾子・嶺岡美見・小谷桂加
	栗山美奈・大前篤子・藤井光代・三島重美

平成20年度には遺物実測・拓本・復元、遺物写真撮影、写真整理、図面補正、トレース、レイアウト作業及び原稿執筆をおこない、叢集作業を経て報告書を刊行した。

整理作業の担当は以下のとおりである。

館長	石野博信
副館長	蘿原悟
調査部整理保存班 調査専門員	森内秀造
担当課長補佐	岡田章一
主査	菱田淳子
主査	篠宮正
同調査第1班 主査	別府洋二
非常勤嘱託員	池田悦子・松本嘉子

## 第3章 調査

### 第1節 概要

古墳群は烏帽子山(512.5m)から南西に派生する尾根に立地する。この尾根は岡見谷川の流れる深い谷に北西側を限られ、南西側も比較的深い谷によって限られている。この両側の谷から分岐する谷地形によって、この尾根はその根元部分を両側から絞り込まれており、ひとつの山塊状の様相を見せてゐる。

A区の主尾根の付根部分は一旦傾斜を緩やかにしており、その後、山裾までは急斜面となる。山裾に近い位置では主尾根から続く部分と、主尾根から南側に派生する尾根が比較的緩斜面となり、その後者の枝尾根筋がB区となる。山裾の棚田となっている部分の標高が約150m、主尾根の付根部分の標高は約220mを測り、最高所の古墳までの比高は70m以上を測り、高所となる。

確認調査の結果に基づいて、北西側の標高の高い主尾根に位置する古墳群をA区とし、尾根先端部から1~3号墳と呼称した。B区は主尾根から南に派生する尾根で、A区よりは標高が低い。B区では標高の高い方から4~6号墳と呼称した。このB区からさらに南の調査区外へ続く位置には、植林により破壊されて不明瞭であるが、2~3基の古墳状隆起が認められる。図版34に6号墳とその南の仮称7号墳の現況測量図を掲載した。

### 第2節 A区の調査

#### 1. A区の概要 (図版2~14、写真図版5~15)

A区は東北から延びる尾根が、一旦緩斜面となつた箇所にある。調査前の標高は、最も低い調査区南西端で205.04m、最高所で220.98mを測り、調査によって古墳が検出されたのは標高215mより上の地点である。当初、1号墳の前面にも古墳の存在を想定しており、また南西部に調査前にいくつか認められた小さな緩斜面も、小石積などの存在を想定していたが、倒木成いは樹木を運搬する際の索道を設置した搅乱であった。

尾根の先端部で検出できた1号墳は急斜面上に立地し、その南への眺望は大きく開けている。その奥に位置する2号墳は大きく盛土を施しており、調査範囲内では最高所を占める。さらに奥で検出できた3号墳は低墳丘であり、調査範囲外に区画の溝を持つものと考えられる。さらに奥の調査範囲外にも10数メートル平坦に近い緩斜面が続くが、明瞭な区画溝など古墳が存在する兆候は認められなかった。但し、3号墳のような低墳丘の古墳が存在する可能性は残る。さらに奥は急斜面となって登っている。

古墳に伴わない遺物として、扁平なつまみが付く須恵器杯蓋(図2-1)が1号墳の頂上付近から、青磁碗底部(図2-3)が2号墳墳丘斜面から出土している。

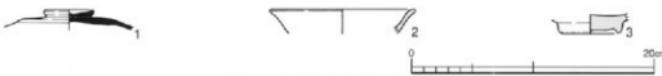


図2 古墳に伴わない遺物

## 2. 1号墳 (図版4・5、写真図版5~7)

1号墳は標高219.5mの尾根頂部先端に立地し、地形的には本古墳群中、最も眺望の開けた位置を占めている。

### 周溝・墳丘

尾根の標高の高い側には、最大幅約1.8mの周溝が認められるが、2号墳の周溝によって大きく切られている。また、後世に墳丘の南側を大きく抉られており、墳形は不明瞭となるが、直径11m程の円墳と推測される。墳丘の高さは標高の低い斜面下方から調査前の墳頂部までは約2.8m、2号墳周溝底から調査前の墳頂部までは約0.7mを測る。墳丘の一部には礫が認められたが、葺石状を呈するものではない。

### 主体部

表土或いは表土直下から既に須恵器が出土しており、墳丘上面は削平や流失が著しいものと想定された。本来は盛土が施されていたものであろう。表土直下面で1基の主体部が検出された。

主体部は墳丘上部の平坦面で表土直下から検出された。尾根の方向に長い長方形の平面形で、約2.1×1.0mの規模をもつ。残存する深さも15cmほどしかない。墓壙というよりも木棺の痕跡かもしれない。箱形の木棺直葬であろう。墓壙埋土からは1の有蓋高杯蓋が出土した。

出土した遺物は須恵器のみであり、有蓋高杯・甕(4~12)が出土した。ほとんどが墳頂部や主体部上から出土しており、墓壙に伴う可能性が高い。

## 3. 2号墳 (図版6~12、写真図版8~13)

2号墳は尾根の先端から少し奥まった位置に築かれているが、盛土が施されているため、調査前の状況では、標高221mで、3号墳より約0.7m、1号墳より約1.4m高く、眺望はきいている。調査前にはA区で最も占墳らしい状況を示していた。

### 周溝・墳丘

周溝は尾根筋の両側に弧状を呈するように掘られており、最大幅は3.5mを超える。2方を周溝で囲まれた円墳の直径は約14mを測る。周溝底から調査前の墳丘頂部までの高さは2.0~2.3mを測る。この古墳は盛土が顯著で、厚い部分で1m近い墳丘を築いている。2号墳の周溝は1号墳周溝と切り合い、3号墳では墳丘にまで及んでいる。

### 主体部

墳丘頂部から3基の主体部が尾根筋と直交する方向に主軸をもって検出された。各々の主体部は非常に近接している。

第1主体部は、墳丘のはば中央で、表土上面から約0.3m下層の盛土部分から切り込んだ状況で検出された。墓壙の大きさは約3.0×1.8mのやや歪な長方形の平面形をもち、南側の隅が突出するのは第2主体部の墓壙の影響である。深さは約0.5mを測る。墓壙のはば中央に同じ主軸方向の木棺の痕跡が検出された。木棺の規模は約1.7×0.9m、深さ約0.4mで、底は平坦で、壁面はまっすぐに立ち上がる箱型の木棺直葬である。

木棺内から須恵器杯（13）が傾いた状態で埋土中層から出土した。棺上の土器が落ち込んだものであろう。同じく棺内埋土からガラス製の小玉（G1）が1点出土しているが、棺底からは他には出土しなかった。棺内の他の副葬品も検出されていない。その他、墓壙埋土からは須恵器片が出土しているが、この主体部に伴うものは不明である。22の杯蓋、29の杯は墓壙掘方北東部から出土した。22の内面には赤色顔料が付着している。23の杯蓋は墓壙埋土上層から出土した。また、24～27・35～37は墓壙埋土出土の破片が墳頂部周辺や周溝内から出土した破片と接合できた。これは墳丘上にあったものが、落ち込んだ、あるいは入り込んだものであろう。

第2主体部は第1主体部の南西に近接して検出された。第1主体部の壁面と墓壙底で検出できた落ち込みを追跡して確認できたことから、第1主体部検出面よりは下層の面での検出となり、埋葬時の墓壙削面も第1主体部よりは下層となるのである。墓壙の半分と一部木棺上まで第1主体部によって切られていたが、木棺の下層にまでは及んでいない。このことから第2主体部は第1主体部より古いと判断される。墓壙の規模は約 $2.6 \times 1.2m$ の隅丸長方形の平面形をもち、内部から約 $1.6 \times 0.5m$ の隅丸長方形の平面形の木棺の痕跡が検出された。木棺自体は腐朽して残っていなかった。木棺の底は地表面を掘り込んでおり、船底状に湾曲している。棺の側面も斜めに立ち上がっており、割竹形木棺を埋葬したものであろうか。

棺の南辺に須恵器杯の2セットがやや北側に傾くように、棺底から離れて出土した。杯の蓋がずれている状況から、枕として用いたものではなく、棺上の土器が落ち込んだものと判断したが、木棺小口が斜めに上がる形態であれば、棺内に置かれたものがずれた可能性もある。東側の棺側からは鉄製大刀（M3）1振り、刀子（M2）1点、鉄鏃と思われる茎をもつ鉄器（M1）1点が出土した。大刀は鋒を北に向け、鋒が棺の北小口付近まで及んでいる。大刀鋒の方向から、被葬者の頭位は南にあるものと推測される。また、墓壙掘方埋土からは38・39の土器窓の破片が出土している。

更に墳丘の断ち割りの際に第1・2主体部の南西から第3主体部が検出された。第3主体部は第2主体部と約0.3mの距離で並ぶように構築されており、墓壙の南辺を掘っている。北側辺は土層確認用のトレンチによって切られているため、規模は不正確であるが、約 $2.7 \times 1.1m$ の隅丸長方形の墓壙に、約 $0.9 \times 0.6m$ の木棺痕跡が検出できた。棺の底はやや湾曲している。

南側の小口付近から須恵器杯が2セット（18～21）、棺内に落ち込んだ状態で出土した。棺上あるいは墓壙内に収められたものであろう。両者とも蓋を閉じた状態で出土しており、一方からは二枚貝の破片が出土した。また、もう一方の内面には赤色顔料が付着していた。

#### 4. 3号墳（図版13・14、写真図版14・15）

3号墳はA区の尾根の最も奥で検出された。墳頂部標高は220.2mで、ここからの眺望はあまり開けていない。

#### 周溝・墳丘

墳丘は、現況の地形からさらに2m弱ほど調査範囲外へ続き、尾根に直交する溝によって区画されるものと思われる。明瞭な墳丘をもたないが、尾根方向に長い長方形（約 $10 \times 9m$ ）の墳丘が想定される。

盛土は認められず、明瞭な周溝も検出できなかったが、おそらく尾根を直交方向に溝によって切断して区画するものであろう。南西部の周溝および墳丘の一部は2号墳の周溝によって抉られている。北

西側の墳丘斜面に山石が見られるが、これは地山の標が露出したものである。

#### 主体部

主体部は墳丘上面の平坦面のやや奥寄りに、表上直下で検出された。尾根の方向に長い長方形の平面形で、幅約1.1m、長さ2.6m以上、深さ約0.2mの規模の墓壙をもつ。墓壙内に木棺の痕跡を検出できた。木棺は幅約0.6m、長さ約2.2mで、調査区内に収まっている。底は平坦であり、箱形の木棺直葬と思われる。

木棺内からは遺物の出土はなかったが、木棺外の墓壙内から土師器杯（40）が出土した。他に墳丘からも遺物の出土は見られなかった。

また、墓壙・木棺に切られる形で、墓壙の西隅部に約1.2×0.6m、深さ15cmほどの平面形が隅丸長方形の土坑が検出された。この土坑の壁面は一部、火を受け赤化していた。埋土にも焼土・炭が含まれている。この土坑からは遺物は出土しなかった。主体部掘削以前の遺構で、葬送儀礼によるものか、更に古い時代のものは判別できなかった。

### 第3節 B区の調査

#### 1. B区の概要（図版15～34、写真図版16～36）

B区は北北東から南南西に伸びた支尾根で、尾根最上部は岩が露頭する急斜面となり、最下部は調査範囲外の山裾まで、やや西に曲がるように伸びている。B区調査前の最高標高は199.6m、最低標高は171.4mを測り、A区と比べて急斜面である。この地点には調査前に3～4段の方形の平坦地が認められ、中佐治城跡とも考えられていたが、調査の結果、すべて古墳であることが判明した。但し、最高所の巨岩が露頭する付近からは図2-2の16世紀代の白磁碗破片が出土しており、中世にも人々がこの山に登っていたことが窺われる。

3基の古墳が検出されたが、更に下方にも古墳状の高まりが存在するため、A区とは逆に標高の高い方から4・5・6号墳と呼称することにし、調査範囲外の高まりを7号墳と仮称することとした。（図版34）

#### 2. 4号墳（図版17～20、写真図版17～21）

B区で検出された古墳の中で、最も高い位置にあり、墳頂部標高193mを測る。調査前の状況で、すでに石棺の一部が露出しており、盛土がかなり流出したことがわかる。

##### 周溝・墳丘

墳丘は斜面上方を大きく弧状に掘削して、その上を円形に盛りだして構築している。斜面上方の弧状の掘削は最大幅約5mに及び、掘削最下部は溝状に掘り込んでいる。この周溝の底から掘削の及ぶ最高所までは約2.6mの高さがある。墳丘は円墳を意識して作られているが、尾根方向の大きさは、溝底から墳丘底までは約8m、尾根に直交する方向の墳丘規模は約12mとなる。墳丘の高さは、北側の周溝底から調査前の墳頂部までが0.45m、南側の墳丘底から調査前の墳頂部までが約2.5mの規模である。

周溝底の中央部、ちょうど主体部の横の位置から41・42の杯蓋や47の小型の甕が出土した。

## 主体部

墳丘頂部から尾根に直交する東西方向に主軸を置く主体部が検出された。この主体部は今回調査した主体部中、唯一の箱式石棺である。使用されている石材は丹波地方でよく用いられる流紋岩と思われるが、古墳群のある山塊では板状に剥離する石材は求められない。

斜面上方の側面・小口では、地山面に縦い溝を掘削して石材を据えているが、斜面下方は盛土となり、据え付け穴は確認できなかった。東西の両小口は板石を立て、その上に長方形の板石を横方向に積んでいる。北側の側面では、東2石は板石を立てており、その上に横積み或いは小口積みで一段積み上げている、西半分は1～2段小口積みした上に厚い板石を載せている。南側の側面も東1石のみ板石を立てて、その上に一段横積みしているが、残りの部分は小口積み或いは横積みで5段ほど積み上げている。箱式石棺は土圧により斜面下方に傾いており、内法は約2.0×0.4m、高さ0.6mを測る。蓋石は最大のもので約1.0×0.9mの大きさの板石を4枚並べており、蓋石間や側板との隙間を概ね二重に小型の石材で塞いでいる。口張りの粘土などは確認できなかった。

石棺内からは西側の小口に沿った位置から、鐵製の刀子（M5）が床面で、鎌（M4）が底から約5cm上で出土し、北側の棺側板に沿った西端からは、鎌を東へ向けて大刀（M8）が1振り出土した。南背部の底から約5cm上で鐵鍔の茎（M6）と考えられる破片が出土している。

蓋石上や石棺内の土壌から44～46の須恵器の破片が出土している。また、M7の鉄鋒はこの4号墳と斜面下方の5号墳間の斜面で採集されており、4号墳の棺上或いは墓壇内に置かれていたものが、転落したものと想定している。

## 3. 5号墳（図版21～30、写真図版22～34）

調査前の5号墳は、B区の斜面の中で12×10mの平坦部を有しており、ひときわ人為的な造成が認められる地形であった。尾根中腹に位置するが、この古墳からも遠阪川までの平地の眺望は開かれており、平地からも古墳の大きさを認めることができる。

### 周溝・墳丘

4号墳と同様に、斜面上方を大きく弧状に掘削し、その間に溝を巡らせている。斜面上方の弧状の掘削は最大幅約5mに及び、周溝の底から掘削の及ぶ最高所までは約3.7mの高さがある。周溝はわずかにくぼむ程度で、溝というよりは通路状になる。溝のほぼ中央の底をわずかに掘りくぼめた状態で、57の大型甕が出土した。また、溝の東端と石室の横口部から出土した墓道の交点付近からは58・59の土師器が出土している。

墳丘は盛土によって築造されており、厚い部分では約1.8m積み上げている。盛土は大きく2層に大別できる。下層は石室側壁を積み上げた高さまで盛っており、石室側面の控え石が上面に乗っている。この盛土は南北方向で約7.6mの範囲に及んでいる。上層の盛土は石室全体を覆うもので、墳丘規模のほぼ全域の範囲に及ぶものである。墳丘の高さは、北側の周溝底から調査前の墳頂部までが約0.8m、南側の墳丘裾から調査前の墳頂部までが約5.0mの規模である。円墳を志向した墳丘の直径は主軸（東西）方向で約19m、南北方向で約13mを測る。

墳丘の一部には蓋石が見られた。南側の墳丘裾から、幅約7.2m、高さ約3.2mの範囲で、30cm大の山石を配している。他三方の斜面墳裾からは理は検出されなかった。平地から見える部分にのみ配したも

のであろう。

### 主体部

墳頂部の平坦面から東に偏った位置で板石を重ねた主体部が見つかった。当初、4号墳と同様の箱式石棺墓と考えていたが、墳丘の中心に位置しないことや、東西の小口の構造が異なること、当初、墓域の掘り方と考えられた埠土の異なる範囲が東側に広がり、不明瞭になることなどから、東側に開口する竪穴系横口式石室である可能性が考えられた。このため、天井石の調査、石室内部の調査に引き続いだ、閉塞状況、前庭隔壁・墓道の調査を実施した。

天井石は3枚で、最大のもので $1.25 \times 1.1m$ のやや厚めの板石を用いている。3枚の板石は加工されており、互いに凹部と凸部を合わせ目にしている。奥壁側の合わせ目の方には、最大で $0.5m$ 方形の薄い板石を載せ、さらにその合わせ目に小形の板石を載せて目止めしている。第2石と玄門側の大井石の合わせ目には小形の板石を数枚載せた上に $1.1 \times 0.75m$ の板石をさらに重ね合わせている。目貼りの粘土などは確認されていない。

石室周囲の控え積みは、奥壁側では天井石の形状に合わせ、また高さも揃えて4枚の板石を奥壁最上段積み石の上に並べている。両側壁にも控え積みが見られるが、天井石の合わせ目付近に大きさ・形状の揃わない石を雑然と配している。側壁の控え積みも概ね1段で、南側では石室最上段積み石の下面付近の高さに置いている。

石室は、長さ $2.3m$ 、幅 $0.55m$ の狭小なものである。奥壁は $0.9 \times 0.65m$ の板石を、 $0.2m$ ほど地山を掘りくぼめた中に立てている。立石の下端は角を斜めに落とした形状である。上面は水平でその上に塊石を2段積み、さらに板石を2段積んでいる。

北側の側壁は最大で $1.2 \times 0.7m$ の板石を5枚立て並べている。立石の下端は地山面を溝状に掘りくぼめた中に埋め込んでおり、溝内の石室内側には6個の小形の石を詰めて立石を支えている。この支え石の上面は地山面より上に出ているため、檜台とも考えられたが、檜床面により埋没している。5枚の立石の形状は不揃いであるが、合わせ目はおそらく加工することによって、密着しており、隙間に小石を詰めた箇所は1ヶ所である。奥壁部分には別的小形の石を立てている。この5枚の立石の上面は不揃いであるため、2段目以上は大小の塊石を縦横に積んでいる。最上段は板石を用いているが、大きさは揃っておらず、積む方向もさまざまである。

南側の側壁は比較的大きさの揃った板石を4枚立てている。奥壁との間には別的小形の石を詰めている。立石は下端の角を落として、溝内に埋め込んでおり、小形の塊石を配して支えている。この4枚の立石の上面は比較的高さが揃っており、塊石を2段程度積んだ上に板石を載せて天井石を受けている。

横口部には $0.85 \times 0.75m$ の板石を溝の中に埋め込んで、粧石とし、段を設けている。この立石は石室高の半分ほどの高さで、さらに上面南側を欠いた石材を用いている。この板石は両側壁に挟まれており、南側の隙間に小形の板石を縫て詰め込んでいる。また、立石の石室内側の北半部には小形の板石を重ねて埋め込んでいる。この粧石は石室構築時に同時に配している。

閉塞は、粧石の外側に小形の板石を石室床面と同じ高さに敷いた上に、 $1.05 \times 0.75m$ の複数の板石を粧石に重ねるように載せている。板石との間に小形の板石が挟まれている。この閉塞石の外側の両脇には板石を2枚重ね、隙間に細かい縫を詰めている。さらに下部を埋めたのち、小形の石を敷いた上に小形の板石を載せ、閉塞を重ねている。このようにある程度埋めたのちに板石を立てて埋める行為を

3回以上行っているが、当初の閉塞石が天井石の下に納まっているのに対して、最終の閉塞石は天井石の外側まで離れ、前庭部が完全に埋まつた段階で石の上端がハの字に開いて露出している。

天井石を架構していない前庭部は、地山を0.4mほど掘りくぼめて作られているが、閉塞部に近い部分は石室に近い深さまで斜めに掘り込んでいる。この閉塞部の南側側壁では石室側壁の延長線上に小形の板石を貼り付けて、上に小塊石を積んでいるが、前庭部に近い部分では地山の上に小塊石を載せていくだけとなる。石を積んでいる範囲は、閉塞石から約1.5mの長さとなる。

北側の側壁には粗石の外側に1石板石をやや開いて立てており、その上にのみ小塊石を乱雑に積んでいる。積石は前庭部までは続いていない。前庭部は北側に広がり、周溝に取りつくようである。閉塞部や前庭部の埋土や床面からは遺物は出土していない。

石室内部床面には3cmまでのあまり大きさの揃っていない礫がほぼ全面に敷かれている。小礫の上にはシルト質の埋土が観察できるが、植の痕跡は確認できなかった。多くの遺物は小礫の上から直接出土している。

横口部に近い石室中央部からは、須恵器杯身2点(50・51)と短頸壺1点(52)が口を上に向けて出土している。また、近接した北側壁に沿って、鉄剣(M15)1振りが鋒を西側に向けて出土した。さらに鉄剣柄の下からは、銅鏡(M9)が鏡背を上にして出土した。銅鏡の下からは鏡の形に板材が残存していた。

奥壁に近い石室中央からは須恵器杯セット(48・49)がやや蓋をずらして正位置で出土している。杯の下や周辺からは鉄製の刀子、斧、鎌や鋤・鍬先(M10~14)が出土している。さらに近接した北側壁近くからは鉄鏡(M16~38)が一部錯着しているが、ばらばらの状態で出土している。一部は小礫よりも5cmほど高い位置から出土している。

墳丘の断ち切りをおこなったが、盛土からは遺物は出土せず、別の主体部などの施設も検出されなかった。

#### 4. 6号墳(図版31~33、写真図版35・36)

6号墳は今回調査した古墳群中、最も南側に位置し、標高175mの最も低い位置に立地する。この古墳からは前面の植林のため、眺望は極めて悪くなる。

この6号墳の南西に5mほど離れて、同様の規模あるいは一回り小さい、平坦部をもつ高まりがあり、同様の階段状の古墳と思われる。(図版34) この仮称7号墳墳丘の西側には大きな搅乱坑があるが、遺物等は採集されなかった。さらに下方の周辺からは須恵器片がわずかに採集されている。後世の搅乱など不明瞭ではあるが、さらにもう数基古墳が存在する可能性がある。

#### 周溝・墳丘

6号墳は斜面の上方を約5mの幅で削って、その土を盛り出して墳丘とする構造であるが、斜面上方の溝は確認できない。墳丘裾部が調査範囲外となるため、墳丘の規模は不明だが、東西約13.0m、南北約7.5m程度の段階式の古墳が復元できる。墳丘上からは表土削除の段階から須恵器が出土しており、盛土が流出、あるいは削平されているようである。

### 主体部

墳丘上面の平坦部から2基の土坑が検出されたが、木棺痕跡は確認できなかった。ともに礫を多く含む埋土であるが、これはこの古墳の立地する地盤が風化灘であることに起因するのであろう。

第1主体部とした土坑は、尾根に直交する方向に長軸をもつ約2.6×1.0mの開丸長方形の平面形をもち、15cmほどの深さである。埋土から遺物は出土しなかった。

第2主体部とした土坑は、墳丘上面平坦部の北東に偏った位置で、尾根に並行する方向の長軸をもち、約1.7×1.3m、深さ0.8mの規模をもつ。埋土には炭や地山のシルト質のブロックが含まれており、埋土からは遺物は出土しなかった。規模・埋土とも他の古墳の主体部の様相とは異なり、墓壇とは異なる可能性を残す。

前述のように墳丘上の表土直下から須恵器が出土しており、確認調査の際に出土したものも多い。第1主体部上面からは杯蓋63・有蓋高杯72・短頸蓋74が出土している。

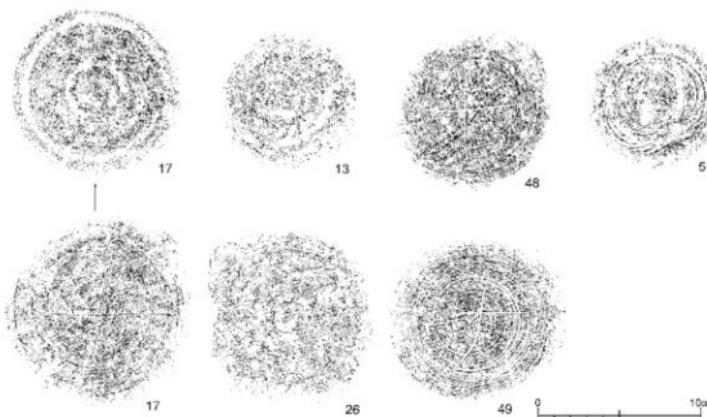


図3 須恵器杯拓影

## 第4章 遺物

### 第1節 1号墳出土の遺物（図版5、写真図版37）

#### 1. 概要

1号墳は削平が著しく、唯一検出できた主体部も非常に浅いものであった。墳丘の規模から見て、他にも主体部が存在した可能性はある。出土した遺物は須恵器のみであるが、墓壙内からは4の蓋が、主体部上面からは7の有蓋高杯が出土している。その他の土器も墳頂部から出土している。

墳頂部からは図2-1の扁平な大型の摘みをもつ須恵器杯蓋が出土しており、後世にもこの山が利用されていたことがわかる。

#### 2. 土器

##### 須恵器

4・5は有蓋高杯蓋である。

4は墓壙内南端底から出土した完形のもので、扁平な中くぼみの摘みをもち、天井部と口縁部を画する棱が突出する。口縁端部は内傾し段をもつ。

5は墳頂部や主体部上、表土下、確認調査トレンチから出土した。扁平な中くぼみの摘みをもち、天井部と口縁部を画する棱が突出する。口縁端部は内傾し段をもつ。口縁端部は外方へ広がる。天井部内面には一方向の仕上げナデが施される。

6～9は低い脚部をもつ有蓋高杯である。

7はほぼ完形で、主体部南端底から出土している。6・8・9は主体部上面や表土、確認トレンチから出土しており、口縁部を大きく欠損している。

6の杯部は口縁端部を欠くが、たちあがりはわずかに内傾する。底部内面に仕上げナデを施す。長方形の三方透かしを切る脚部の脚端部は丸く肥厚させ、上端部を突出させる。

7の杯部のたちあがりはわずかに内傾し、口縁端部は丸く納める。他のものより比較的高い脚部は長方形の三方透かしを切り、脚端部は丸く折り曲げるよう肥厚させ、下端部を突出させる。

8の杯部のたちあがりは内傾し、口縁端部は内傾し底面をもつ。脚部は長方形の三方透かしを切り、脚端部は外方を丸く肥厚させ、下端部を突出させる。

9の杯部のたちあがりはわずかに内傾し、口縁端部は内傾し段をもつ。比較的低い脚部は台形あるいは三角形の三方透かしを切り、脚端部は丸く肥厚させ、下端部、上端部を突出させる。

10～12は扇である。外面に灰被りが観察され、同一個体の可能性もあるが接合できなかった。墳頂部や主体部上、表土下、確認調査トレンチから出土している。

10は口縁端部の小片である。端部は内傾し段をもつ。外面には6～7本単位の櫛描き波状紋を施し、下端には沈線状の段をもって屈曲する。11は頭部の破片である。突帯とその上の沈線状の段の上部にはわずかに櫛描き波状紋が残る。突帯の下部にも15本単位の櫛描き波状紋を施す。12は体部の破片である。丸底から半球形の体部に至り、く字に屈曲して肩部となる。底部外側は板ナデが残り、他は横方向のナデによって仕上げる。胴部には二条の幅の広い沈線間に櫛描き列点紋を施し、円孔を穿つ。

## 第2節 2号墳出土の遺物 (図版10~12、写真図版38~40・46)

### 1. 概要

2号墳からは多くの遺物が出土している。墳丘盛土や周溝内、墓壙埋土、棺埋土などから土器・ガラス玉が出土しており、第2主体部棺内からは金属器が出土している。古墳に伴う須恵器・上師器は主体部に伴う完形の杯の一群と、一部墓壙内に落ち込んだが、墓壙上や墳丘上に置かれ、破片となって出土するものがある。

古墳に伴わない遺物として、墳丘斜面からは図2-3の青磁碗底部が出土している。高台内周囲及び底面の釉薬を搔きとっている。13世紀代の龍泉窯系のものである。

### 2. 土器

#### 須恵器

13は第1主体部の棺底から約20cm上から完形で出土した須恵器杯である。棺上或いは墓壙内に置かれたものが落ち込んだものと考えられる。たちあがりがやや内傾し、口縁端部は匙面が残るが、丸くなる。器高は4.35cmと低い。底盤内面に同心円の当て具の痕跡が残る。

14~17は第2主体部棺内南東小口付近から出土したほぼ完形の杯身蓋である。棺上或いは墓壙内に置かれたものが落ち込んだものと考えられる。14・15がセットとして北側から、杯身が上の状態で出土しており、16・17がセットとして南側から、杯蓋が上でややずれた状態で出土している。

14・16は杯蓋である。

14の大井部と口縁部を画する棱は甘く、わずかに突出する。口縁端部は内傾し、大井部内面には一方向の仕上げナデが施される。

16の天井部と口縁部を画する棱は甘く、わずかに突出する。口縁端部に明瞭な段をもつ。天井部内面には一方向の仕上げナデが施され、赤色顔料が付着している。

15・17は杯身である。

15はたちあがりがわずかに内傾し、口縁端部は内傾し匙面をもつ。口径は9.85cmを測る。

17はたちあがりがわずかに内傾し、口縁端部は内傾し匙面をもつ。口径は11.75cmを測り、大型化の傾向をみせる。底部外面には焼成前にヘラによって「×」形のヘラ記号が刻まれている。また、底部内面には非常に細かい同心円当て具痕が残されている。赤色顔料は肉眼では認められない。

18~21は第3主体部に伴って出土したほぼ完形の杯身蓋である。棺の南東小口付近から出土しており、棺上或いは墓壙内に置かれたものが棺内に落ち込んだものであろう。18と19、20と21がセットの状態で出土した。19の中には一枚貝の貝殻一個体分が納められていた。また、20・21の内面には赤色顔料が付着しており、特に蓋である20で顕著で、受部にも観察できる。

18・20は杯蓋である。

18は天井部と口縁部を画する棱が形骸化し、甘い凹線状になる。口縁端部は内傾する。天井部はやや平坦となり、灰が被る。

20は天井部と口縁部を画する棱が形骸化し、甘い凹線状になる。口縁端部は内傾する。

19・21は杯身である。

19はわずかに内傾するたちあがりで、口縁端部は内傾するが、甘い。器高は4.2cmと低い。底部内面

に仕上げナデがみられる。外面には灰が被る。

21はわずかに内傾するたちあがりで、口縁端部は丸く収める。器高は4.1cmと低い。内面の赤色顔料は受部にも及んでいる。

22は第1主体部墓壙掘り方北東部の表土下から出土した完形の杯蓋である。天井部と口縁部を画する稜は突出し、天井部はやや平坦である。口縁端部には円線を巡らせる。内外面に灰被りが顯著である。内面には赤色顔料が付着している。

23~28・30~34は2号墳の墳丘上或いは墓壙上や墳丘斜面、周溝内から出土したもので、すべて破片、あるいは破片がある程度まで接合できたものである。墳丘上の祭祀に伴うもの可能性が高い。

23は第1主体部墓壙埋土上層から出土した杯蓋で、約1/2の破片である。天井部と口縁部を画する稜は甘く、わずかに突出する。口縁端部は甘く内傾する。

24の杯蓋は第1主体部墓壙埋土上層出土の破片と墳丘表土下20cmまで出土の破片が接合できたもので、約1/2の大きさとなった。天井部と口縁部を画する稜は甘く、わずかに突出する。口縁端部は内傾する。

25~27の杯蓋は第1主体部墓壙埋土上層出土の破片と第1主体部上面や墳丘頂部、墳丘斜面、周溝上層のものが接合できた。

25・27は天井部と口縁部を画する稜は突出する。口縁端部には内傾し、天井部内面には一方向の仕上げナデが施される。

26は天井部と口縁部を画する稜は形骸化し凹線状になるもので、口縁端部は内傾する。天井部内面には回転ナデ後に同心円當て具痕が付けられている。

28の杯蓋は周溝上層から墳丘斜面で出土した。口縁端部が内傾し段をもつもので、天井部と口縁部を画する稜が明瞭なもの。

29は第1主体部墓壙掘り方北東部表上下から出土したほぼ完形の杯身である。たちあがりがわずかに内傾し、口縁端部に内傾し匙面をもつ。

30~32は墳丘上面、主体部上面、墳丘表土下20cmから出土した破片が接合できた杯身である。30のたちあがりはわずかに内傾し、口縁端部は内傾し匙面をもつ。

31・32は器高・体部高の低いものである。32は墳丘斜面から周溝上層で出土した杯身であるが、底部にわずかに工具痕が残ることから有蓋高杯の可能性がある。この古墳からは他に有蓋高杯が出土していないことから杯身として扱う。比較的短いたちあがりはわずかに内傾し、口縁端部は丸く収める。

33は2号墳墳頂部、主体部上面、表土出土のものが接合できた須恵器蓋である。体部の3/4まで復元できたが、口縁端部は失われており、意図的に打ち欠いた可能性が考えられる。残存部では胸部の穿孔はみられない。球形の体部から外反する頸部へと続く。頸部上端には突帶を巡らせる。底部周辺は粗い板ナデ状の調整を施す。外面と頸部・底部内面に自然釉や灰被りが見られる。

34~37は2号墳墳頂部、主体部上面、墳丘斜面、南側周溝、表土出土のものが接合できた須恵器蓋・横瓶である。35~37は第1主体部墓壙掘り方埋土上層からも破片が出土している。

34は器高24.7cm、口径14.3cmの小形の蓋で、球形頸部から大きく外反する口縁部へと続く。口縁端部

は肥厚させ、外面に凹線を巡らせる。丸底の底部の外面には3本/cmの平行タタキが斜め方向に施され、内面には同心円當て具痕が残る。胴部から肩部にかけては、縱方向の3本/cmの平行タタキが施された後、横方向のカキ目状の板ナデを施す。内面は横方向のナデで仕上げる。頭部から口縁部は内外とも横方向のナデで仕上げる。

35は器高28.95cm、口径18.0cmの一回り大きい甕で、球形胴部から大きく外傾する口縁部へと続く。口縁端部は外方へ肥厚させる。丸底の底部の外面には4本/cmの平行タタキが斜め方向に施され。胴部から肩部にかけては、縱方向の4本/cmの平行タタキが施された後、横方向のカキ目状の板ナデを施す。内面には同心円當て具痕が残り、底部と胴部の境付近の粘土接合部と思われる周辺はナデ消されている。頭部から口縁部は内外とも横方向のナデで仕上げる。

36は35の甕の底部と同様の外面平行タタキと内面同心円當て具痕と、一部縫状にナデ消しが残された破片と、頭部から統く角度が直交方向で異なる口縁部の破片から復元した横瓶である。外反する口縁部の端部は外方に肥厚させ横方向のナデで仕上げる。頭部から肩部には縱方向の平行タタキ後、縦方向のナデが施される。

37は器高約57.6cm、口径約27.2cmの人形の甕で、球形胴部から大きく外反する口縁部へと続く。口縁端部は丸く肥厚させる。口縁端部下には2条の門線、その下に28~30本単位の櫛掻き波状紋、さらに2条の凹線を挟んで、8~10本単位の櫛掻き波状紋を施す。丸底の底部の外面には3本/cmの平行タタキが斜め方向に施され、胴部下半から肩部にかけては、縱方向の3本/cmの平行タタキが斜め方向に施され、胴部上半部には横方向のカキ目状の板ナデが部分的に施される。内面には同心円當て具痕が残る。頭部内面から口縁部は横方向のナデで仕上げる。頭部内面から肩部外面にかけて自然釉、灰被りがみられ、一部に窯壁や他の土器片が付着している。

### 土師器

38・39は土師器甕である。同一個体の可能性があるが、内外面の調整方向が異なることから別個体とした。

38は第2主体部墓壙掘り方、墳丘盛土、墳丘斜面出土のものが接合した。短く外反し横方向のナデで仕上げる口縁部と、丸底球形の胴部下半破片から復元した。胴部外面の調整は磨滅のため不明であるが、内面の底部にはユビオサエ後ナデが施され、胴部下半には斜め上方向のヘラケズリ、上半には横方向のヘラケズリが施される。

39は第2主体部墓壙掘り方埋土から出土した。胴部上半から肩部の破片である。球形の胴部の外面下半には縦方向のハケ、肩部には斜め方向のハケによって調整される。内面は胴部下半が上方向のヘラケズリ、上半から肩部が横方向のヘラケズリによって調整している。

### 3. 金属器

第2主体部の北東側の棺側から大刀・刀子・鐵と思われる茎部の3点の鉄器が出土した。大刀は鉾を北西の小口方向に向け、刃をやや下に向けて収めてあった。

### 鐵

M1は大刀の柄部に付着して出土したもので、残存長10.45cm。下端から4.8cmの部分で全周に段をも

ち、段以下には丸く木質が付着していることから、茎となるものと思われる。断面は方形を呈する。形状が5号墳出土の鉄鎌に近いところから鉄鎌と考える。上半部にも木質が付着するが、これは密着していた大刀に起因するものであろう。

### 刀子

M2の鉄製刀子も大刀に近接して出土した。全長12.7cmで、茎から両側をもって刃部にいたる。刃部は間に近い部分が大きく刃間に幅を広げるが、中央部の刃幅は1.6cmを測る。茎部には有機質が付着しており、柄が装着されていたらしい。奥付近では、木質状の上に皮膜状の痕跡が見られることから、鹿角装の可能性もある。

### 大刀

M3の鉄製大刀は柄元部を欠損するが、現存長95.9cm、最大刃部幅3.8cm、刃部長79.0cmを測る。刃部は直線的であるが、柄部はやや内湾する。柄部から刃部の形状は、背側にも緩やかな湾が見られる両側である。

刃部の表裏面とも主軸方向の繊維痕をもつ木質が付着しており、鞘が装着されていたことがわかる。刃部半ばの木質の上に主軸方向と交差する方向の有機質が複数できる。付着している部位は刃側で、柄の底側であるため、刀装具ではない。鞘を構成する木質とは異なり、やや多孔質であることから、人骨或いは棺材であろう。鞘は間から約2cmの位置に端部が見られ、縫の痕跡と思われるが、材質は不明である。柄部の柄尻に近い位置に目釘孔と思われる痕跡が見られるが、X線写真では抜けていない。柄部の表面にも有機質が付着するが、顕著な木質状は呈しておらず、布目状に観察できる部分も見られる。

## 4. 玉

### ガラス玉（巻首カラー図版7）

2号墳の第1主体部埋土から、今回の調査で唯一のガラス小玉が1点出土した。第1主体部館内や、第1主体部墓擴に切られた第2主体部からも、他には玉類は出土していない。濃いブルーの色調をもち、やや濁った透明なガラスで、一部に気泡が見られる。直径3.0mm、高さ2.5mmを測り、直径1.0mmの穴が通る。

## 第3節 3号墳出土の遺物（図版14、写真図版41）

### 1. 概要

3号墳から出土した遺物は非常に少なく、墓擴内から土師器が1点出土したに過ぎない。

### 2. 土器

#### 土師器

40は墓擴内の北側の棺側小口付近から出土した土師器杯である。出土した高さは、棺痕跡検出面であるが、墓擴底に近い高さからの出土である。手づくねによって作られた肉厚の個体であり、器表面の

風化が著しいため、調整は不明である。

## 第4節 4号墳出土の遺物（図版20、写真図版41・46）

### 1. 概要

B区最上部に立地する4号墳では、斜面上側の周溝内から須恵器箋などが出土し、石棺上面の墳丘盛土や石棺内に流れ込んだ埋土からも若干の須恵器破片が出土している。また石棺上面か墳丘盛土から転落したと思われる鉄製鉗がある。石棺内からは大刀や工具類などの鉄器が出土している。

4号墳の斜面上方の岩盤が露出した付近からは同2-2の白磁碗の口縁部が出土している。大きく開いた口縁部から外反する口縁端部へと続く。16世紀頃のものである。

### 2. 土器

#### 須恵器

41～43は蓋である。有蓋高杯の蓋であろう。

41・42は北側の周溝から出土し、扁平で中くぼみのつまみをもつ。天井部と口縁部を画する稜は突出する。口縁端部は内傾して段をもつ。42の口縁端部は外方に突出する。

確認調査時に出土した43はつまみを欠損する。天井部と口縁部を画する稜は突出する。口縁端部は内傾して段をもつ。

44は石棺上から出土した杯身の破片である。脚をもつものかもしれない。たちあがりはわずかに内傾し、口縁端部は内傾して段をもつ。

45も石棺上から出土した高杯破片である。44と同一個体となる可能性がある。下方に屈曲し、外側に面をもつ脚端部で、円形の透かし孔が見られる。有蓋高杯は1号墳、6号墳から出土しているが、円孔をもつものはこの1点だけである。円孔透かしをあける高杯は同時期の但馬鬼神谷窯跡ではみられず、旧多紀郡丹南町の鶴谷窯跡では確認されている。

46は石棺埋土中出土した短頸壺小片である。やや内傾して短く立ち上がる口縁部から張った肩部の小片で、横方向のナデによる調整後、肩部に描書き列点紋を斜めに並べる。肩部の器壁は厚い。口縁端部が内傾する。

47は北側の周溝の底付近から出土した甕で、口縁部の一部を欠く以外は完形で出土した。器高20.25cm、口径15.65cmの小形の甕で、球形の胴部から大きく外反する口縁部へと続く。口縁端部は肥厚させ、外側に面をもつ。丸底の底部の外面には平行タタキが斜め方向に施され、内面には同心円当て具痕が残る。胴部から肩部にかけては、縱方向の平行タタキが施された後、間隔を開けた縱方向のナデを施し、更に横方向のカキ目状の板ナデを施す。内面は横方向のナデで仕上げる。口縁部は斜め方向のナデを施し、頸部から口縁部は内外とも横方向のナデで仕上げる。

### 3. 金属器

#### 鎌

M4は石棺内西端の底付近から出土した鉄製鎌である。鋒を失うが、残存長13.9cm、基部幅約2.5cmを測る。背は直線的であり、刃は緩やかに湾曲しており、徐々に刃幅を狭めるが、湾曲部で再び刃幅を広げる細長い形態である。基部端全体を緩やかに折り返しておらず、その部分に幅2cm程の木質が残る。柄に装着されていたものであろう。木質の痕跡から計測すると、約70°の銛角で装着されていたものと推測できる。

#### 刀子

M5も石棺内南端部床面上から出土した鉄製刀子である。全長15.0cmで、茎から刃部は背面側が大きい両側をもつ。刃は刃間付近が広がり、幅1.7cmと最も広く、徐々に先細りとなる。長さ5.2cmの茎は徐々に細くなり、先端は丸く納まる。柄部には有機質が付着しており、柄が装着されていたものであろう。基端部がわずかに曲がっている。

#### 鎌

M6は石棺内南半部の底から5cmまで出土した。断面が円形の棒状を呈したもので、上部が欠損している。不明瞭ながら螺旋状に捩れており、表面には有機質が見られることから鉄鎌の茎部と考えている。

#### 鉢

M7は4・5号墳間のトレンチ1の横から、本発掘調査時の掘削前に表面採集されたものである。採集された段階でのひび割れ等の劣化は他の鉄器より進行していたが、比較的新しい劣化であり、保存処理段階で観察すると、金属部分の状態は他の鉄器と同様であった。当初、該当するB区には山城が存在していると考えられていたことから、中世に属するものとも思われたが、古墳時代に類似した製品が存在することから、斜面上方の古墳に伴うものとした。確認調査時かそれ以前に流出したものであろう。斜面上方の4号墳は蓋石が露出していたが、開けられた状況は認められなかったことから、4号墳の棺上或いは墓壙内に埋蔵されていた可能性が最も高いものと考える。

鉄鉢で、両端部を欠損するが、残存長27.4cm、残存刃部長14.9cm、円筒状の袋部直径3.1cmを測る。全体に先細りの形状をもち、身部の下端には間は認められない、無間のものである。刃部も先細りの形状で、刃を広げて作り出すことはしていないが、身部下端の幅1.8cm、厚さ1.5cmで、断面は菱形の形状を示す、鎌造りである。袋部の断面は円形で、1ヶ所に目釘孔を有する。袋部の接合痕はX線写真でも不明瞭である。袋端部は山形折り式であろうか。

#### 大刀

M8は、石棺北西の角に柄端を置き、鋒を南東方向に向けて、棺側に沿うように出土した大刀である。全長89.05cm、最大幅3.4cmの鉄製大刀で、直線的な刃部とやや内湾した柄部をもつ。刃部長は73.0cmで、片側造りである。鋒は背面側がやや丸くなる。

刃部の片面には主軸方向に沿った木質が残存しており、柄が装着されていたものと思われる。柄は

間の位置で途切れる。柄部には2ヶ所の目釘孔が見られる。納部にも有機質が観察できるが、背側には幅2mm以下の糸巻きの痕跡が観察でき、糸巻き痕の下部に木質が一部見られる。

## 第5節 5号墳出土の遺物（図版28～30、写真図版42・43・47～49）

### 1. 概要

唯一の石室をもつ5号墳では、斜面上方の周溝から須恵器大型壺が、周溝と石室墓道合流部からは土師器が出土している。墳丘盛土からの遺物の出土は見られない。石室内部からは横口部北寄りから須恵器杯・短頸壺、銅鏡、鉄剣が、奥壁周辺から須恵器杯、鉄製農工具類、鉄鎌が出土している。

### 2. 土器

#### 須恵器

48・49は石室内央壁中央付近から杯蓋が少しずれて被せられた状態で出土した、ほぼ完形の杯身蓋セットである。両者とも外側に「×」状のヘラ記号が焼成前に付けられ、自然種が付着する。

48の大井部と口縁部を調する様は一部にのみ甘く残り、ほぼ四線状をなしている。口縁端部は内傾しているが、棱線は甘い。口径13.2cmと比較的大型となる。

49のたちあがりはわずかに内傾し、口縁端部は内傾しているが、棱線は甘い。受部は沈線状にくぼむ。口径が11.4cmと比較的小型となる。内底面に褐色の付着物がみられる。

50～52は横口部中央付近から口縁部を上にして出土した、ほぼ完形の杯身、短頸壺である。

50・51の杯は、たちあがりがわずかに内傾し、口縁端部は内傾して段をもつ。50の受部には沈線状のくぼみが温る。51の底部内面には当て具の痕跡が残る。

52の短頸壺は、扁平な肩部からあまり張らない肩部を経て直立する口縁部へと続く。口縁端部は丸く收める。底部から肩部までの外面は回転ヘラケズリ、肩部から口縁部、内面は回転によるナデによって仕上げている。

53は石室埋土上層から出土した壺口縁部である。口縁端部を拡張して外側に面をもつ。

54は確認調査時の出上であり、また、55・56は北側周溝埋土上層から出土している。これらの壺類は斜面上方の4号墳から転落した可能性もあるが、5号墳所属とした。すべて体部の1/2以下しか残存していない。

54は扁平な体部をもつもので、肩部の屈曲は丸い。胸部下半外面はヘラケズリ状の板ナデ後、ナデによって仕上げる。胸部上半から肩部はカキ目状の板ナデを沈線状に巡らせ、櫛搔き列点紋を施す。内面下半は工具によるナデ、上半は指オサエを残しながら横方向のナデで仕上げる。

55も扁平な体部をもつもので、肩部の屈曲は丸い。胸部下半外面は平行タタキを残してナデによって仕上げる。胸部上半から肩部はカキ目状の板ナデを部分的に巡らせ、横方向のナデで仕上げる。肩部には自然釉がかかる。内面は指オサエを残しながら横方向のナデで仕上げる。

56はやや扁平な体部をもつもので、肩部の屈曲は丸い。胸部下半外面は格子状タタキ後、ナデによ

って仕上げる。胸部上半から肩部は横方向のナデで仕上げるが、一部に布圧痕を残す。内面下半は同心円状の當て具痕を残し、上半は横方向のナデで仕上げる。

57の大型甕は北側周溝底のほぼ中央で、押しつぶされたようにほぼ一個体分が出土している。やや肩の張った球形の体部に直立する口縁部が付く。外面には、底部は斜め方向、それ以上は縦方向の格子状タタキで成形している。底部は不定方向のナデ、それ以上は横方向のカキ目状の板ナデを巡らせる。板ナデは上半部が全体的に、下半部は間隔を開けて施されている。内面には同心円當て具痕が残される。口縁縫部は内傾し、四角く収める。口縁外面はカキ目状の板ナデを巡らせ、端部から内面は横方向のナデによって仕上げる。

#### 土師器

58は北側周溝上層から出土した土師器杯で、斜面上方の4分墳に属する可能性を残すが、より近接する5号墳出土とした。扁平な半球形を呈し、口縁部内面は直立して尖らせる。内面には横方向のヘラミガキ状の痕跡がわずかに残る。内面の一部に赤色顔料が付着しており、資料をエネルギー分散型蛍光X線解析装置で分析したところ、水銀のピークは出ず、鉄のピークが顕著であった。

59は北側周溝東端と石室墓道が合流する部分の地山直上から出土した。楕円形の杯部をもつ高杯で、筒部を挿入して脚部としている。杯部は扁平な半球形を呈し、口縁部内面は直立して尖らせる。短く水平方向に開いた脚端部は丸く收め、脚内面は浅くくぼむ程度である。杯部側面と脚部下面の同じ側に黒斑がみられる。

### 3. 金属器

#### 鏡（巻首カラー図版7）

M9は石室内床面の横口部北側壁近くで、鉄剣の下から出土した青銅鏡である。鉄剣の柄の直下から鏡背を上にして出土している。鏡の下からは鏡と同じ円形の形状をした木製の板が出土したが、樹種同定の結果、ヒノキであることがわかった。鏡背にもわずかに纖維痕が認められるが、材質は不明である。木質かもしない。

直径8.9cmの珠文鏡で、鏡面に覆われるが、鏡面・鏡背の一部は黒色に光沢をもつ。幅0.85cmの半縁の厚さは0.3cmを測る。鏡面は平滑に仕上げられており、周縁部分がわずかに反った凸面を呈している。鏡本体の厚みは0.1~0.18cmである。

鏡背には、直径2.25cmの一部二重に重なる凸圓線の鉢座の中に、高さ0.8cmの重な円形の鉢が鏽出される。鉢の頂部はやや尖り気味であるが、丸く仕上げている。鉢孔は鏽上がりが悪く、円形に近い方形を成す。糸孔には顯著な研磨は認められず、また粗擦れの痕跡も認められない。紐の残欠かと思われる褐色のものが付着している。

内区には、幅0.85cmの珠文帯が巡る、珠文は二列巡るが、列間に施文されたものもある。珠文は外側28、内側24を数え、直径1mm程度の大きさであり、数個に1個や直徑の大きなもの（直徑2mm）が認められるが、規則的ではない。珠文の頂部はやや扁平のものもあるが、概ね丸い。外区には、幅0.45cmの二重の凸圓線で挟まれた直行凸橢曲（放射）文帯、更に外側に幅0.45cmの凸複波文帯、幅0.55cmの外向凸橢曲文帯が巡る。複波文は、二重であるが、一部に外側が波状ではなく圓錐状になる部分がある。

鋸齒文は一部湯流れが悪く文様が失われるが、55を数える。鋸齒文の凹部には圓線状の細い凸線が一部に見られるが、文様ではなく、鋳型のひびかもしれない。

X線透過写真でみると、湯流れはよく、粒は顯著にはみられない。

## 斧

M10は石室西端部奥壁付近の須恵器杯48・49の直下から出土した鉄斧である。袋状鉄斧で、長さ7.5cm、刃幅3.6cmの小型のもので、袋部の幅2.4cm、高さ1.6cmを測る。袋部から肩をもたず刃幅を広げており、両側から折り返した袋部は完全には接合しない。袋部内面には木質が残存し、外面にはやや粗い布の痕跡が残る。

## 刀子

M11は石室西端部床面付近から出土した鉄製刀子である。鋒部を欠損し、残存長6.7cm、刃幅1.25cmを測る。3.1cmの長さの茎から小さな両側をもって刃部に続く。茎には木質が付着しており、柄が装着されていたものと思われる。木占墳群から出土した刀子としては最も小さい。

## 鎌

M12は石室西端部奥壁付近の須恵器48・49の直下から出土した鉄製鎌である。刃幅2.1cmの基部から、ほぼ同じ幅で背部を緩やかに湾曲させ、先端部は大きく屈曲する。基部端全体を大きく直角に近く折り返しているが、この部分の木質は脱落している。刃部中央の1面に縦3本/3mm、横3本/2mmの布の痕跡が残存しており、その状況から脱落した木柄の装着状態が推定でき、その角度は120°の鈍角を示す。

## 鍔・鍔先

M13・14は石室西端部床面付近から出土した鉄製鍔・鍔先である。両者は接合できず、また、中央部を失うが、同一個体であろう。長さ8cm以上のものが復元でき、小型の部類に属する。刃先長は2.7cmを測るが、耳部先に向かって細くなる。U字形の鉄板の内側側縁に深さ0.4cm以下のV字形の切れ目を耳部端まで入れている。本来はこの切れ目に木製の鍔・鍔の台先端を挿入したものであるが、木質は見られず、表面に縦横3本/2mmの布痕跡が残存することから、鍔・鍔先のみを布で包んで副葬したものであろう。

## 剣

M15は鉄劍である。剣は今回調査した中で、唯一の出土である。横口部に近い位置の石室北側壁に沿って、鍔を奥壁に向けて出土した。この剣の下から銅鏡が出土している。

全長77.7cm、最大幅3.4cmを測り、緩やかな両側造りである。刃部長は61.65cmである。鍔先は錐彫れのためか、やや丸くなる。出土時の下面にのみ有機質が残存するが、刃部には主軸方向の木質が見られ、鞘に装着されていたものと考えられる。関部には幅0.7cmにわたって木質が途切れる部分が帯状に観察でき、鍔の痕跡と思われる。また、関の柄側にも木質が途切れる部分が帯状に見られ、鍔元具が存在したものと思われるが、両者は金具としては存在せず、材質は不明である。柄部には2ヶ所の目釘孔が見られ、関側の目釘孔以上には木質が主軸方向に観察できる。柄尻はやや丸くなる。

## 鐵

M16～38は石室西端部床面付近から出土した鉄鎌である。M16～21は頭部付近が、M22・23、M24・25はそれぞれ並列して互いに接着して出土している。茎部に木質が見られることから、副葬時には矢柄に装着して束の状態で扱われたものであろう。鎌を揃えてまとめて出土しておらず、出土範囲がやや広く、出土層位に上下がみられるのは、棺上或いは壁面に立てかけられていたためであろうか。接合できなかつた茎部のみのものもあるが、合計で21点以上存在していたのであろう。

すべて同じ型式の細根系長頭鎌と呼ばれるもので、刃の付く鐵身部、輪状の長い頸部、細く尖らせて矢柄に装着する茎部をもつ、狭身有軸式である。刃部は丸丸或いは内鑄造りで、角闘或いは小さな逆刺（脇抉）をもつ。頭部断面が方形で長く、茎部と頸部間は全周に段を作った角闘、茎部には矢柄の痕跡の有機質が付着している。

刃部は拂葉形であるが、頭部とは水平方向の段である闊造りのもの（M21・23・25・26・28～30・32・34・35）、小さな逆刺が作られるもの（M16・18～20・22・24・27・31・33）がある。頭部下端の断面形が正方形に近いもの（M19・34）と長方形のもの（M30・33・35）など若干の造りの違いが認められる。茎部で観察できる矢柄との接着痕には、木質以外に木質の上部で、糸巻き状の痕跡が見られるもの（M17・24・26・37）、樹皮状の皮膜が見られるもの（M26・27）がある。但し、M37の茎部では木質より下部に横方向の5本/2mmの繊維痕が見られることから、布を巻いた後に矢柄へ挿入したものかもしれない。

全長は短いものでM33の16.4cm、M20の16.5cm。長いものでM30の18.2cm、M17・25の18.1cmを割り、平均で17.44cmとなる。矢柄に隠れてしまう茎部を除いた、頭部下端から刃部先端までの長さは、短いものでM16・32の10.2cm。長いものでM17・34の10.7cmを測り、平均すると10.41cmとなり、0.3cm以上の誤差はない。鋳造などによる形状変化を考えても非常に規格化されており、同一工房の製品であったか、少なくとも同じ大きさの製品を並んで副葬したことが伺われる。

## 第6節 6号墳出土の遺物（図版33、写真図版44・45）

### 1. 概要

最も低い位置で検出できた6号墳からは須恵器のみが出土しており、ほとんどが墳丘上面の表土直下からの出土であるが、一部は主体部上にあったものと考えられる。

### 2. 土器

#### 須恵器

60～64は杯蓋である。60が口縁部の一部を欠損した完形に近い形状である以外は、過半を失った破片である。

60の天井部と口縁部を画する後は突出する。口縁端部は内傾して段をもつ。天井部内面には一方向の仕上げナデを施す。

61・64の天井部と口縁部を画する後は甘く、凹線状になる。口縁端部は内傾して段をもつ。

62・63の天井部と口縁部を画する後は突出する。口縁端部は内傾して段をもち、端部は外方に突出

する。

65~69は杯身である。65が完形である以外は欠損部が大きい。

65はたちあがりがわずかに内傾し、口縁端部は段をもつ。底部内面には一方向の仕上げナデが施される。底部外面には他の土器片が付着する。外面には灰被りがみられる。

66はたちあがりがわずかに内傾し、口縁端部は内傾する。外面には灰被りがみられる。

67はたちあがりがわずかに内傾し、口縁端部は四角く取める。底部外面には他の土器片が付着する。外面には灰被りがみられる。器壁はやや厚い。

68はたちあがりがわずかに内傾し、口縁端部は内傾して段をもつ。器壁はやや厚い。

69はたちあがりがわずかに内傾し、口縁端部は内傾して段をもつ。

70・71は扁平な中くぼみのつまみをもつ有蓋高杯である。

70のつまみは外方に突出しない。天井部と口縁部を画する稜は突出し、口縁端部は内傾して段をもつ。

72・73は短い脚部をもつ有蓋高杯である。

72は一部を欠損して、主体部の北東から出土した。杯部はたちあがりがわずかに内傾し、口縁端部は内傾して段をもつ。脚部には台形の三方透かしが切られ、杯底部までカキ目が巡る。脚端部は下方に突出し、回転ナデで仕上げる。

73は杯部上半を失う。杯底部内面に同心円状の当て具痕がわずかにみられる。脚部は長方形の三方透かしが切られる。

74は主体部の北東から出土した短頸壺である。やや扁平な球形の体部から、丸く張った肩部に直立する短い口縁部が付く。丸底の底部外面は不定方向のヘラケズリ後、ナデによって仕上げる。腹部下半はカキ目状に横方向にナデ、上半部から内面は横方向のナデによって仕上げる。口縁端部は丸く収める。

75は口縁端部を失った壺である。意図的な打ち欠きかもしれない。肩平球形の体部から大きく聞く頭部に続き、屈曲して口縁となる。底部外面は不定方向のヘラケズリ、他は横方向のナデによって仕上げる。胴部には二条の沈線間に櫛描き列点紋を施し、円孔を穿つ。円孔外面は器表面が剥離している。頭部には12本単位の櫛描き波状紋を施す。

#### 【参考文献】

- 後田賀次郎・暮田一郎 1978「大宰府出土の輸入陶器について—型式分類と銅年を中心にして—」『九州歴史資料勉強論集』4 治田征弘2006「まとめ」『加都遺跡Ⅱ』兵庫県教育委員会  
妻田晋郎1986『古墳地方北西郡』、『須恵器集成図録』第2巻近畿地方Ⅱ 雄山閣出版株式会社  
永井信弘1994『雄略における古墳時代須恵器の変遷』『小谷遺跡(第6次)』加西市埋蔵文化財調査報告27 加西市教育委員会  
猪川榮次郎 1979『古鏡』 新潮社  
覆本誠 2002『兵庫県の出土古鏡』学生社  
今井裕1991「平、西国地方出土古文・篆文統一・津文統一 小型便鏡の西朝対I—I」『古代吉備』第13集 古代吉備研究会  
橋本達也2004『円鏡における古墳時代前、中期の鉄製品』、『幽黙 他島の考古学』島島考古学論集刊行会  
高田賀太1989『古墳期葬鉄鋤の性態』『考古学研究』45.1 考古学研究会  
石川尊吉考古学研究会1996『石川県考古古資料編成』集成本業案報告書、式器・武具・馬具1。  
兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所2002『梅田古墳群Ⅱ—播磨連絡道(5周)』事業に伴う埋蔵文化財調査報告書V  
門田誠 1988『古代伽耶の戰士』『同志社大学考古学シリーズ』考古学と技術  
鶴田昭彦1995『池尻2号墳』『加古川市史 第四巻 史料編Ⅰ』兵庫県加古川市  
鈴木一有2003『中期古墳における圓錐瓶の特質』『奈京大学山系文化財研究所研究報告第11集』

表2 出土遺物觀察表

番号	出土場所	種類	器種	口径 (cm)	高さ (cm)	種類	剖面・断面注記の特徴	文様・模聖注記の特徴	備考	
1 A 1号墳頂部	須恵器	杯蓋		(1.65)	縁付 径4.1	天井部・縁付 縁付	縁平な形の仰口の縁みを斜 り付けた。	天井部回転ヘラケズリ。内面回転ナヂ。	色調 反色。	
2 B 露頭周辺	白磁	皿		(1.17)	(2.0)	口縁1.5	口縁部はやわらかに外反して、 大きいくぼみ。	内面開闊。	色調 反白色。 16世紀。	
3 A 2号墳丘斜面	青磁	碗		(1.60)	(4.6)	底部1.4	内部の削り出し高台。	内面と外側は黄褐色。底面下部露粉。	胎土色調 美黄褐色。 13世紀。	
4 A 1号墳墓内	須恵器	有蓋高杯 盖		11.55	5.65	縁み 往2.25	縁みを斜めに外反して、 底付付ける。	天井部回転ヘラケズリ。他は回転ナヂ。縁縫回 転方向。	胎土色調 反色。 外側露粉。	
5 A 1号墳頂主体部上層、T-5	須恵器	有蓋高杯 盖		(11.2)	(5.25)	縁み 往2.9	口縁4.5/外張	天井部回転ヘラケズリ。他は回転ナヂ。天井部 内面一方斜方に上げ付。	色調 反色。 外側露粉。	
6 A 1号墳頂主体部上層、主部	須恵器	有蓋高杯		(7.55)	7.7	底部1/2	縁部に長方彌三方透かし。	須恵器 外面 回転ヘラケズリ。内面 回転ナヂ 透かし上げ付。	色調 反色。 外側露粉。	
7 A 1号墳主体南端部底	須恵器	有蓋高杯		9.7	9.30	7.9	法ぼ定形	面部に上方彌三方透かし。面部 透かし。	須恵器 外面 回転ヘラケズリ。他回転ナヂ。	色調 反色。 外側一部自然釉。
8 A T-5、頂部古墳	須恵器	有蓋高杯		(9.5)	(8.80)	7.8	法ぼ定形	面部は光沢、口縁わずか 削り出。	面部に上方彌三方透かし。面部 透かし。	色調 反色。 外側一部鉢形。
9 A 1号墳頂主体部上層、T-5	須恵器	有蓋高杯		9.7	9.30	7.9	法ぼ定形	面部に上方彌三方透かし。面部 透かし。	面部に上方彌三方透かし。面部 透かし。	色調 反色。 外側一部自然釉。
10 A 1号墳頂主体部上層、T-5	須恵器	縫				口縁部破片	6~7ヶ月前位の発酵度を表示 せず。		色調 反色。	
11 A 1号墳頂主体部の東、南東部 墳丘土堆	須恵器	縫				口縁部破片	15本(単位)幅合状透かし地紋を 示す。	内面回転ナヂ復原。	色調 反色。 内面自然釉・灰被り。	
12 A 1号墳頂主体部上層、土体部、 須恵器 縫				(7.4)	10.4	縫部以上次横	丸底、形状が円錐から倒錐へ 変形する。併せて最大幅に 2つの凹溝が形成された 底紋を示す。縫孔が残る。	外側底部は復ナヂ。他は回転ナヂ。	色調 反色。内底部に灰被り。	
13 A 2号墳第1主体部内落ち込み	須恵器	糸		10.6	4.4	完形		直腹回転ヘラケズリ。他回転ナヂ。底部内面に 中心円窪。縫縫底孔を示す。	色調 反色。	
14 A 2号墳第2主体	須恵器	糸蓋		11.3	4.85	完形	縫は甘く、丁字部は継線上に複 せます。	天井部回転ヘラケズリ。他は回転ナヂ。天井部 内面一方斜方に上げ付。縫縫底孔内向付。	色調 反色。	
15 A 2号墳第2主体	須恵器	糸		9.9	4.70	完形		直腹回転ヘラケズリ。他回転ナヂ。底部内面 にヒビ。縫縫底孔内向付。	色調 反色。	
16 A 2号墳第2主体	須恵器	糸蓋		12.1	4.80	完形	縫は甘い。	天井部回転ヘラケズリ。他は回転ナヂ。天井部 内面一方斜方に上げ付。縫縫底孔内向付。	色調 反色。内底ヒビセッタ。蓋 内面に赤茶色斑付。	
17 A 2号墳第2主体	須恵器	糸		9.9	4.70	完形		直腹回転ヘラケズリ。他回転ナヂ。底部内面 に円窪。縫縫底孔内向付。	色調 反色。内底ヒビセッタ。	
18 A 2号墳第3主体	須恵器	糸蓋		11.7	4.00	完形	天井部心部の縫は回線上に複重 化。	天井部回転ヘラケズリ。他は回転ナヂ。縫縫底 孔内向付。	色調 反色。内底ヒビセッタ。縫縫底孔内向付。	
19 A 2号墳第3主体	須恵器	糸		10.2	4.20	完形		直腹回転ヘラケズリ。他回転ナヂ。底部内面 に上げ付。縫縫底孔内向付。	色調 反色。内底ヒビセッタ。縫縫底孔内向付。	
20 A 2号墳第3主体	須恵器	糸蓋		11.6	4.40	完形	天井部心部の縫は回線上に複重 化。	直腹回転ヘラケズリ。他回転ナヂ。縫縫底 孔内向付。	色調 反色。内底ヒビセッタ。縫縫底孔内向付。	
21 A 2号墳第3主体	須恵器	糸		10.6	4.10	完形		直腹回転ヘラケズリ。他回転ナヂ。縫縫底 孔内向付。	色調 反色。内底ヒビセッタ。縫縫底孔内向付。	
22 A 2号墳第1主体圓方北裏	須恵器	糸蓋		12.4	4.35	完形	扁平な天井部。縫は比較的弱 い。	天井部回転ヘラケズリ。他は回転ナヂ。縫縫底 孔内向付。	色調 反色。内底灰被り。内底ヒビセッタ。縫 縫底孔内向付。	
23 A 2号墳第1主体部、能方理上層	須恵器	糸蓋		12.2	4.80	約1/2	縫は甘い。	天井部回転ヘラケズリ。他は回転ナヂ。縫縫底 孔内向付。	色調 黄褐色。	
24 A 2号墳第1主体部、能方理上層、 須恵器				12.2	(4.80)	口縁部1/2	縫は甘い。	天井部回転ヘラケズリ。他は回転ナヂ。縫縫底 孔内向付。	色調 黄褐色。	
25 A 2号墳頂、主体部、須丘斜面、 圓方上層	須恵器	糸		11.7	4.70	口縁1/2欠損	縫は明瞭だが、せい。	天井部回転ヘラケズリ。他は回転ナヂ。天井部 内面には上げ付。縫縫底孔内向付。	色調 黄褐色。	
26 A 2号墳第1主体部、能方理上層、 須恵器				13.8	5.00	口縁1/3欠損	天井部との縫は四辺線上に複重 化。	天井部回転ヘラケズリ。他は回転ナヂ。縫縫底 孔内向付。	色調 黄褐色。内底灰被り。内底ヒビセッタ。縫 縫底孔内向付。	
27 A 2号墳主体部上面	須恵器	糸蓋		12.2	4.75	口縁2.5/欠損	縫は甘い。	天井部回転ヘラケズリ。他は回転ナヂ。縫縫底 孔内向付。	色調 反色。底盤はせい。21セッタ。縫縫底孔内向付。	
28 A 2号墳圓洞上層～墳丘斜面	須恵器	糸蓋		(12.1)	(4.20)	口縁1/4欠損	縫は明瞭だが、せい。	天井部回転ヘラケズリ。他は回転ナヂ。天井部 内面には上げ付。縫縫底孔内向付。	色調 反色。	
29 A 2号墳第1主体圓方北裏	須恵器	糸		9.9	4.80	口縁1/4欠損		直腹回転ヘラケズリ。半心部は回転ヘラカ リ付。縫縫底孔内向付。	色調 反色。	
30 A 2号墳主体部、須丘	須恵器	糸		(10.4)	(5.20)	口縁2/5残存		直腹回転ヘラケズリ。他回転ナヂ。縫縫底 孔内向付。	色調 反色。底盤はせい。内底ヒビセッタ。	
31 A 2号墳頂(北裏)	須恵器	糸		(3.80)		約1/4、口縁欠損		直腹回転ヘラケズリ。他回転ナヂ。縫縫底 孔内向付。	色調 黄褐色。	
32 A 2号墳圓洞上層～墳丘斜面	須恵器	糸		(10.0)	(4.10)	口縁1/8残存		直腹回転ヘラケズリ。他回転ナヂ。縫縫底 孔内向付。	色調 反色。底盤はせい。内底灰被り。	
33 A 2号墳主体部、須丘	須恵器	糸		(13.30)	12.7	体部2/4	縫形が心部から外反する部 位に限る。口縁部下に痕跡。	須恵器ナヂ。底部には復ナヂ状の痕跡。	色調 反色。底盤はせい。内底灰被り。内底ヒ ビセッタ。	
34 A 2号墳主体部、須丘、須丘斜面、 須丘圓洞、T-5	須恵器	糸		14.3	24.7	腰縫	丸底、縫形が心部から外反す る。口縁部下に痕跡。	須恵器ナヂ。底部には復ナヂ状の痕跡。	色調 反色。	
35 A 2号墳主体部、須丘、須丘斜面、 須丘圓洞、T-6	須恵器	糸		18.0	29.0	腰縫	丸底、縫形が心部から外反す る。縫形が心部から外反す る。縫縫底孔は肥厚させた。	縫縫底孔は肥厚させた。	色調 反色。	
36 A 2号墳主体部、須丘、須丘斜面、 須丘圓洞	須恵器	糸		(14.2)	(23.80)	口縁1/2、 1/4残存	縫形が心部から外反する。 縫縫底孔は肥厚させた。	縫縫底孔は肥厚させた。	色調 反色。	
37 A 2号墳主体部、須丘主体部上層、 須丘斜面、須丘圓洞、T-5	須恵器	糸		(27.2)	(57.60)	腰縫 47.2	口縁5/S、 1/4欠損	丸底、縫形が心部から外反す る。縫縫底孔は肥厚させた。	縫縫底孔は肥厚させた。	色調 反色。
38 A 2号墳第1主体圓形、須丘斜面、 須丘圓洞	土師器	糸		(14.3)	(28.6)	腰縫	丸底形の体部。縫縫底孔は肥 厚させた。	体部内面は斜め方向の「う」字形。 縫縫底孔は復ナヂ。	色調 橙色。	
39 A 2号墳第1主体圓形、須丘斜面	土師器	糸		(12.5)	(25.0)	腰縫	丸底形の体部。	体部内面は斜め方向の「う」字形。 縫縫底孔は復ナヂ。	色調 橙色。底盤あり。	
40 A 3号墳主体部内	土師器	糸		(13.3)	(5.70)	口縁ほ 欠損	手づくね。内底の「つ」字形。		色調 須崎褐色。	

番号	地図	出土地所	種別	種類	口徑	高さ	直徑	種存率	形態・複数法の特徴	文様・調整法の特徴	備考
41	B 4号壙北側周溝	須恵器	有蓋高杯	12.0	5.20	泡込	5.1	5.20	底状の跡みを貼り付ける。模様は明瞭。	天井部周囲ヘラケズリ。他の回転ナヂ。縦縞回転方向右。	色調 灰色。
42	B 4号壙北側周溝	須恵器	有蓋高杯	12.3	5.30	泡込	5.5	5.30	底状の跡みを貼り付ける。模様は明瞭。	天井部周囲ヘラケズリ。他の回転ナヂ。縦縞回転方向右。	色調 黄褐色から暗褐色。外蓋灰褐色。飴食不食。
43	B 4号壙-T-1	須恵器	有蓋高杯	(12.3)	4.00			口縁1/4残存			色調 暗灰色。横成不良。
44	B 4号壙石棺上	須恵器	有蓋高杯?	(9.0)	(2.8)			口縁1/5残存			色調 灰色。45と同一個体か。
45	B 4号壙石棺上	須恵器	有蓋高杯	(2.6)	(11.4)			脚部1/8残存	円錐透かしを崩す。	回転ナヂ誤認。	色調 灰色。外圍薄く仄被り。足跡体か。
46	B 4号壙石棺埋土	須恵器	短縄壹	(7.0)	(3.2)			小舟			色調 黄褐色。
47	B 4号壙北側周溝	須恵器	壹	15.7	20.3	腹径	19.3	口縁2/5残存	丸底、脚部の外部から足跡は上方に残る。口縁形に近く、口縁底は下方に残る。張出しを崩す。	外間に有蓋子状のタマ後、为牛目状のコナデを部分的に残す。口縁部は外縁コナデ。内部に張出しを残す。内部工事が残る。底部内間に足跡形で足跡が残る。	色調 灰色。
48	B 5号壙石室床面西半部	須恵器	肝蓋	13.2	4.45			兜形	天井部との接は横線上に残る。	天井部周囲ヘラケズリ。他の回転ナヂ。縦縞回転方向右。	色調 反対色。飴成不良。天井部にへつ記号。
49	B 5号壙石室床面西半部	須恵器	糸	11.4	5.00			口縁	追加回転ヘラケズリ。他の回転ナヂ。縦縞回転方向右。		色調 灰色。外縁一部にへつ記号。
50	B 5号壙石室床面東半部	須恵器	糸	10.7	5.10			口縁	追加回転ヘラケズリ。他の回転ナヂ。縦縞回転方向右。		色調 黄褐色。
51	B 5号壙石室床面東半部	須恵器	糸	11.1	5.50			口縁	追加回転ヘラケズリ。他の回転ナヂ。底部内面當て足跡部。縦縞回転方向右。		色調 灰色。
52	B 5号壙石室床面東半部	須恵器	短縄壹	9.2	6.9	腹径	11.45	兜形	丸底、腹半分脚部から正面半分に残る。口縁底は下方に残る。	追加から脚部は口縁部へカケズリ。口縁から内面当て足跡ナヂ誤認。	色調 暗褐色。外表面灰褐色。
53	B 5号壙石室上面埋土	須恵器	壹	(15.0)	(3.4)			口縁1/8残存	外反し。脚部外側に面を作る。		色調 暗黄色。薄い自然色。
54	B T-1	須恵器	壹	(5.85)	腹径	(11.2)	4体部1/5残存		やや豊かな体形。腹盤上に浅縫と通連孔を留す。脚部もしない。	腰部一帯開口袋口状のコナデ。下部は細めのハラケスリ状のオナデ。中心から内面当て足跡ナヂ。内面にはほどよい工事が残る。	色調 灰色。
55	B 5号壙上方周溝埋土	須恵器	壹	(7.40)	腹径	(12.6)	脚部1/2残存		外縁は豊かな体形。	腰部一帯開口袋口状のオナデ。下部はタクダナヂ。中心から内面当て足跡ナヂ。内面にはヨコナデ。	色調 灰色。肩部に自然色。
56	B 5号壙上方周溝埋土	須恵器	壹	(9.70)	腹径	(14.4)	脚部1/4残存		脚部の体形。	腰部下部に腰子タクダナヂ。腰部から上内面当て足跡ナヂ。一部は目錠が残る。内面下半に当て足跡が残る。	色調 灰色。
57	B 5号壙上方周溝	須恵器	壹	15.6	48.6	腹径	48.2	口縁	丸底。脚部の体形にやや腹盤が残る。直立する腹盤に腰部へ向く。	腰部下部に腰子タクダナヂ。腰部から上内面当て足跡ナヂ。一部は目錠が残る。内面下半に当て足跡が残る。	色調 灰色。
58	B 5号壙上方周溝埋土上土	土師器	糸	(11.0)	4.90			1/4残存	底部から内窓して直立する口縁部へ向く。	内面には模方窓のレラミガキ。	色調 ぶどう色。赤色。斜斜。
59	B 5号壙上方周溝南端砂山頂上	土師器	高杯	(13.6)	9.70	7.9		脚部完全、口縁わざず	水平に広がる脚部底部から中央窓の外に脚部窓に内窓する脚部の窓をわざむ。	内面には模方窓のレラミガキ。	色調 暗色。腰端部と杯外縁に一部に裏原。
60	B 6号壙	須恵器	肝蓋	11.2	4.45			口縁1/6欠損	縦は比喩的明瞭。	天井部周囲ヘラケズリ。他の回転ナヂ。天井部内面一方向の仕上げナヂ。縦縞回転方向左。	色調 灰色。口縁一部灰被り、城とセトカ。
61	B 6号壙墳頂-T-12	須恵器	肝蓋	(11.0)	4.90			口縁1/8残存	天井部の痕は横線上に残る。	天井部周囲ヘラケズリ。他の回転ナヂ。縦縞回転方向左。	色調 灰色。
62	B T-12	須恵器	肝蓋	(12.1)	4.65			口縁1/10残存	縦は比喩的明瞭。	天井部周囲ヘラケズリ。天井部然内面仕上げナヂ。縦縞回転方向左。	色調 灰色。外縁に仄被り。
63	B 6号壙主体部上	須恵器	肝蓋	(11.0)	3.80			口縁1/6残存	縦は甘い。	天井部周囲ヘラケズリ。他の回転ナヂ。	色調 灰色。
64	B 6号壙墳頂-T-12	須恵器	肝蓋	(12.5)	3.60			口縁1/2	天井部との接は筋線上に覆心。天井部周囲ヘラケズリ。他の回転ナヂ。		色調 灰色。
65	B 6号壙	須恵器	糸	9.8	4.35			口縁	底部周囲ヘラケズリ。底内面一方向仕上げナヂ。縦縞回転方向左。		色調 灰色。外縁被り。60セトカ。
66	B 6号壙	須恵器	糸	(8.0)	4.80			口縁1/4残存	底部周囲ヘラケズリ。他の回転ナヂ。縦縞回転方向右。		色調 灰色。底部仄被り。
67	B 6号壙墳頂-T-12	須恵器	糸	(8.0)	5.10			脚部1/2	底部周囲ヘラケズリ。他の回転ナヂ。縦縞回転方向左。		色調 灰色。
68	B 6号壙	須恵器	糸	(10.0)	4.40			口縁1/4残存	底部周囲ヘラケズリ。他の回転ナヂ。縦縞回転方向右。		色調 灰色。受け付け灰被り。
69	B T-12	須恵器	糸	(8.0)	4.85			口縁1/10欠損	底部周囲ヘラケズリ。他の回転ナヂ。縦縞回転方向左。		色調 灰色。
70	B 6号壙	須恵器	有蓋高杯	(10.4)	3.9	脚部1/2残存		口縁1/4、脚部1/2残存	底状の跡み貼り付け。	天井部周囲ヘラケズリ。他の回転ナヂ。	色調 灰色。
71	B 6号壙	須恵器	有蓋高杯	(3.00)	脚部1/2残存			脚部1/2	底状の跡み貼り付け。	天井部周囲ヘラケズリ。他の回転ナヂ。天井部内面仕上げナヂ。	色調 灰色。
72	B 6号壙墳頂(主体部上)	須恵器	有蓋高杯	10.7	9.8	8.8	口縁5/10欠損		脚部に合形三方透かし。縦カッコ。脚部外縁透かし。		色調 暗灰色。
73	B 6号壙墳頂(主体部上)、墳頂	須恵器	有蓋高杯	(6.0)	(9.0)	脚部1/3残存			脚部に長方形三方透かし。	脚部周囲ヘラケズリ。他の回転ナヂ。脚部内面心内底透。	色調 灰色。
74	B 6号壙墳頂(主体部上)、平塗埋土上	須恵器	短縄壹	8.8	11.1	腹径	14.1	脚部若干残存	先底、やや豊かな体形から脚部へ向く。鏡形には本部位の波状底。体部内面に二重の波状底。脚部内面に脚部斜面に張出斜面を残す。	脚部周囲ヘラケズリ。他の回転ナヂ。天井部内面仕上げナヂ。	色調 灰色。外縁底部から内面に仄被り、深孔周囲底透。
75	B 6号壙	須恵器	糸	(9.80)	4.90			口縁1/6欠損		脚部周囲ヘラケズリ。他の回転ナヂ。縦縞回転方向左。	色調 灰色。外縁打ち欠き。

番号 No.	地区	出土場所	種別	蓄積	高さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (mm)	保存率	形態・成形技術の特徴		備考
									先端部を欠く。	刀の柄に付して出土。	
M1 A	2号墳第2主体棺東側	鉄器	鎌?	(10.0)	0.50	0.5	先端部を欠く。		短い刃部。圓闘。刃開削の刃部が広がる。	柄に複質残存。	
M2 A	2号墳第2主体棺東側 刀根	鉄器	刀子	(12.7)	2.1	0.5	先端部を欠く。		圓闘。刃開削の刃部がやや広がる。	柄に複質残存。	
M3 A	2号墳第2主体棺東側	鉄器	刀	(85.9)	3.80	0.8	茎底部欠損	曲闘か。茎部に目釘孔あり。		刃部本貫付存。茎部複質貫付存。	
M4 B	4号墳石室内西端付近床面上	鉄器	鎌	(13.9)	2.45	0.2	先端部を欠く。	曲刃鎌。折り返しは身に直交。		刃に真角に接する木質(柄)残存。	
M5 B	4号墳石室内西端部床面上	鉄器	刀子	18.0	1.70	0.5	完形	圓闘。刃開削の刃部がやや広がる。		有根質柄装着か。	
M6 B	4号墳主体部南面 深から5cm	鉄器	鎌	(2.3)	0.35	0.3	茎部先端	表面がせん状にな。			
M7 T-1北裏塀		鉄器	鋸?	(27.4)	3.10	3.1	基部・先端部を欠く。	目釘孔を有する梁部から直接的に刃部へ続く。		確認該当時に出土したものか。	
M8 B	4号墳石室西半部底面	鉄器	刀	89.1	3.30	1.0	完形	刃開きあり、茎部に目釘2孔あり。		刃部に本貫付存。茎部には糸巻き痕・本貫残存。	
M9 B	5号墳石室東端付近床面	青銅器	鏡	8.9	8.90	0.9	完形	透文鏡、斜絞、外周に網目彫、波状紋、繊細紋、二列蝶文、鍍金径25mm。			
M10 B	5号墳石室西端部 土器置下	鉄器	鋸?	7.5	3.60	1.60	完形	袋状鉄鋸。刃先に向かって刃幅を広げる。袋部は完全には閉じない。		袋部内に本貫か。基部表面に布面。	
M11 B	5号墳石室西小口付近 床面付近	鉄器	刀子	(6.70)	1.25	0.3	先端部を欠く。	圓闘。		茎部に本貫。	
M12 B	5号墳石室西端部 土器置下	鉄器	鎌	10.7	2.10	0.4	完形	曲刃鎌。折り返しは身に直交。		刃に真角に接する柄の底座(柄)残存。	
M13 B	5号墳石室西小口付近 床面付近	鉄器	鋸・鋼先	(8.0)	2.7	0.7		U字形跡・鋸先。耳部は短い。茎部鋼V字溝の深さもAgeと薄い。		布面付存。M14と同一か。	
M14 B	5号墳石室東内 床面	鉄器	鋸・鋼先	(3.8)	1.7	0.8		U字形跡・鋸先。耳部。		M13と同一か。	
M15 B	5号墳石室西端付近 床面	鉄器	鋸	77.7	3.40	0.8	完形	茎部に目釘2孔あり。		刃部に本貫付存。茎部には糸巻き痕。	
M16 B	5号墳石室西端付近 床面	鉄器	鋸	18.0	1.10	0.6	完形	長頭鎌。刃部は柳葉形で、小さな逆剣を有する。		茎に本貫残存。M16~21は該当して出土。	
M17 B	5号墳石室西端付近 床面	鉄器	鋸	(18.1)	0.65	0.4	先端部を欠く。	長頭鎌。刃部は柳葉形。		茎に本貫残存。茎上端には糸巻きか。M16~21は該当して出土。	
M18 B	5号墳石室西端付近 床面	鉄器	鋸	(17.3)	1.00	0.4	茎底部欠損	長頭鎌。刃部は柳葉形で、小さな逆剣を有する。		茎に本貫残存。M16~21は該當して出土。	
M19 B	5号墳石室西端付近 床面	鉄器	鋸	(16.9)	1.00	0.4	茎底部欠損	長頭鎌。刃部は柳葉形で、小さな逆剣を有する。		茎に本貫残存。M16~21は該當して出土。	
M20 B	5号墳石室西端付近 床面	鉄器	鋸	16.5	1.05	0.5	完形	長頭鎌。刃部は柳葉形で、小さな逆剣を有する。		茎に本貫残存。M16~21は該當して出土。	
M21 B	5号墳石室西端付近 床面	鉄器	鋸	(15.0)	1.05	0.4	茎底部欠損	長頭鎌。刃部は柳葉形で、小さな逆剣を有する。		茎に本貫残存。M16~21は該當して出土。	
M22 B	5号墳石室西端付近 床面	鉄器	鋸	17.8	1.05	0.4	完形	長頭鎌。刃部は柳葉形で、小さな逆剣を有する。		茎に本貫残存。M23と接着して出土。	
M23 B	5号墳石室西端付近 床面	鉄器	鋸	(16.2)	1.10	0.4	先端部を欠く。	長頭鎌。刃部は柳葉形で、小さな逆剣を有する。		茎に本貫残存。M22と接着して出土。	
M24 B	5号墳石室西端付近 床面	鉄器	鋸	17.5	0.95	0.4	完形	長頭鎌。刃部は柳葉形で、小さな逆剣を有する。		茎に本貫残存。茎には糸巻きか。残存。M23と接着して出土。	
M25 B	5号墳石室西端付近 床面	鉄器	鋸	18.1	1.10	0.4	完形	長頭鎌。刃部は柳葉形で、小さな逆剣を有する。		茎に本貫残存。M24と接着して出土。	
M26 B	5号墳石室西端付近 床面	鉄器	鋸	16.8	1.15	0.4	完形	長頭鎌。刃部は柳葉形で、刃闘を有する。		茎に本貫残存。上端には柳葉か糸巻き残存。	
M27 B	5号墳石室西端付近 床面	鉄器	鋸	(17.0)	1.00	0.4	先端部を欠く。	長頭鎌。刃部は柳葉形で、小さな逆剣を有する。		茎に本貫残存。上端には柳葉が残存。	
M28 B	5号墳石室西端付近 床面	鉄器	鋸	17.3	0.90	0.3	完形	長頭鎌。刃部は柳葉形で、小さな逆剣を有する。		茎に本貫残存。	
M29 B	5号墳石室西端付近 床面	鉄器	鋸	(17.6)	1.10	0.5	先端部を欠く。	長頭鎌。刃部は柳葉形で、刃闘を有する。		茎に本貫残存。	
M30 B	5号墳石室西小口付近 床面付近	鉄器	鋸	18.2	1.05	0.4	完形	長頭鎌。刃部は柳葉形で、小さな逆剣を有する。		茎に本貫残存。	
M31 B	5号墳石室西小口付近 床面付近	鉄器	鋸	(17.0)	1.00	0.4	ほぼ完形	長頭鎌。刃部は柳葉形で、小さな逆剣を有する。		茎に本貫残存。	
M32 B	5号墳石室西小口付近 床面	鉄器	鋸	(17.9)	1.00	0.4	茎底部欠損	長頭鎌。刃部は柳葉形で、小さな逆剣を有する。		茎に本貫残存。	
M33 B	5号墳石室西小口付近 床面	鉄器	鋸	18.4	0.85	0.4	肆理完形	長頭鎌。刃部は柳葉形で、小さな逆剣を有する。		茎に本貫残存。	
M34 B	5号墳石室西小口付近 床面付近	鉄器	鋸	(12.4)	1.1	0.40	茎底部欠損	長頭鎌。刃部は柳葉形で、小さな逆剣を有する。			
M35 B	5号墳石室西小口付近 床面付近	鉄器	鋸	(10.6)	1.0	0.35	茎底部欠損	長頭鎌。刃部は柳葉形で、小さな逆剣を有する。			
M36 B	5号墳石室内 床面付近	鉄器	鋸	(11.3)	0.80	0.3	先端部・茎底部を欠く。	長頭鎌。刃部は柳葉形。		茎に本貫残存。	
M37 B	5号墳石室西小口付近 床面付近	鉄器	鋸	(3.9)	0.65	0.6	茎部			茎に本貫残存。一部糸巻きか。	
M38 B	5号墳石室西端付近 床面	鉄器	鋸	(1.9)	0.4	0.4	茎部	断面方形。			
G1 A	2号墳北壁側		ガラス 小玉	0.3	0.3	0.3	孔径 0.1	透いブルー、透明。			

# 第5章 兵庫県中佐治古墳群における自然科学分析

株式会社 古環境研究所

## 1. 樹種同定

### 1. はじめに

木材は、セルロースを骨格とする木部細胞の集合体であり、解剖学的形質の特徴から樹種の同定が可能である。木材は花粉などの微化石と比較して移動性が小さいことから、比較的近隣の森林植生の推定が可能であり、遺跡から出土したものについては木材の利用状況や流通を探る手がかりとなる。

### 2. 試料

試料は、B地区5号墳石室内東端付近の床面鏡直下から出土した木材1点である。

### 3. 結果

分析の結果、ヒノキ *Chamaecyparis obtusa Endl.* と同定された。以下に同定根拠となった特徴を記し、各断面の顕微鏡写真を示す。

#### ヒノキ *Chamaecyparis obtusa Endl.* ヒノキ科

仮道管、樹脂細胞および放射柔細胞から構成される針葉樹材である。横断面：早材から晩材への移行はゆるやかで晩材部の幅は狭い。樹脂細胞が見られる。放射断面：放射柔細胞の分野壁孔はヒノキ型で1分野に2個存在するものがほとんどである。接線断面：放射組織は単列の同性放射組織型で10細胞高以下のものが多い。

### 4. 所見

樹種同定の結果、5号墳石室内東端付近の床面鏡直下から出土した木材は、ヒノキと同定された。ヒノキは、福島県以南の本州、四国、九州、屋久島に分布する日本特産の常緑高木で、通常高さ40m、径1.5mに達する。材質は、木理通直で大きな材が取れる良材であり保存性が高い。当時の遺跡周辺もしくは近隣の地域で採取可能な樹種であったと考えられる。

#### 文献

島津 謙・佐伯 浩・岸田 浩・坂倉高義・石田友雄・森松耕生・須藤彰司（1985）木材の構造。文永社出版、290p.

島津 謙・伊東隆夫（1986）日本の遺跡出土木製品概観。泰山閣、296p.

山田昌久（1993）日本列島における木質遺物出土遺跡文獻集成。植生史研究特別1号、植生史研究会、242p.

## 2. 蛍光X線分析（赤色顔料分析）

### 1. はじめに

物質にX線を照射すると、その物質を構成している元素に固有のエネルギー（蛍光X線）が放出され、この蛍光X線を分光して波長と強度を測定することで、物質に含まれる元素の種類と量を調べることができる。

古代の赤色顔料としては、一般的に水銀朱（硫化水銀： $HgS$ ）、ベンガラ（酸化第二鉄： $Fe_2O_3$ ）、鉛丹（酸化鉛： $Pb_3O_4$ ）が知られている（市毛, 1998; 本田, 1995）。蛍光X線分析では、水銀（ $Hg$ ）・イオウ（ $S$ ）、鉄（ $Fe$ ）、鉛（ $Pb$ ）の元素の検出状況から、赤色顔料の種類を推定することが可能である。

### 2. 試料

分析試料は、2号墳の第2主体部棺内から出土した赤色顔料（№1）、2号墳の第3主体部南裾部から出土した土器内の土（№2）、1号墳の主体部南裾部から出土した土器内の土（№3）の計3点である。

### 3. 分析方法

エネルギー分散型蛍光X線分析装置（日本電子株式会社、JSX3201）を用いて、元素の同定およびファンダメンタルパラメータ法（FP法）による定量分析を行った。以下に分析の手順を示す。

- 1) 試料を乾燥（105°C・24時間）
- 2) 試料を粉砕して塩化ビニール製リング枠に入れ、圧力15t/cm<sup>2</sup>でプレスして絞剤試料を作成
- 3) 測定時間600秒、照射径7.0mm、電圧30kV、試料室内真空の条件で測定

### 4. 分析結果

表1に各元素の定量分析結果（wt%）を示し、付図にX線スペクトル図を示す。定量分析結果は、慣例により代表的な酸化物名で表記した。

### 5. 考察

蛍光X線分析の結果、各試料とも鉄（ $Fe$ ）の明瞭なピークが認められ、№1と№2では水銀（ $Hg$ ）やイオウ（ $S$ ）も認められた。鉄（ $Fe_2O_3$ ）の含量は、№1では75.0%とかなり高い値であり、№2と№3では17.8%および16.7%と比較的低い値である。水銀（ $HgO$ ）の含量は、№1では0.7%、№2では0.1%未満であり、イオウ（ $SO_4$ ）の含量は、各試料とも0.1%程度と微量である。鉛丹の主成分となる鉛（ $Pb$ ）は、いずれの試料からも検出されなかった。

以上の結果から、2号墳の第2主体部棺内から出土した赤色顔料（№1）は、ベンガラが主体であり、水銀朱（ $HgS$ ）もわずかに含まれていると推定される。2号墳の第3主体部南裾部から出土した土器内の土（№2）および1号墳の主体部南裾部から出土した土器内の土（№3）については、ベンガラが含まれていたとしても少量と考えられ、№2には水銀朱（ $HgS$ ）もわずかに含まれていると推定される。

#### 文献

- 市毛 熊（1998）新版朱の考古学、考古学選書、雄山閣出版  
本田光子（1995）古墳時代の赤色顔料、考古学と自然科学、31-32、p.63-79。

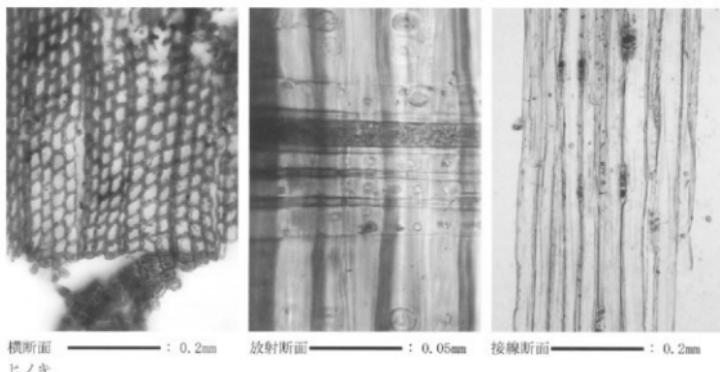


図4 中佐治古墳群の木材

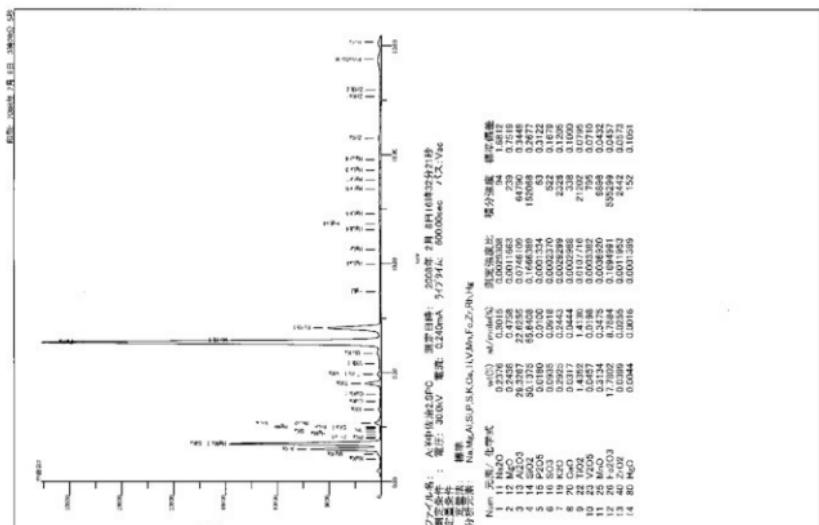
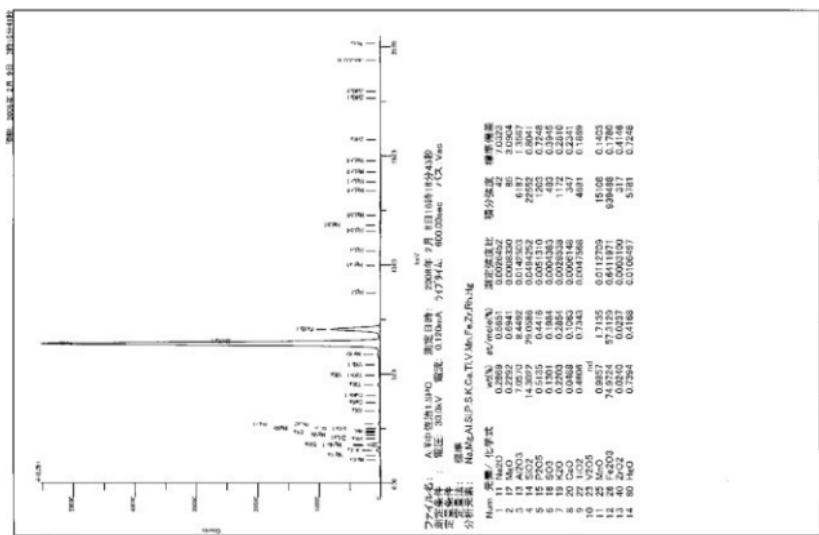


図5 X線スペクトル

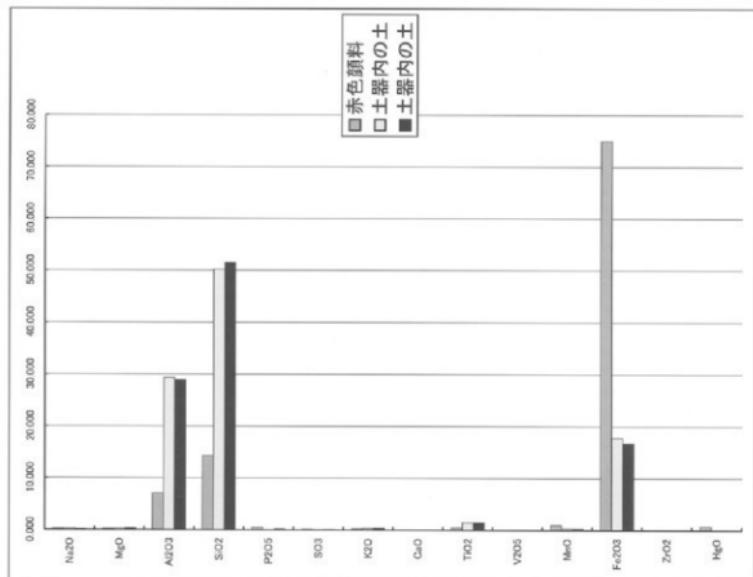
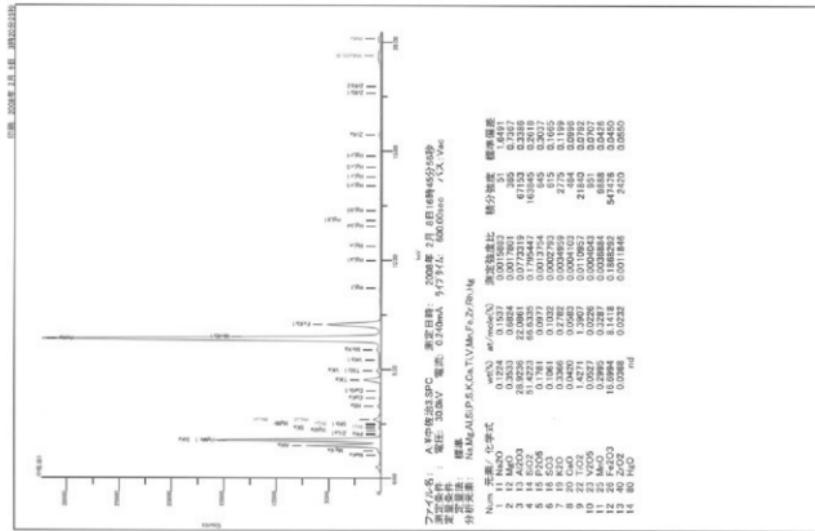


図6 蛍光X線分析結果

単位: wt(%)

原子No.	化学式	地点・試料		
		No. 1	No. 2	No. 3
		2号墳 第2主体棺内	2号墳 第3主体部南櫛	1号墳 主体部南櫛
11	Na2O	0.287	0.238	0.122
12	MgO	0.229	0.244	0.353
13	Al2O3	7.057	29.327	28.924
14	SiO2	14.302	50.138	51.422
15	P2O5	0.514	0.018	0.178
16	SO3	0.130	0.094	0.106
19	K2O	0.220	0.293	0.337
20	CaO	0.049	0.032	0.042
22	TiO2	0.481	1.435	1.427
23	V2O5	0.000	0.046	0.053
25	MnO	0.996	0.313	0.300
26	Fe2O3	74.972	17.780	16.699
40	ZrO2	0.024	0.040	0.037
80	IlgO	0.739	0.004	0.000

表3 中佐治古墳群における蛍光X線分析結果

## 第6章 まとめと考察

### 第1節 古墳群の占める位置

中佐治古墳群は鳥帽子山から南西に派生する尾根に立地する。この尾根は岡見谷川の流れる深い谷に北西側を限られ、南西側も比較的浅い谷によって限られている。この両側の谷から分岐する谷地形によって、この尾根はその根元部分を両側から絞り込まれており、ひとつの山塊状の様相を見せている。標高は約220mを測り、比高差は70mになる。

北西から南東へと流れる遠阪川に沿った谷は、標高500mを越える山々に挟まれて、ときには幅300m以下の狭い谷地形を形成している。この谷には部分的に東西方向の枝谷によって盆地状の平野が広がる箇所があり、中佐治古墳群はそのようなひとつの盆地状平野の北端部に位置している。この中佐治の盆地状地形の縁辺部の山裾には、この谷のなかでは比較的多く古墳が分布している。

遠阪川の谷には、のちには山陰道となる古墳時代の古道が抜けていたであろう。この古道は遠阪の峰を越えて但馬へと結ばれている。周辺の古墳もこの古山陰道に沿って分布しており、遠阪川から分かれた本流の加古川（佐治川）最上流の谷間に古墳はみられない。

この古山陰道を南から来た人々は、必ずこの中佐治古墳群を仰ぎ見ることになる。また、反対にこの古墳群からは北西の谷間は望むことができず、南側のやや広がった谷間や遠阪川が佐治川と合流した付近の盆地までは辛うじて眺めることができる。

遠阪川を遡って遠阪峰を越えた但馬地域では、弥生時代から古墳時代の墳墓が、平地周辺の標高の低い丘陵上や谷の中に非常に濃密に分布する状況である。

遠阪の谷の北東に連なる山系は、今は兵庫県と京都府を限る山々であるが、遠阪川の枝谷を北東へ遡って300m以下の峠を北へ越えると、由良川水系和久川、牧川の流れる谷へと結ばれ、福知山や夜久野へと抜けることができる。和久川、牧川流域には多くの古墳が分布している。

周辺の但馬や京都丹波における古墳の分布は濃密であり、旧氷上郡域北半におけるそれとの差は明瞭である。

### 第2節 古墳群の特徴

#### 1. 遺構について

古墳群は非常に高所の尾根筋に立地するA区と、急斜面の尾根筋に立地し、山裾まで続くB区に分かれる。A区と同様の高所に立地する古墳群は近辺ではビハクビ古墳群などが知られるが少ない。北近畿豊岡自動車道に伴う確認調査を付近でもおこなっているが、山の上からは経塚（田ノ口経塚）、中世寺院（伝平等寺跡）が見つかっているものの、古墳は確認されていない。

後期の横穴式石室墳は周辺では単独のものが多いたが、対岸に位置する応相寺古墳群では7基の横穴式石室、及び2基の周溝内墓が見つかっており、時期的に断続するものの中佐治古墳群に続く最大の墓域となる。

A区では3基の古墳を調査した。この地区では尾根の奥側に平坦地が少し続くことから、別の古墳

が存在する可能性はあるが、その範囲から1~2基以上の墳丘は立地し得ない。調査した古墳はすべて木棺直葬を主体部とするもので、尾根奥側でも石材は確認されていないことから、この支群は木棺直葬を主体部とする1~5基で構成されるものであろう。

3号墳は尾根を横断する方向に溝を設けて、墳丘を区画するもので、盛土もほとんど持たない。副葬品としては土師器がみられるだけで、須恵器を持たない。おそらく單一埴輪で、木棺は箱形のものを使用している。2号墳周溝に切られており、2号墳より先行する墳墓である。

1号墳は2号墳と周溝を共有しており、土層断面の埋土上層で1号墳側に浅い溝が切り込んでいることから、2号墳が先行する可能性が高い。須恵器祭祀をおこなっており、おそらく棺上・墳丘上ともおこなっている。1号墳からは有蓋高杯と甌が出土しており、主体部内に完形に近い有蓋高杯、墳丘上に壺類等の祭祀が行われていたものであろう。主体部は不明瞭であるが、尾根の方向に主軸方向をもつ。複数埋葬の可能性は残るが、検出できたのは1基だけである。

A区で検出された古墳で最も築造に労力がかかっているのが2号墳である。墳丘の両側、尾根に直交する方向に弧状の溝を掘削し、おそらくその土を利用して盛土として墳丘を高く築いている。主体部は複数埋葬で、尾根に直交する方向に主軸を置く。そのうち2基は剖竹形木棺などの底が湾曲する棺を用いている。須恵器杯を棺上に配しており、墳丘上でも須恵器による祭祀をおこなっている。第2主体部の須恵器杯身蓋2セットを頭部側に並べる状況は、棺の小口の構造が不明なため、棺上のものが棺の崩れとともに転落したものと考えているが、小口が斜めに上がる構造であれば、枕として用いられた可能性はある。第2主体部には鉄製大刀や刀子などの鉄器が副葬されていた。第3主体部では須恵器杯身蓋2セットを頭部側の棺上に並べており、一方の杯からは二枚貝が、もう一方の杯の内部からはベンガラがみつかった。2号墳のみ3基の主体部が確認されている。須恵器による祭祀は主体部内に完形に近い杯、墳丘上に杯と壺・甌類及び土師器による祭祀が行われている。

2号墳の主体部から出土した須恵器や切り合い関係から、第3主体部→第2主体部→第1主体部の順に埋葬されたものと考えられる。

B区では3基の古墳を調査し、斜面下方に複数基の古墳が存在する。やはり5~6基で一支群を構成するものであろう。この支群ではA区と同様の木棺直葬を主体部とする6号墳、箱式石棺を主体部とする4号墳、竪穴系横口式石室を主体部とする5号墳とその埋葬形態は様々である。調査の及んでいない斜面下方の古墳は低墳丘であり、周辺には石材はみられないことからおそらく木棺直葬と思われる。

調査を実施した3基の古墳は急斜面に垂直方向に距離をおいて並んでおり、切り合はみられない。6号墳以下の古墳は緩斜面となっており、4・5号墳で1支群を形成し、6号墳以下とは別の支群である可能性が高い。

## 2. 須恵器について

4基の古墳から須恵器が出土しており、器種としては杯、有蓋高杯、甌、壺類、壺、横瓶がみられる。

須恵器の出土位置は、杯・有蓋高杯は木棺直葬の棺上や墓室内、墓壁上、墳丘上から出土しており、4号墳の箱式石棺では墓壁上、墳丘上或いは周溝から出土している。5号墳では石室内から出土している。2号墳第2主体部のものや5号墳石室内出土のものは、土器枕などとして棺内に納められた可能性

は残すが、出土状況から棺上あるいは棺外に置かれたものと判断した。

木棺直葬の棺上や墓室内から出土した須恵器杯は完形のものが多く、内容物として二枚貝や赤色顔料（ベンガラ）がみられ、特徴的である。5号墳石室内出土の杯も完形で、蓋をしたもの（48・49）の内面にも付着物がみられた。

壺・壺類は墳丘上や周溝に置かれたものがほとんどで、5号墳石室内からは短頸壺（52）が完形で出土している。墳丘上出土のものには、口縁部を打ち欠くなど意図的に破碎された形跡が残るものがみられる。4号墳周溝からは壺（47）がほぼ完形のままで出土しており、5号墳周溝からは人型の壺（57）が押しつぶされた状態で出土している。

有蓋高杯の内、脚端部を内面に折りかえすもの（7）は京都府旧船井郡岡部町の園部古窯跡群の製品の地方色とされる。（山田1995）また、円孔透かしをもつ脚部（45）は近辺では旧多紀郡丹南町の猫谷窯跡の出土品にみられる特徴である。（芦田1988）

兵庫丹波地域の須恵器の編年が確立していない状況であるため、大阪府陶邑古窯跡群の編年（田辺1966・1981）及び隣接する但馬地方の編年（菱田1989）を参考に各古墳の築造時期を考察する。中佐治古墳群からは、陶邑編年TK47型式期からMT15型式期に移行する時期のものがみられ、比較的短期間の型式内におさまる。

2号墳からは、器高が高く、口径が小さく、口縁部が直立に近く高く立ち上がる杯や、真直ぐに垂下する杯壺が存在し、口縁部に内傾した面をもつ。これらは比較的幅の狭いヘラケズリが、外面の2/3近くに施されている。1号墳出土の有蓋高杯にも口径が小さく、短い脚部に幅広の透かしをもつものがある。2号墳出土杯には立ち上がり端部が丸くなるものが含まれ、1号墳出土の有蓋高杯にはやや脚部が高く、立ち上がり端部が丸くなるものが含まれる。

6号墳出土の杯の口径は小さいが、器高が低くなり、立ち上がりがやや内傾するものが多くなる。外面のヘラケズリは幅が広く、1/2程度に施されている。

4号墳の有蓋高杯蓋は、天井部と口縁部を分ける稜は突出し、口縁部は垂直に近く垂下するが、口径がやや大きくなる。天井部のヘラケズリは幅が広く、1/2程度に施される。端部外側に真直ぐな面をもつ脚部が存在する。

5号墳出土の杯は口径の大きなものが含まれ、短頸壺の口縁部は高いが、その他の壺・瓶も扁平に近い体部をもつ。

調査時点における各遺構の先後関係や須恵器の検討から、A区では3号墳→2号墳の順に築造され、2号墳の第2次埋葬前後に1号墳が築造されたものであろう。B区では、6号墳→4号墳→5号墳の順に築造されたものと考察されるが、急斜面に築造され、主体部に石材を用いる4・5号墳は丘陵裾に築造された6号墳以下の古墳とは別の支群と考えられる。6号墳築造は1号墳と重なる可能性が高いことから、中佐治古墳群は丘陵頂上部のA区（A支群）から開始され、順に尾根先端部に向かって築造され、その間に6号墳のある丘陵裾部（C支群）でも築造が開始されたものであろう。急斜面に立地する4・5号墳（B支群）は最後に形成された支群で、堅穴系横口式石室をもつ5号墳の築造をもって中佐治古墳群では造墓されなくなるものと考えられる。丹波・丹後地域では堅穴系横口式石室は、木棺直葬墳を先行墓制とした古墳群の最終段階の古墳であることが指摘されており（林1988）、本古墳群も同じ経緯を辿るものであろう。

### 3. 銅鏡について

5号墳石室から出土した銅鏡は珠文鏡であり、この種の鏡は小型の仿製鏡に含まれる。小型仿製鏡は大形・中形儀鏡の界線・外区文様のみからなる鏡であり、權威のシンボルとして、首長・大首長につながりをもつという權威を在地の民衆に示す役割をもつものとされている。

出土した珠文鏡の鑄上がりは比較的よく、床文が2列のII類に分類できる。(舩口1979) 外区には直行彌齒文帯・複波文帯・鋸齒文帯が巡る。

珠文鏡は兵庫県内では25例の出土が見られ、そのうち丹波地域では篠山市大師山6号墳・丹波市氷上町絹山高谷遺跡・氷上町油利丘塚古墳群に統いて4例目となる(樋本2002)。油利丘塚古墳群出土のものも珠文2列のものである。

県内の珠文鏡出土例では、奥落内の井戸・溝・包含層から出土した4例以外は古墳から出土している。横穴式石室出土のものは出土状況が不明なものが多いが、香美町村岡区文童古墳・豊岡市出石町第塚古墳・豊岡市日高町シゲリ谷3号墳・同前継古墳群などの但馬地方に集中する。その他では、箱式石棺出土のものが4例、木棺直葬出土のものが5例、堅穴式石室出土のものが1例、粘土郭と考えられる主体部からは1古墳から2例が出土している。堅穴式石室の例はたつの市御津町椎現山9号墳のものである。

II類(珠点2列)のものは、前Ⅰ期のうちに古墳副葬が始まるが、後期の例もあり、古墳時代を通じて副葬されている。このように古墳時代全般にわたって副葬された珠文鏡は、さまざまな形態の主体部から出土しているが、中佐治5号墳のような堅穴系横口式石室から出土した例は県内では見られない。

県内出土の珠文鏡は、直径3.5cmの非常に小形のものから直径8.7cmまでのものであり、平均すると直徑6.4cmとなる。中佐治5号墳出土の珠文鏡は直徑8.9cmと、県内では最も大きなものであるが、三重県のおじょか古墳出土の珠文鏡は直徑12.8cmであり、珠文鏡中最大となる。

### 4. 鉢について

4号墳から鉄製の鉢先が1点出土している。明確な副葬状況は不明であるが、箱式石棺の上あるいは墓壇内に納められたものと考えられる。刃部は鎬造り式で間をもたず、袋部は、古墳時代中期には直基式がごくわずかとなり、ほとんどが山形挟り式となることから、おそらく山形挟り式であろう。古墳時代中期に入ると最も多くなる型式である。

古墳の副葬品としての鉢は、他の鉄製武器類に比べて出土例が少ないが、槍などが5世紀以降減少するのに対して古墳時代を通じて副葬され続ける傾向がみられ、他の鉄製武器類とは異なった性格が窺われる。また、鉢は他の鉄製武器類が棺内に納められることが通有であるのに対して、棺外・墓壇外・棺上・石棺の周囲や石室内でも玄門部の隅など、主体部の外郭的な場所に納められることが多い。ここに他の鉄製武器類と違った主体部全体を守護する「屏風」的な性格が認められる。(高田1998)

また、近畿地方中央部の大型古墳に副葬されず、政権中枢で生産に意欲があったとみられないことと、長兵としてはヤリを導入していることからすれば、鉢は鐵器生産の主体にはならず、むしろ船載と考えるのが妥当である(村上1999)とされる。

兵庫県内の出土例として、5世紀前半の築造の加古川市池尻2号墳から身と袋の境に段をもつものと鉢から袋に直線状に太くなるものが出土している。この古墳は堅穴系横口式石室の可能性が考えられる長さ4.51m、幅1.18m、高さ0.61mの石室規模の主体部をもつ。他に鉄鎌、甲冑、馬具、農工具、須恵器、

剣が出土している。(置田1995)

また、姫路市宮山古墳の第2石室、第3石室から5点ずつ出土している。この古墳は5世紀中葉頃築造された、壁が直立し床面に箱形木棺を納める堅穴式石室であるが、垂飾付耳飾など朝鮮系の副葬品が特徴的である。加古川市カンヌ塚古墳からも鉢が出土しており、宮山古墳と同様の石室で、垂飾付耳飾などが出土している。

鉄製鉢はその袋部等の製作の点から日本では他の鉄製武器類のように大量生産はされず、一般的ではなくたようである。兵庫県内の例からも主体部や他の副葬品が朝鮮半島由来の古墳に陪葬されており、鉄鉢自身も朝鮮半島に直接的な系譜をもつ遺物として認めることができよう。中佐古墳群では堅穴式横口式石室とともに朝鮮半島に系譜をもつものである。

## 5. その他の鉄器について

大刀は2号墳第2主体部内、4号墳石棺内から出土しており、鞘に収められた状態で棺側に副葬されている。2号墳出土の大刀(M3)の茎はやや幅を狭め、浅い背闊をもつものである。4号墳出土の大刀(M8)の茎もやや幅を狭め、一字文字尻と刃闊をもつ。

剣は5号墳石室内から鞘に収められた状態で出土している。剣(M15)は長剣であり、ナデ中細茎の斜角茎をもつ。「剣の副葬は5世紀末頃(TK47式併行期)で下火となり、続くMT15式併行期には極端に例が少なくなる」(臼杵1990)ことから、本例は最新の主体部形態に古い要素を残す副葬品が伴うことになる。

鎌は、4号墳及び5号墳から1点ずつ出土している。ともに曲刃鎌で、基部の折り返しは刃全体を折り返し、折り返しを表に向けたとき、鎌が左を向くものである。「細身で基部から身部にかけてごく緩やかに外反する牙形、の曲刃鎌はTK73型式～TK216型式(田辺1981編年)併行期に出現し、TK208型式～TK47型式併行期に盛行する。」(魚津2003)とされており、中佐古墳群ではこの型式のものが普遍的になった時期に、ともに石材を用いた主体部に副葬されており、木棺直葬墳ではみられない。

U字形鍔・鍔先は、5号墳から出土しており、平面形がU字形すなわち刃両端角が無い型式。刃先長が耳幅に比べて長いものである。「TK73型式～TK216型式(田辺1981編年)併行期に九州北部以外の各地でも副葬されるようになる」(魚津2003)型式である。

刀子は2号墳第2主体部、4号墳石棺、5号墳石室内から出土している。細部の形態や大きさは異なっているが、3点とも両闊をもつものである。「弥生時代後・終末期には片闊しか確認できない。古墳時代中期以降には片闊、両闊のどちらも確認できるが、後期以降は両闊のものが多数を占めるようである。」(松山1995)また、「TK208型式～TK47型式(田辺1981編年)併行期に、従来はすべてが片闊であった刀子がほぼ一齊に両闊となる。」(魚津2000)とされており、時期的にも符合する。

鉄錐は5号墳で20本以上出土した他、2号墳で頭部から茎部にかけての破片1点、4号墳から茎部の破片が1点出土している。2・4号墳のものは全容が不明であるが、5号墳石室からは茎に木質が付着し、数点が接着した状態で、石室奥壁近くの北側壁付近から出土した。矢柄に装着されて、おそらく束の状態で副葬された長頭錐が21本以上出土したが、征矢具は確認できなかった。個体差程度の差は認められるが、同一形式の比較的大きさの揃った鉄錐群である。「畿内中堅部における古墳で見ると、その出現はTK73型式期とTK216型式期の間であり、長頭錐が定型化し、多彩な形式からなる副葬錐の組み合わせも著しく衰退するのが、TK208～TK47型式期。」(鈴木2003)とされており、時期的にも符合する。

### 第3節 壇穴系横口式石室墳について

5号墳は調査を実施した中佐治古墳群で唯一、石室を内部主体にもつ古墳である。その石室の構造は、4号墳の箱式石棺に類似する板石を用いた構築法を採用しており、片側の短辺に石室床面より一段高い横口を設けて通路状に石を並べるが、その部分には天井石は架からない構造をもつ。「横穴式石室の一種。壇穴式石室と共通する狭長な平面の石室の片側の短辺に通路ないし狭道が開口したもの。通路ないし狭道は石室床面より一段高くなる。」(白石2005)とされる壇穴系横口式石室に符合する。

石室内は追葬によって乱された状況は見られない。閉塞施設（横口部）からは通常の大きさの木棺を入れることは非常に困難であり、閉塞の状況からも追葬は認められない。天井石の上も幾重にも目地を埋めるように板石が重ねられて構築されており、天井石を外した追葬も認められない。

5号墳では須恵器が2ヶ所に分かれて出土しており、被葬者が2人である可能性も考えられた。しかしながら、内法2.3m×0.55mの大きさは、4号墳の箱式石棺をひとまわり大きくした程度であり、ふたつの木棺を置くことは不可能である。出土した金属器は一束と数えられる鎌を含めて1点5つの出土であり、ひとりの被葬者に伴うものと考えるのが妥当であろう。

不明瞭ではあるが、石室床面には鎌床が敷かれている。遺物の多くは標の直上から出土しており、遺物は棺外にあったものであろう。鏡の下からみつかった板材はヒノキ製であり、棺材の可能性は残るものコウヤマキではないことから、鏡箱に入れられていた可能性を考えている。

矢柄を装着した鎌は束にして納めてあったものが、散らばって移動しており、木棺上にあった可能性が考えられる。但し、石室壁面に立てかけていた可能性もある。鎌・鏡先破片も埋土中から出土している。

被葬者は石室の中央部の遺物の出土がみられない木棺内に葬られていたか、但馬ビクニ古墳で推定されたように木棺に入れずに石室内に葬られた（谷本1992、瀬戸谷2004）ことが考えられる。後者であるなら当初から2体埋葬されていた可能性が残るが、その根拠は須恵器が2ヶ所に分けて副葬されたことだけであり、ビクニ古墳のように人骨が遺存し、装饰品や土器枕などから複数の被葬者の存在が伺われるものではない。出土した須恵器も一方が蓋をした杯1セット、もう一方が蓋をせざ置かれた杯と短頸壺であり、土器枕とは考えられない。石室内から出土した須恵器は、木棺直葬墳でみられる棺上に置かれたものと、墓牘上、墳丘上に置かれたものを石室内に移動させた結果と捉えたい。

銅鏡が石室北東隅から出土し、鉄劍の鋒が西を向き、口を開けた須恵器が石室東端に並ぶことから、被葬者は束に頭を置いて、頭の上方に口を開けた須恵器を置き、足元に蓋をした須恵器や工具類を配したものと考えている。

丹波地域の出現期の横穴式石室は点的に散在し、同一古墳群内に複数基存在することはない。南丹波には、正方形の玄室プランをもつタイプが分布しており、氷上町春日町の多利・向山C-2号墳、春日町火山10号墳、氷上町山南町の井原至山古墳、南丹市園部町の園部天神山2号墳、亀岡市下矢田町医王谷3号墳などがある。

このタイプの石室をもつ古墳は、播磨においては揖保郡内に集中しており、南丹波と同様、MT15型式期が最も古いものである。揖保郡のものは「播磨国風土記」の記載などから朝鮮からの渡来人と関係が考えられており、また、南丹波のものでは、渡来系氏族と関係の深い和邇氏と同族の春部氏の存在

からやはり渡来系氏族との関係が考えられている。(岸本1985)

中佐治古墳群から島崎了子山を北に越えた京都丹波では、福知山市池の奥4号墳、福知山市夜久野町流尾古墳、綾部市以久田野49号墳や高谷3号墳など、縱長方形の玄室プランをもつ竪穴系横口式石室が分布している。

竪穴系横口式石室は丹後地域の野川・竹野川流域や、北但馬の円山川流域に分布している。但馬地域の竪穴系横口式石室は養父市八鹿町米里7号墳がTK47型式期とされるが、石室の基底部しか残存していなかった。続くMT15型式期では豊岡市大師山5号墳や香美町村岡区八幡山5・6号墳など但馬の各地で出現するようになる。(谷本1992) また、但馬では、大師山古墳群や八幡山古墳群、養父市八鹿町見谷古墳群で複数基の竪穴系横口式石室が築造されており、他地域とは異なった様相を示している。

周辺地域での横穴系の埋葬施設の導入期には、南丹波では正方形玄室プランを主としており、瀬戸内の掛保郡と似通っており、加古川をさかのぼる伝播のルートが想定されている。(林1988) 北丹波や丹後、但馬では竪穴系横口式石室が多く採用されており、中佐治5号墳もその南端に含まれていることになろう。しかしながら、その石室規模は他の竪穴系横口式石室と比べて小さく、また箱式石棺のよう板石を立て並べる構造も他とは異なる。

箱式石棺を思わせる玄室側壁の腰石に薄い板石を用いるものは但馬以西の山陰地方に分布しており、倉吉市の養水1号墳、青野町の長谷1号墳、同7号墳、米子市の石州府67・69・109号墳などが調査されている。倉吉市の服部36号墳や11号墳も板石を用いるが、腰石の背後に板石を小口積みしており、石陣に似た状況である。鳥取市の六部山80号墳のように正方形に近い玄室プランをもつものもある。他に鳥取県内では、米子市東宗像6・7号墳、東伯町の大法3号墳、同三保6号墳、大栄町の上種東3号墳、同上種西15号墳などの初期期の横穴式石室が分布している。

この他、距離的には離れているが、中部高麗の長野県では善光寺平に5世紀中頃から出現する合掌形石室や、善光寺平、松木平、伊那谷に分布する腰石をたてる石室が板石を用いた石室構造であり、韓半島から九州との関わりや、馬生産に関係する地域との分布の重複が考えられている。(西山1999)

更にこのような板石を主に用いて四壁を構築するものは朝鮮半島南部にも見られる(大邱達西飛山洞37号墳第1・2石室、同55号墳、漆谷若木古墳)が、規模は圧倒的に大きいものであり(亀田1980)、直接的な影響は非常に薄いものであろう。

## 第4節 まとめ

中佐治古墳群では短期間に6基以上の古墳が3支群に分かれて、列をなして構築されている。この内、A支群では2号墳が墳丘規模、主体部数、副葬品等で他を圧倒しているが、3基とも木棺直葬墳である。山裾のB支群では1基のみの調査であったが、他もおそらく木棺直葬墳であろう。C支群に統いて築造され始めたらしい。最後に構築がおこなわれた急斜面に立地するC支群では墳丘規模以上に構築の手間がかかっている。なかでも5号墳は石室構造を有し、葺き石をもつ。谷中を通る街道を望んだ威を意識したものであろう。このC支群のみ石材を用いた箱式石棺や竪穴系横口式石室を主体部としており、農工具の副葬もこの支群に限られる。

須恵器は木棺直葬墳では墓壙内や棺上に杯類を用い、墳丘上や周溝内で壺・壺類や杯類を用いている。棺内には納めない。箱式石棺でも墳丘上や周溝内で壺・壺類や杯類を用いており、棺内には入れな

い。堅穴系横口式石室墳では周溝内で壺・壺類を用いており、墓壙内である石室内に杯や短頸壺を用いている。おそらく棺内には入れないものであろう。主体部形態が異なっても、須恵器を用いた祭祀は伝統的な用い方を踏襲している。

副葬品は鏡や鉄器で中規模の古墳としても多いほうではない。装飾品はガラス玉が1点出土したのみである。金属器を副葬する古墳は2号墳、4号墳、5号墳で、1・3・6号墳ではみられない。墳丘の規模や構築の手間に比例して点数が多くなる傾向がある。

5号墳の堅穴系横口式石室や4号墳の铁鋸は朝鮮半島由来の系譜をもつものであるが、直接的な系譜ではなく、九州あるいは山陰地方または、瀬戸内を経て移入され、地元の伝統的な箱式石棺の構築法との折衷から生み出されたものであろう。青垣町では6世紀代の朝鮮系陶質土器の長頸壺が採集されたといわれており、纏々としたものであるが、かの地との交流を見出すことができる。

堅穴系横口式石室は近辺では但馬地方に古いものが存在し、同一古墳群内に複数基存在するなど、一定の定着を見ることができる。中佐治5号墳は最も古い時期に属しているが、継続する古墳は確認できない。中佐治古墳群より南側の南丹波地方には正方形の玄室プランの石室が分布している。中佐治5号墳は両者の境界域に位置するものであり、続く時期には応寺相古墳群のような所謂畿内型横穴式石室墳の導入とともに埋没していくものであろう。

本柏直葬や箱式石棺は本地域においても弥生時代以来の先行する墓制であるが、ここに堅穴系横口式石室が導入された背景は何であろうか。

地方における墓制の変更は、新来の人物或いは集団が移り住んだことを示している。先行する墓制が存在する古墳群においては、その既存集団内に編入された可能性が高い。

埋葬施設の形態変更是イデオロギーを含めた墓制の変更であり、新來の技術のみの入手ではなく、思想的な変更が必要である。ましてや堅穴系の墓制から横穴系の墓制への変更はマイナーチェンジであるはずがなく、全国的にみられることからも大きな社会変革がその背景に存在するものであろう。その波は一時的なものではなく、数次にわたってこの地にも押し寄せてこととなる。堅穴系横口式石室はその先駆的な第一波と捉えることができよう。

#### 〔参考文献〕

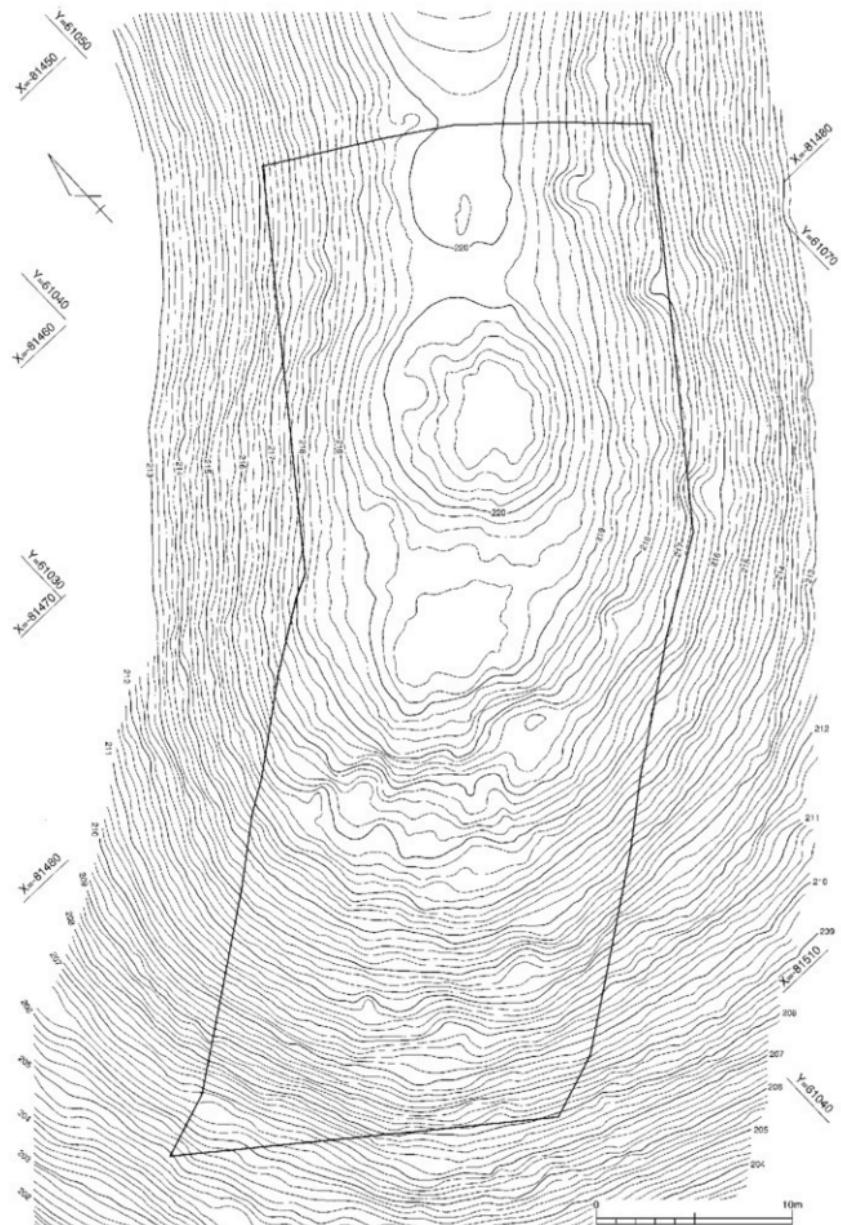
- 田辯崎二1966『陶邑古宮跡群』『平安学園研究叢書』第10号  
田辯崎三1981『須恵器大成』角川出版  
芦田茂1980『奈良ヶ谷1号墳』西紀・丹南町文化財報告第8集 西紀・丹南町教育委員会  
栗田行郎1989『遺跡』『須恵器土器の種類』『地方色』『鬼神谷御所祭器調査報告』竹野町文化財調査報告書第7集、竹野町教育委員会  
山田邦和1995『近畿東北部(京都南部・滋賀)』『須恵器集成図録』第2巻高麗塚』中村浩・藤原信重編集 雄山閣出版株式会社  
豊口龍康1979『古鏡』新潮社  
今井・森1981『西・四国地方出土土器・壺陶文・珠文鏡』小笠哲哉の再検討I-1.『古代吉備』第13集 古代吉備研究会  
中山猛彦・林原利明1993『小笠哲哉鏡の基礎的集成(1) - 珠文鏡の集成-』『地縁相研究叢書21号』  
蟹本敏一2002『江戸風の出土古鏡』学生社  
高田賛太1998『古墳銅鏡鏡の性質』『考古学研究』45-1 考古学研究会  
門田誠一1988『古代伽耶の鏡七』『同志社大学考古学シリーズ』考古学と技術  
橋本達也2001『岡田における古墳時代前・中期の銅製品』『治郷・便島の考古学』徳島考古学論集刊行会  
栗田昭明1995『池尻2号墳』『治古川市史』第四卷、史料編 I』糸麻屋加古川市  
石川考古学研究会1995『石川県考古資料叢典・集成果文報告書』武器・武装・馬具I  
兵庫県教育委員会2002『梅田古墳群II - 植田蓮池遺跡(5期)』事業に伴う埋蔵文化財調査報告書告白  
池浦俊一1993『武器・武装に因るる考察』『古代文化研究』鳥取県古代文化センター  
臼杵 繁1990『武器』『月刊考古学ジャーナル7』No.321,1990 ニュー・サイエンス社  
松山雅代1995『刀子』『武昌・武昌・馬具I』石川県考古資料調査・集成事業報告書 石川考古研究会  
松山雅代1995『矛』『武昌・武昌・馬具I』石川県考古資料調査・集成事業報告書 石川考古研究会  
魚津知克2000『武製農具開拓についての試論』『表象としての鐵器開拓』第7回鐵器文化研究集会 鐵器文化研究会

- 魚津知克2003「曲刀錐とU字形彫鏡先」『農兵の面影』の再検討-』『帝京大学山梨文化財研究所研究報告』第11集  
　帝京大学山梨文化財研究所
- 白石太一郎2005「笠穴方形縁口式石室」『日本考古学事典』田中雅・佐藤真編集 株式会社三省堂
- 岸本一宏1985「玄室方形ブランケット式石室について」『多賀町山古墳群』長野県文化財調査報告第35回 兵庫県教育委員会
- 谷本一雄1992「6世紀の墓制からみた古墳」『但馬考古学』第7集 但馬考古学研究会
- 源競誠1993「伊馬の中の笠穴系縁口式石室」「古代但馬と日本海」但馬考古学研究会
- 齋戸谷信1994「但馬の中の笠穴系遺跡と遺物」『古代但馬と日本海』但馬考古学研究会
- 齋戸谷信2004「横穴系埋葬施設の登場」『伊馬の古代2』シリーズ但馬2 但馬文化協会
- 柳沢一男1975「北部九州における初期横穴式石室の展開」『九州考古学の諸問題』福岡考古学研究会
- 柳沢一男1982「笠穴系横口式石室考」『古文化論集』森貞次郎博士古希記念
- 亀田修一1986「伊賀半島南部における笠穴系横口式石室」『第2号墳』宇土市埋蔵文化財調査報告書第3集 宇土市教育委員会
- 龜原実行1983「笠穴系横口式石室考」『古墳時代の新規丸』古墳文化研究会
- 森下浩行1986「日本における横穴式石室の出現とその系譜—畿内型と九州型—」『古代学研究』第111号 古代学研究会
- 森下浩行1997「九州類横穴式石室考—畿内型出現前・横穴式石室の様相」『古代学研究』第115号 古代学研究会
- 林日佐子1988「丹波に於ける初期横穴式石室」『考古学と技術』同志社大学考古学シリーズⅨ
- 土井吉司1989「笠穴系横口式石室考」『源来文化の受容と展開』第46回埋蔵文化財研究集会発表論文 1988年度  
　「岡山大学埋蔵文化財調査研究センター」
- 細川康晴2002「南丹波地域の横穴式石室」『考古学』に学ぶ(Ⅱ) 同志社大学考古学シリーズⅧ
- 西山克己1998「小部高通における新文化の受容」『源来文化の受容と展開』第46回埋蔵文化財研究集会発表論文
- 兵庫県教育委員会2004「高坂古墳群」兵庫県文化財調査報告第281番
- 兵庫県教育委員会2004「火山古墳群・火山城跡・火山遺跡」兵庫県文化財調査報告第283番
- 水上郡教育委員会1994「フロ山・ボク山」
- 水上郡教育委員会1996「平松山・山寺坂」
- 水上郡教育委員会1996「水上古墳群文化財調査報告書Ⅰ」
- 水上郡教育委員会1999「水上郡埋蔵文化財調査報告書Ⅲ」
- 水上郡教育委員会2003「水上郡埋蔵文化財調査報告書Ⅳ」
- 加悦町教育委員会1991「加悦町の古墳」加悦町文化財調査報告書 第16集
- 播磨市教育委員会1984「池の町古墳群」播磨市文化財調査報告書 第7集
- 園部町教育委員会1994「園部天神山古墳群発掘調査報告書」園部町文化財調査報告 第10集
- 倉吉市教育委員会1973「倉吉市川治原発掘調査報告書」
- 倉吉市教育委員会1987「倉吉古墳群・上畠水道跡発掘調査報告書」
- 大栄町教育委員会「上篠東古墳群第3号墳発掘調査報告」
- 米子市教育委員会・石州府古墳群発掘調査同1988「石州府古墳群発掘調査報告書」
- (財)鳥取県教育文化財団・鳥取県埋蔵文化財センター1999「長谷古墳群・長谷巣谷田遺跡」鳥取県教育文化財団蔵品報告書66
- (財)鳥取県教育振興会1994「六部山古墳群Ⅱ」

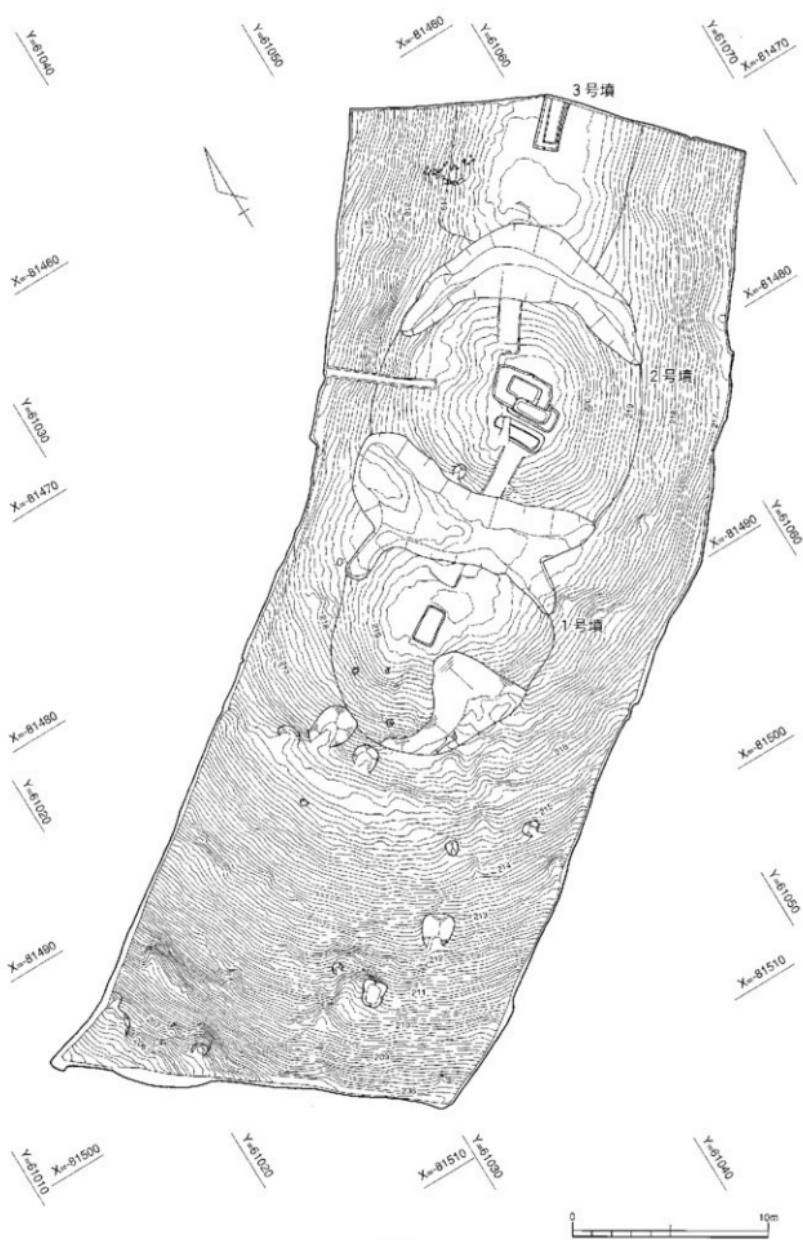
# 図 版



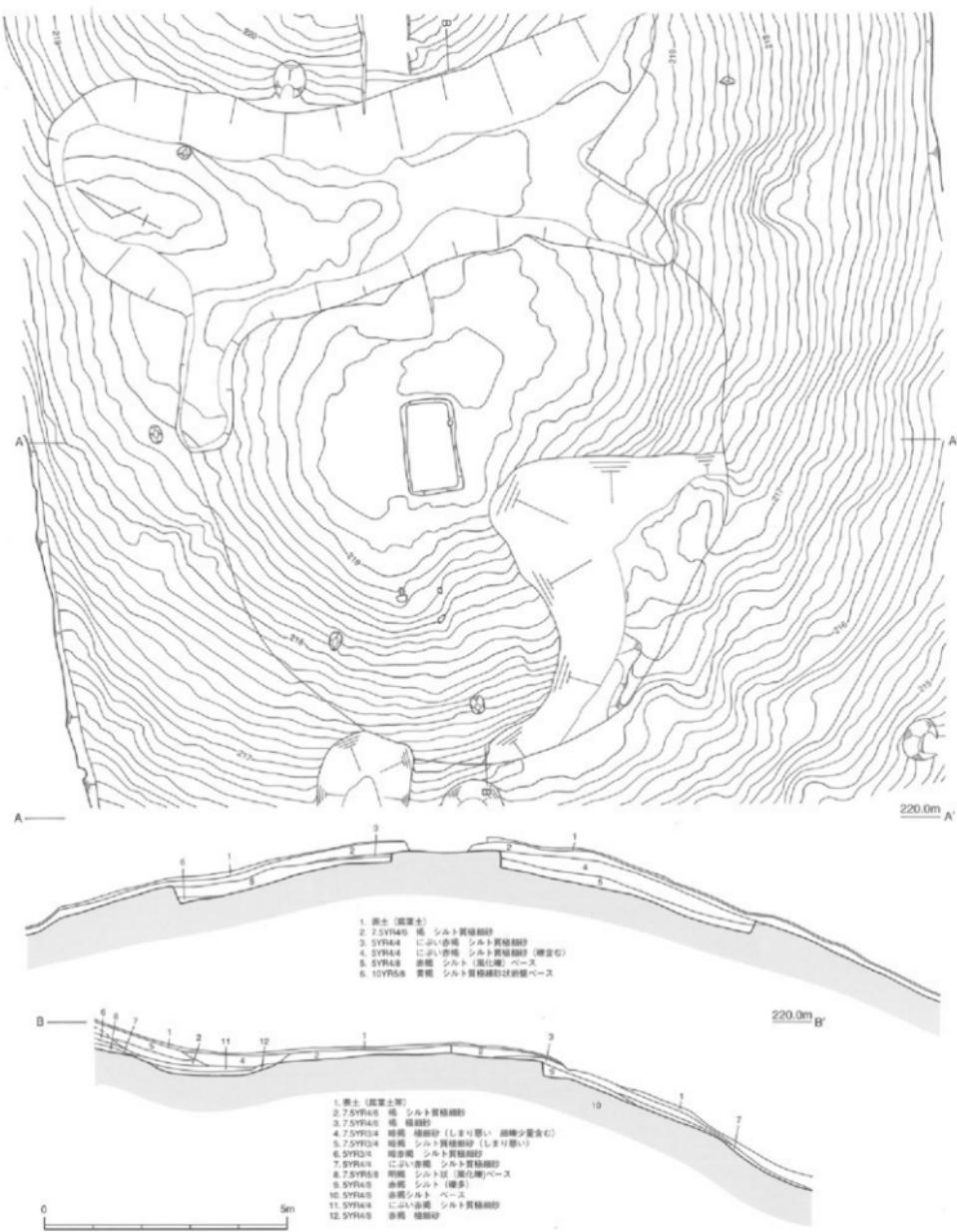
周辺の地形と調査範囲



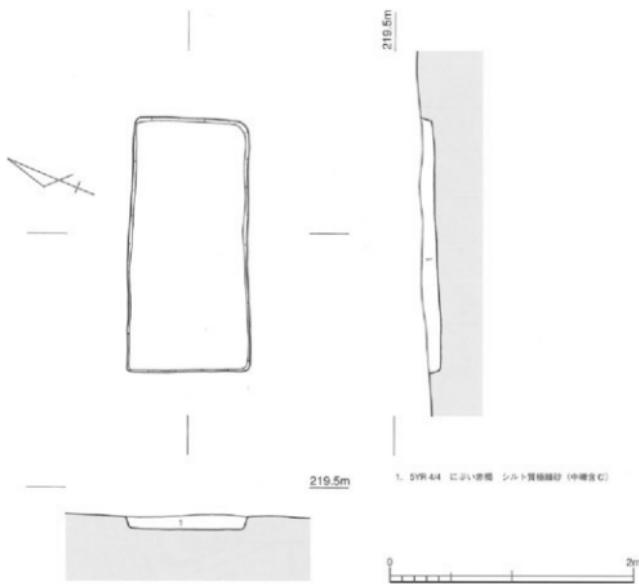
A区調査前測量図



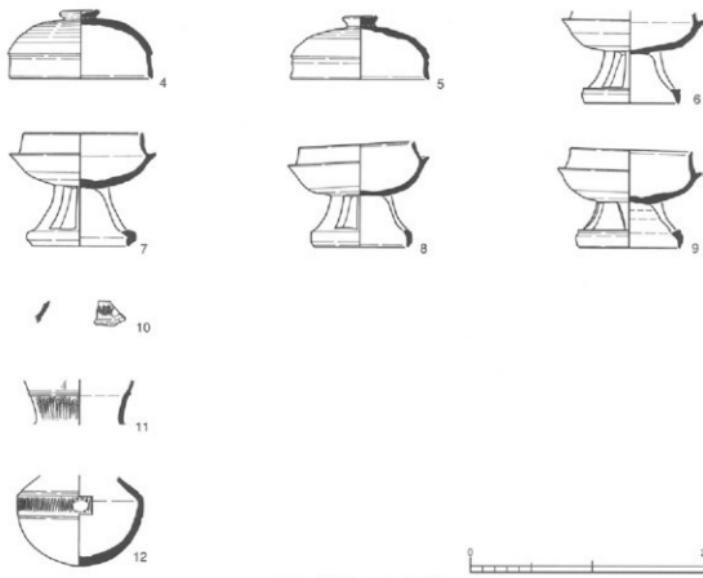
A区遺構配置図



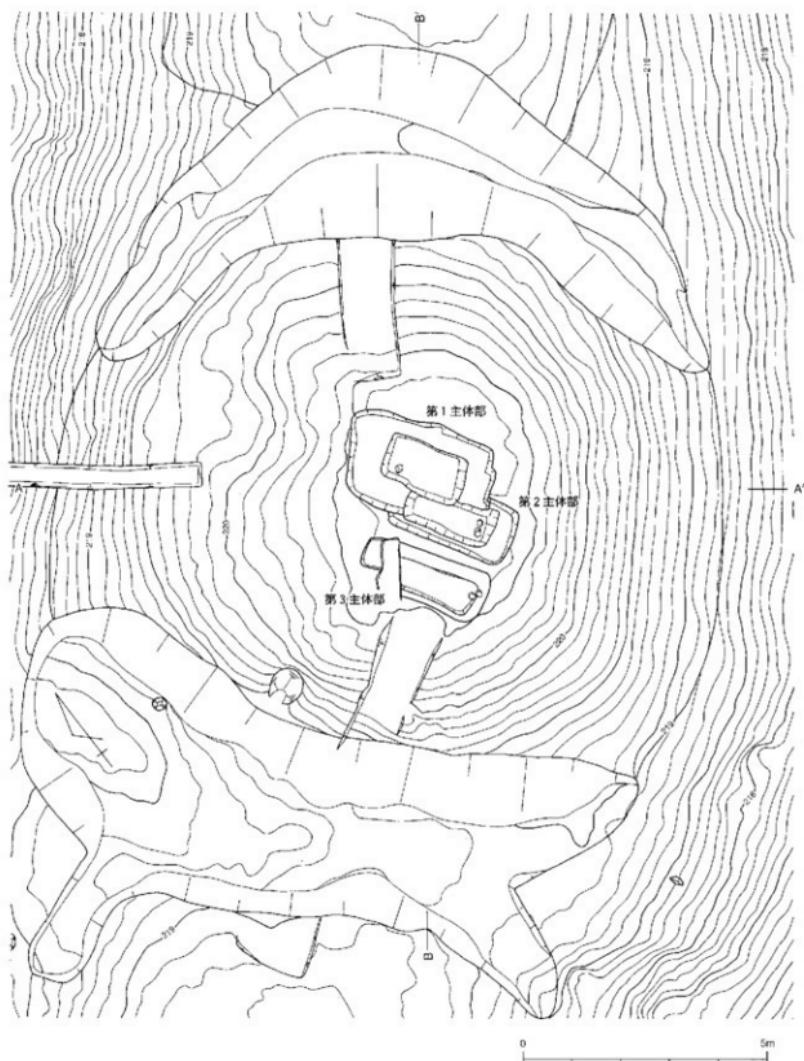
1号墳填丘と基本土層図



1. SV9-44 にびい塗施 シルト質埴縁瓦 (半縮合C)



1号墳主体部、出土遺物

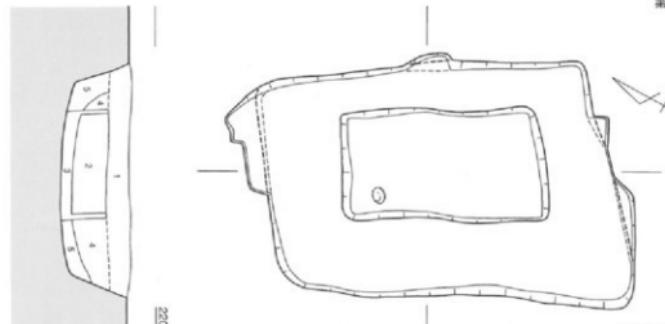


2号墳墻丘



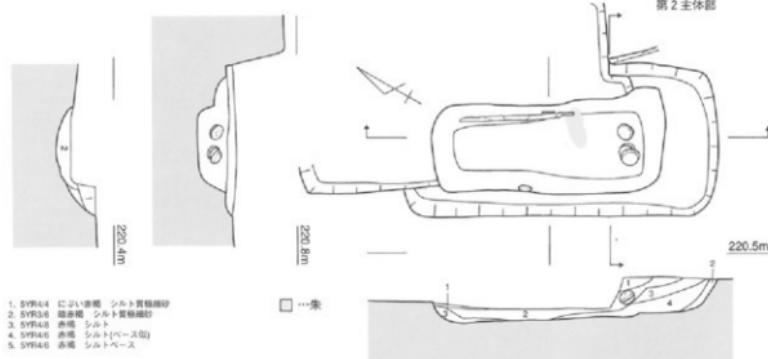
2号墳基本土層図

第1主体部



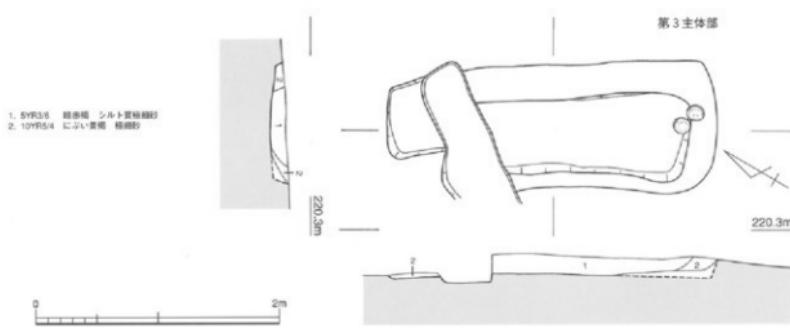
1. SYR4/4 壁 シルト質粘土
2. SYR4/5 表面層 シルト質粘土
3. SYR4/6 なべい・シルト質粘土
4. SYR4/3 地歩層 シルト質粘土(中野含石)
5. SYR4/4 にかい表層 シルト

第2主体部



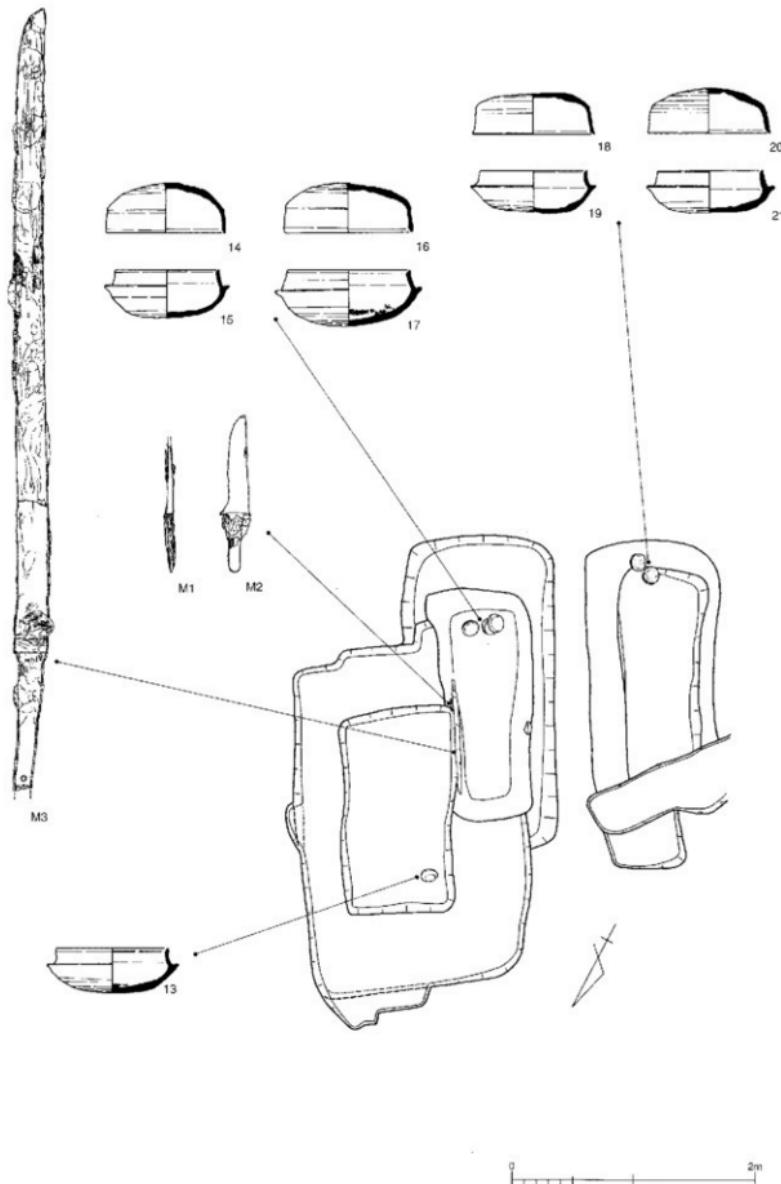
1. SYR4/4 にかい表層 シルト質粘土
2. SYR3/8 縦走層 シルト質粘土
3. SYR3/9 縦走層 シルト質粘土
4. SYR4/4 表層 シルト(ハース田)
5. SYR4/6 底層 シルトベース

第3主体部

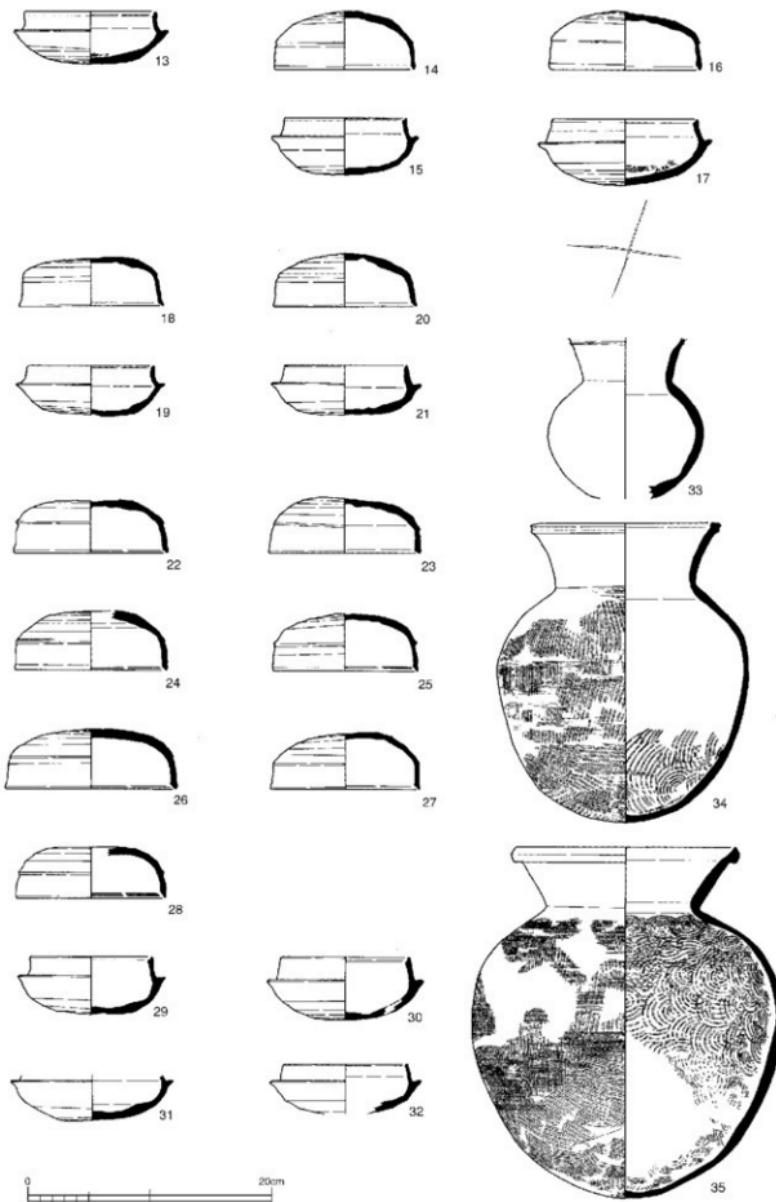


2号墳主体部

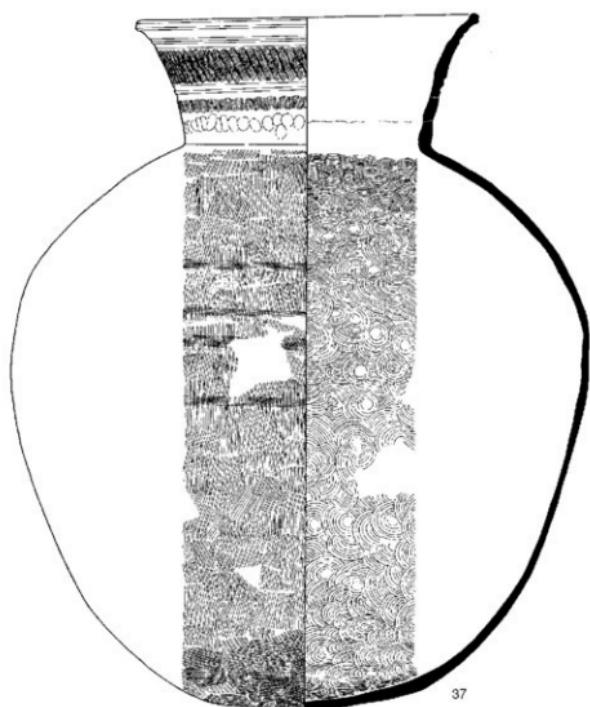
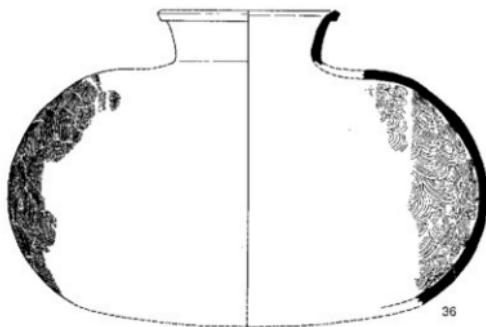
1. SYR3/8 縦走層 シルト質粘土
2. 10m×5/4 にかい表層 粘土



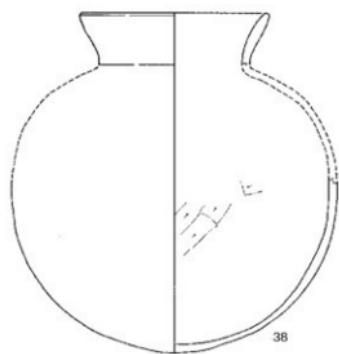
2号墳主体部遺物出土状況



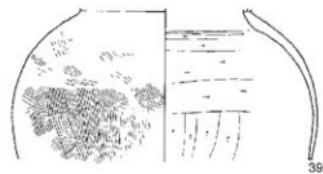
2号墳出土遺物 1



2号墳出土遺物2



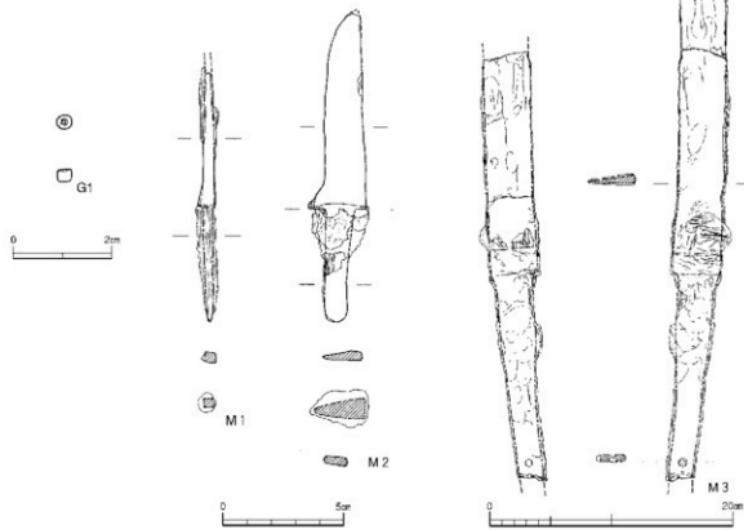
38



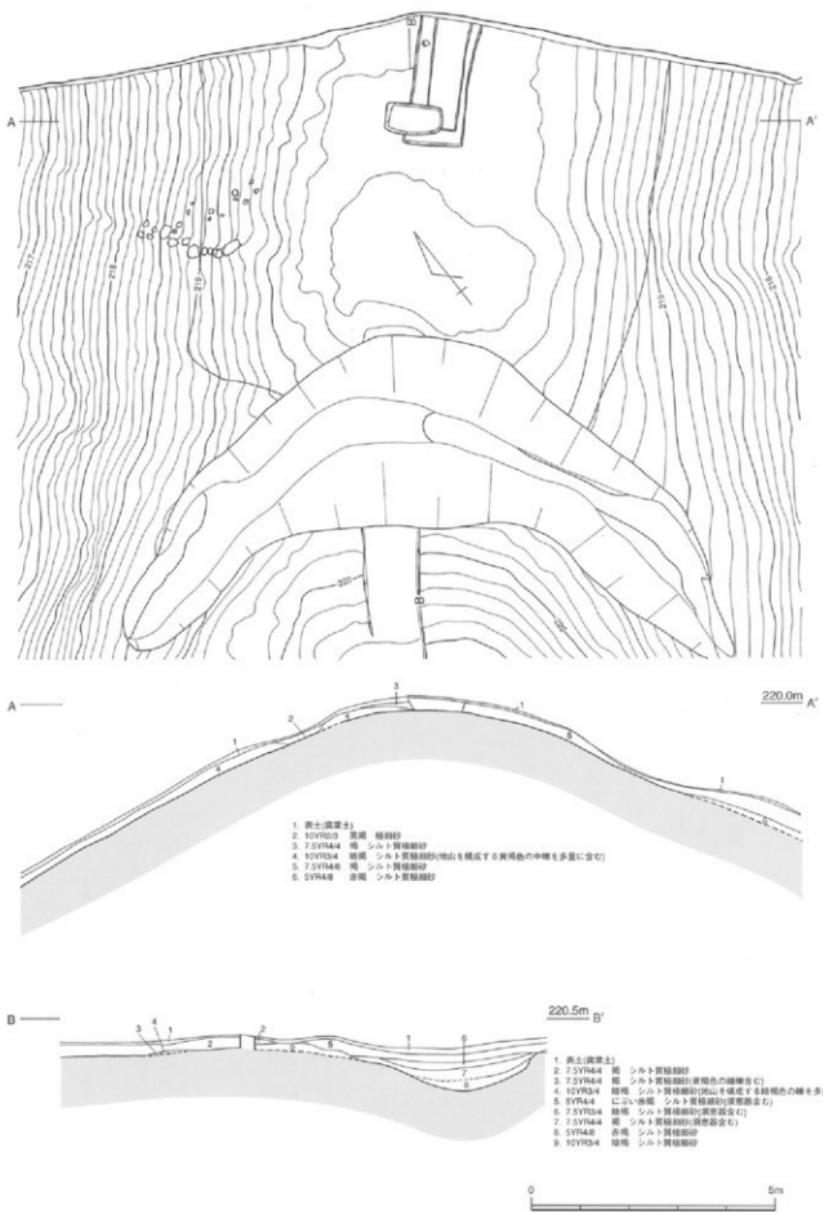
39



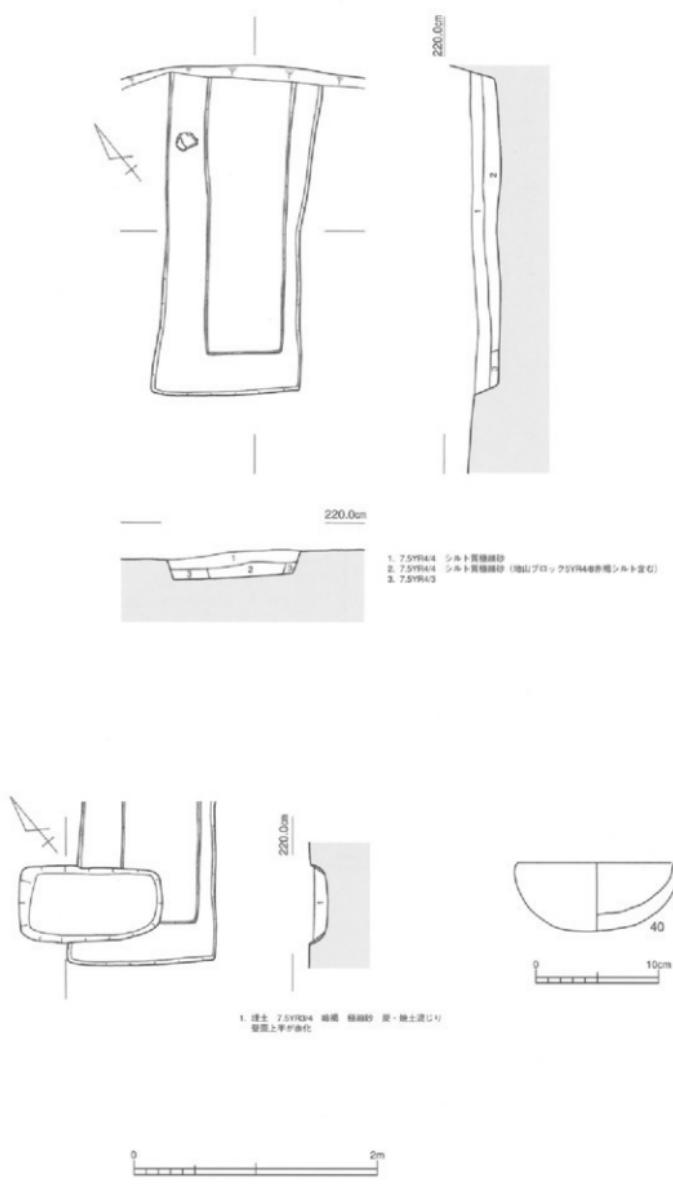
0 20cm



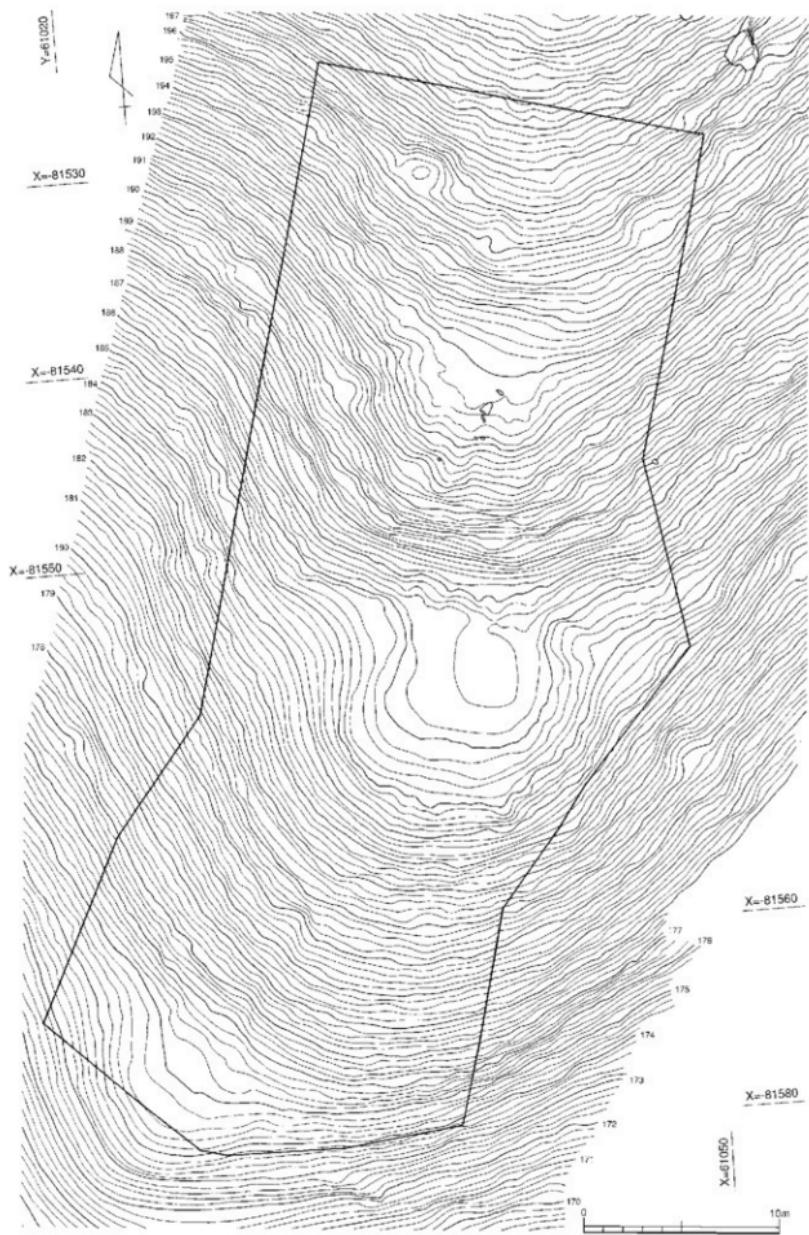
2号墳出土遺物 3



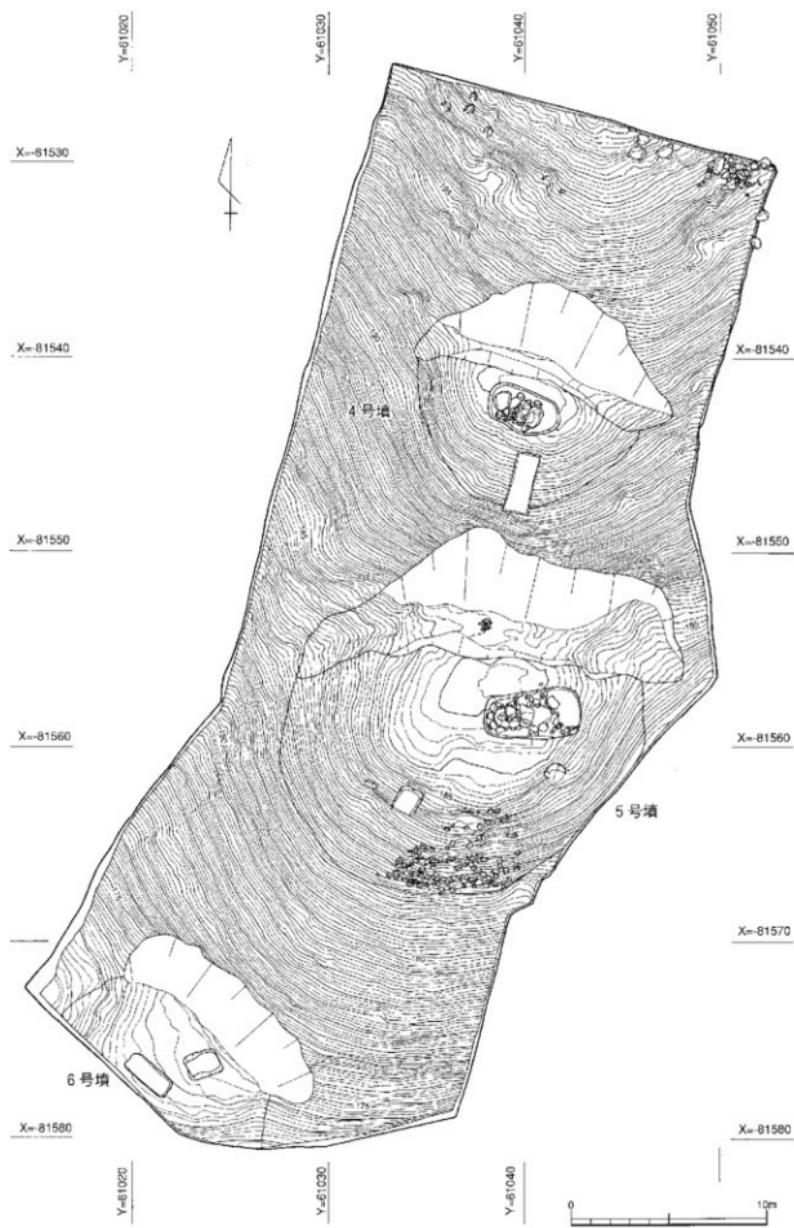
3号墳墳丘と基本土層図



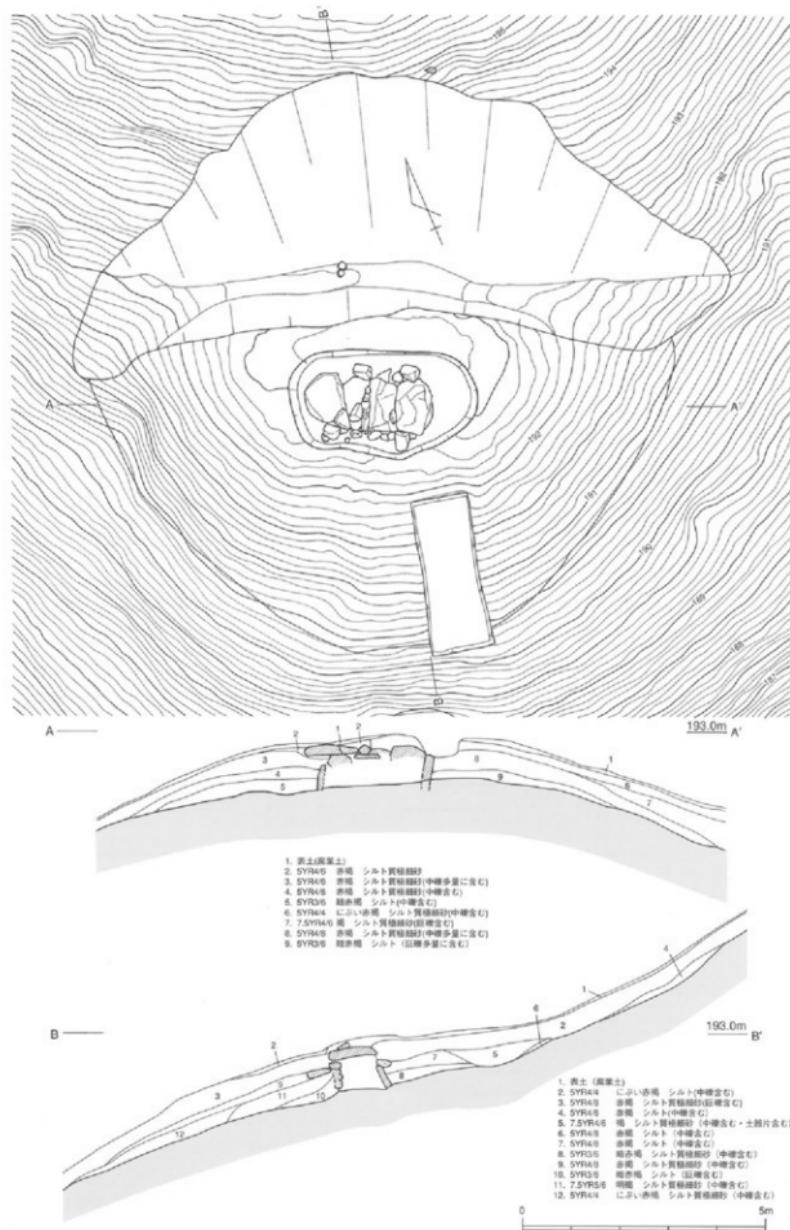
3号墳主体部、土坑、出土遺物



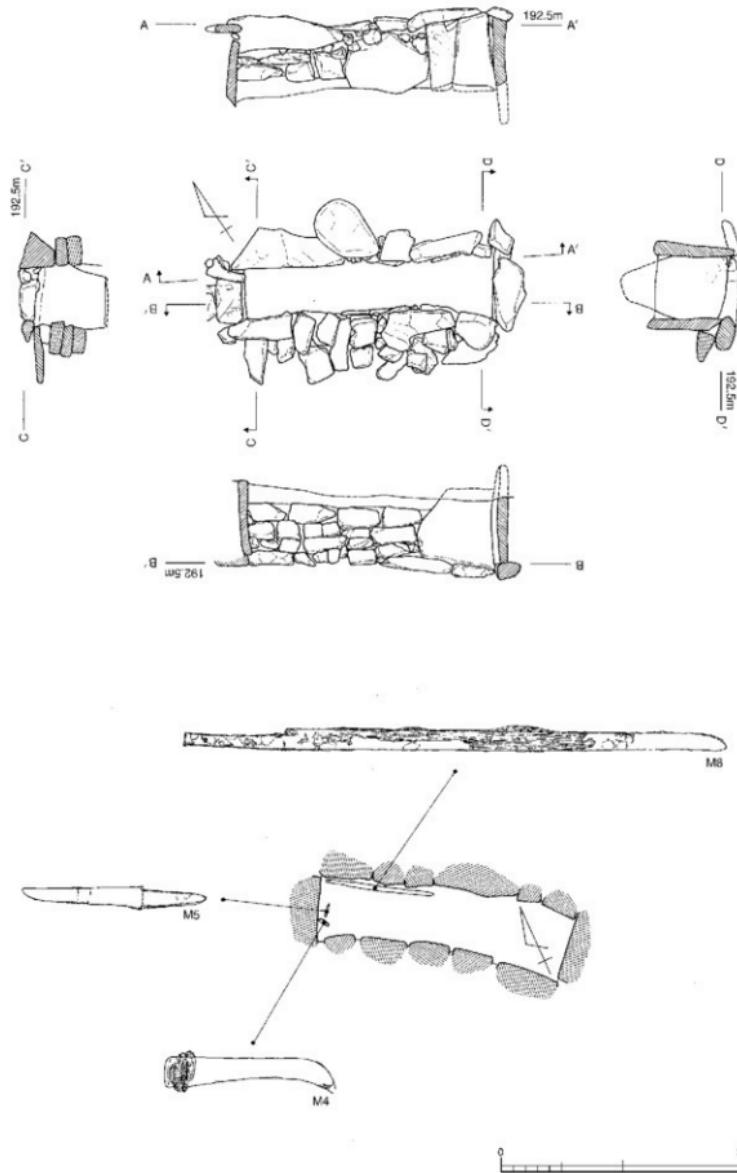
B区調査前測量図



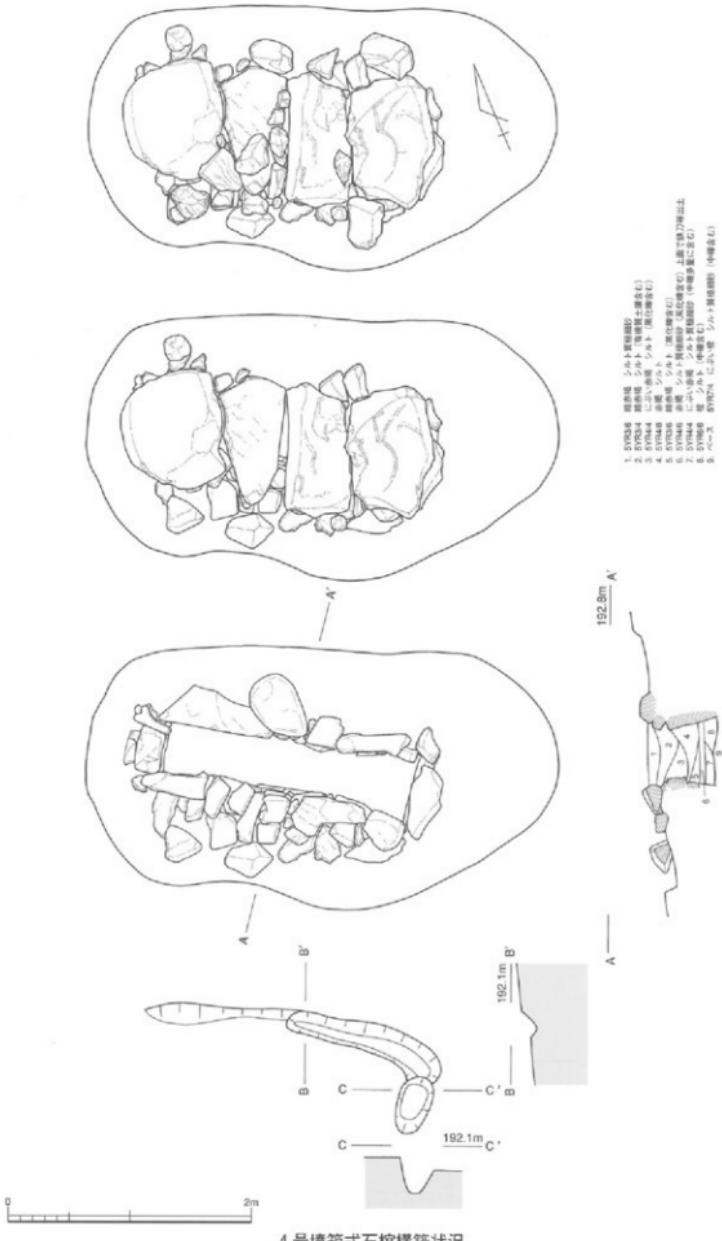
B区造構配置図



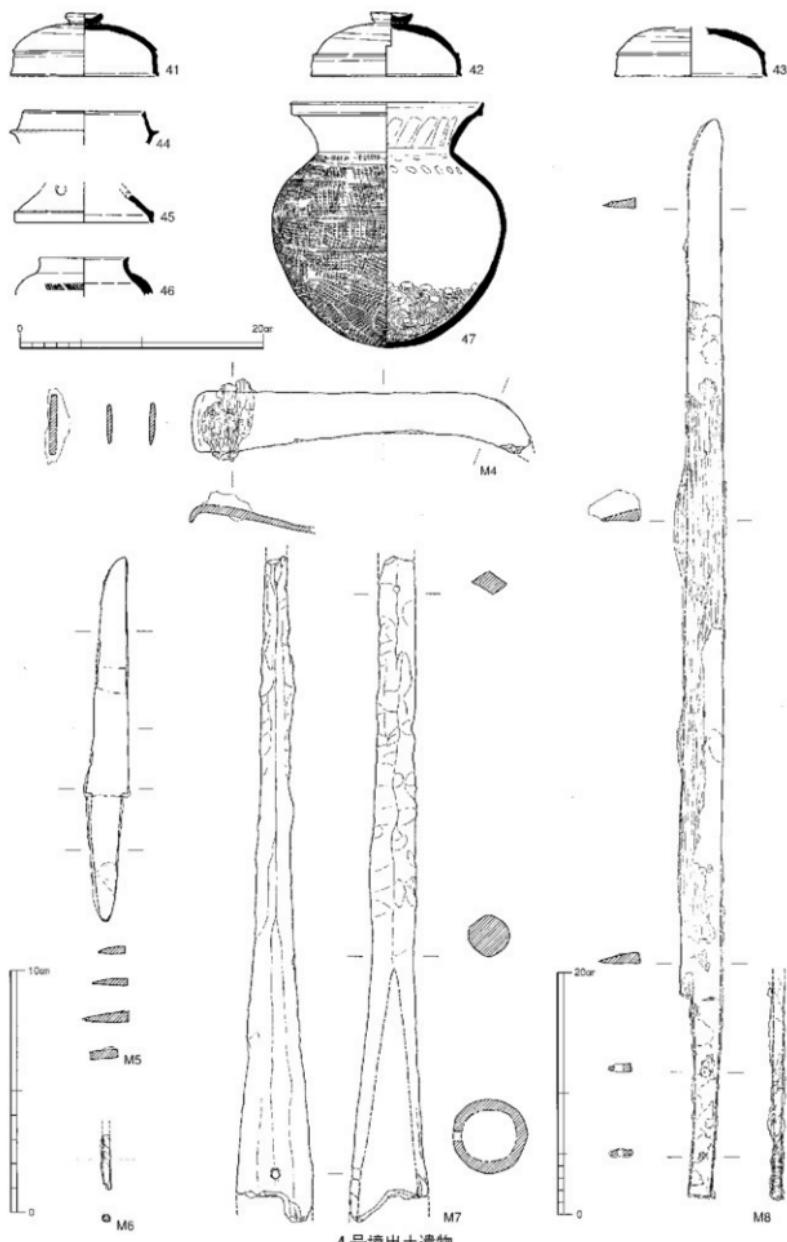
4号墳墳丘、基本土層図



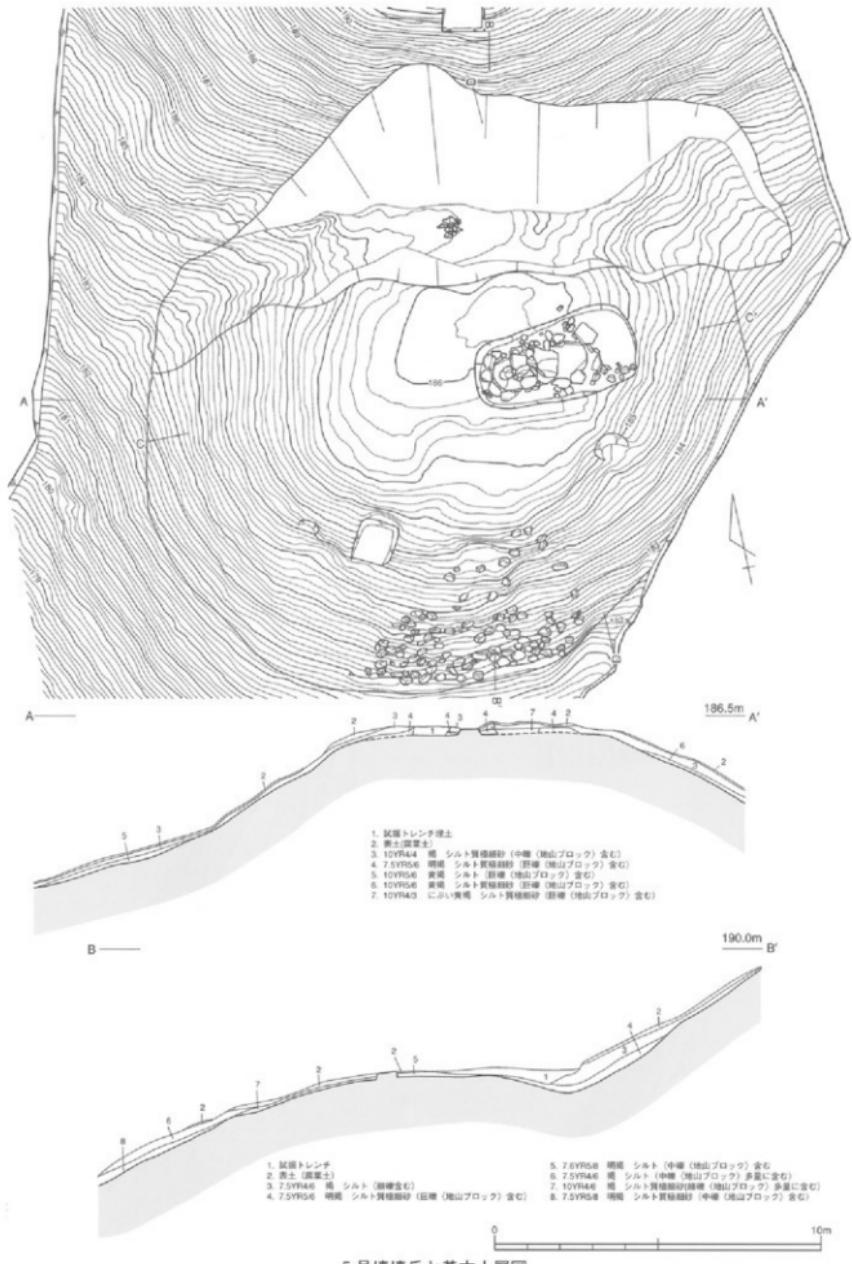
4号墳主体部箱式石棺と遺物出土状況



4号墳箱式石棺構築状況



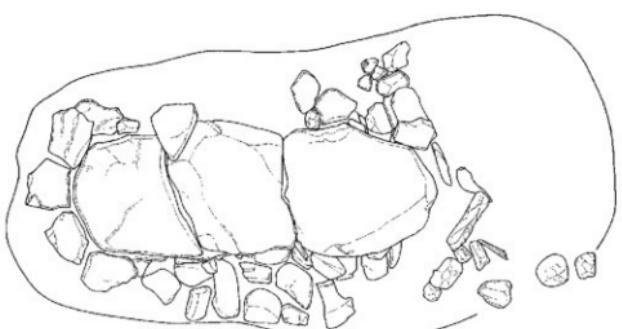
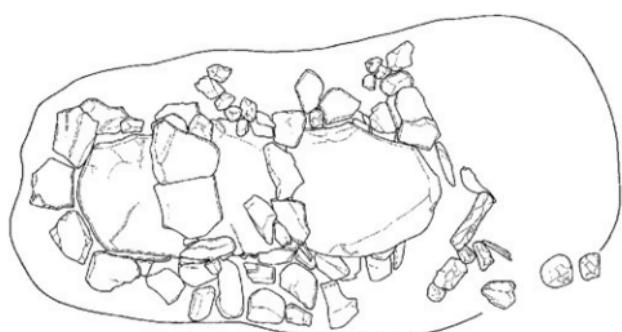
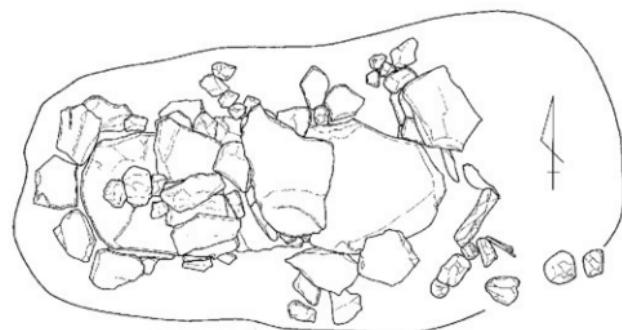
4号出土物



5号墳墳丘と基本土層図

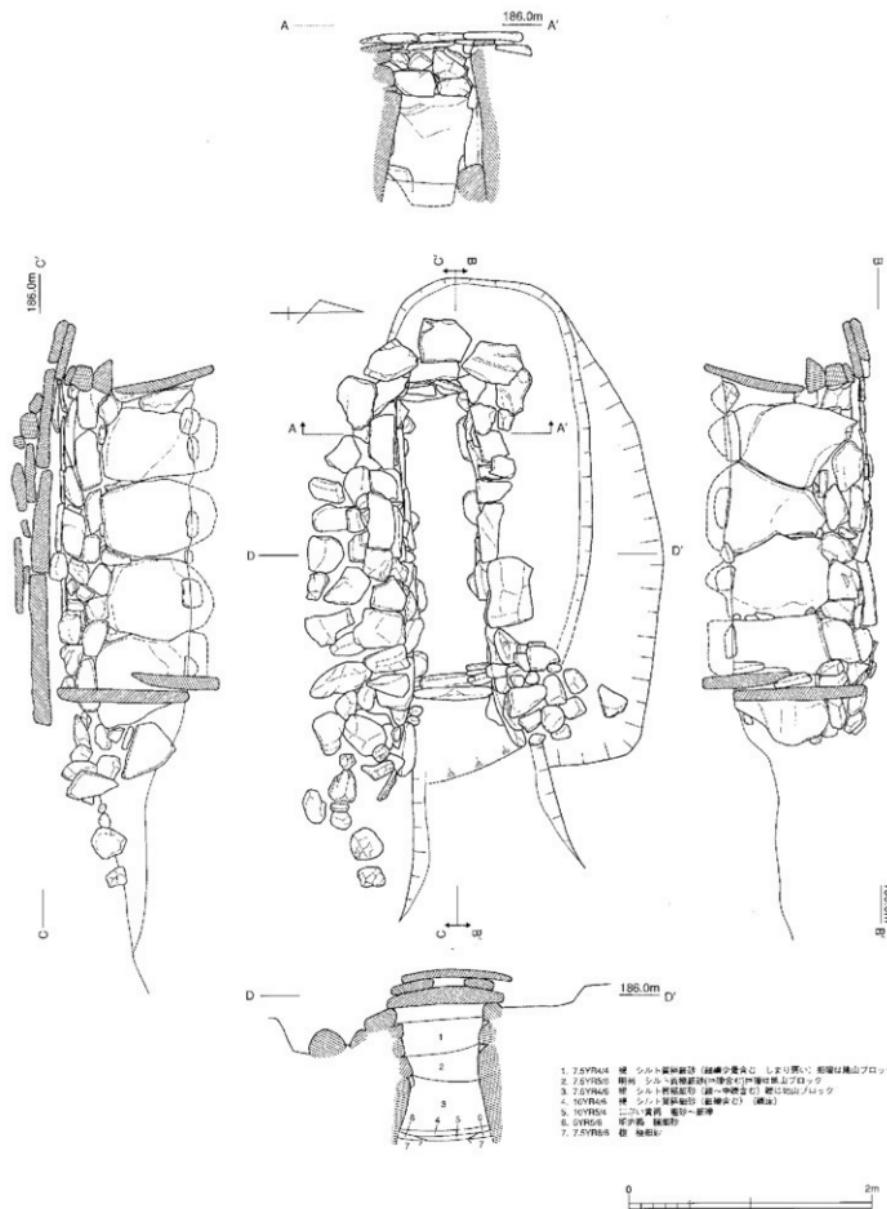


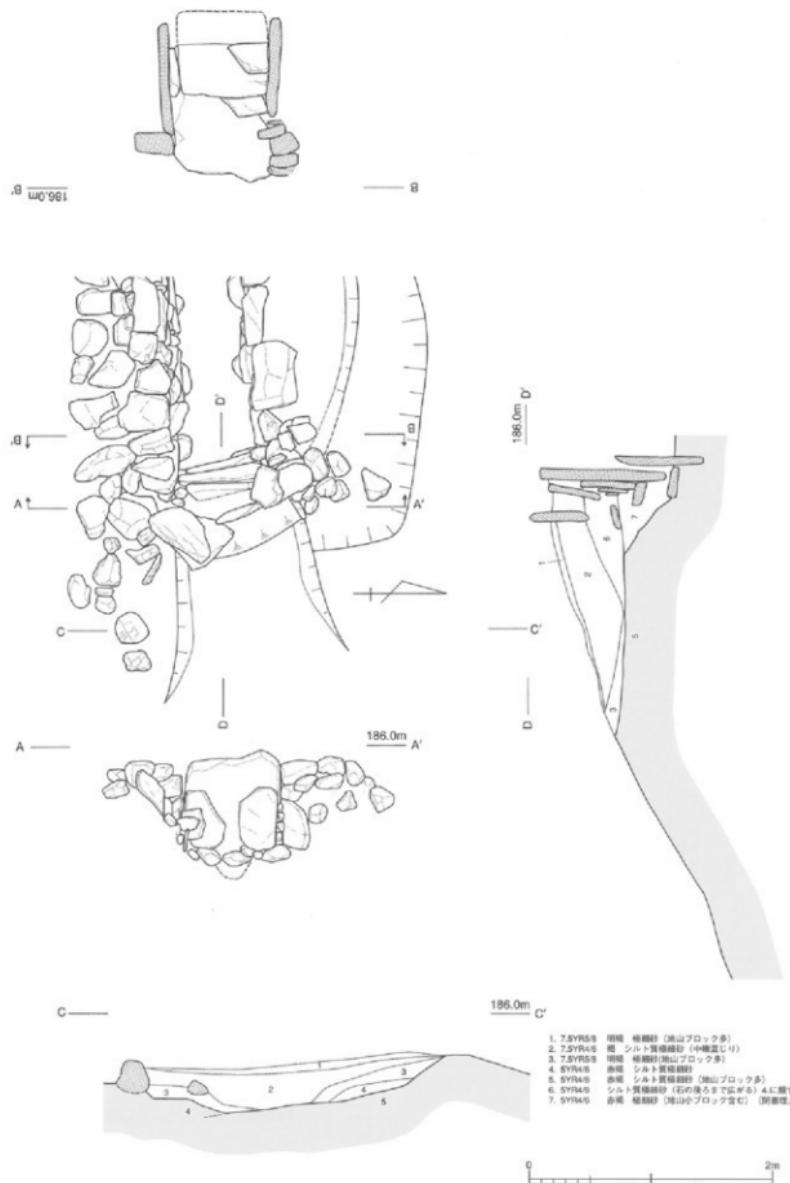
5号墳基本土層図



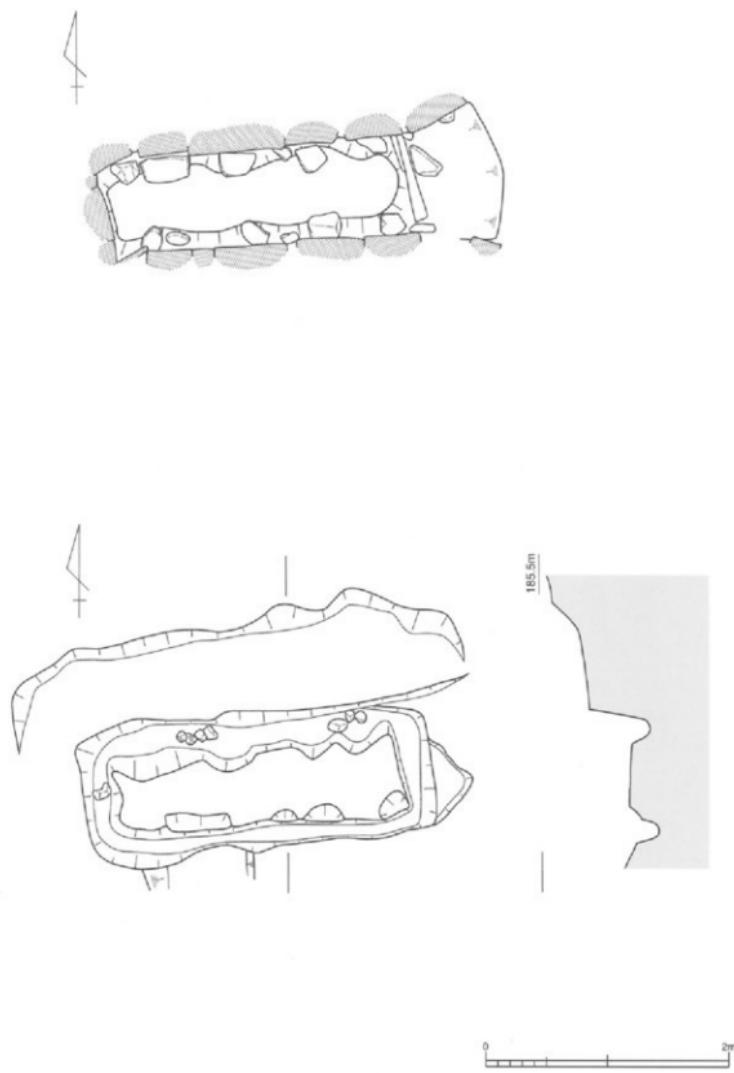
0 2m

5号墳天井石の状況

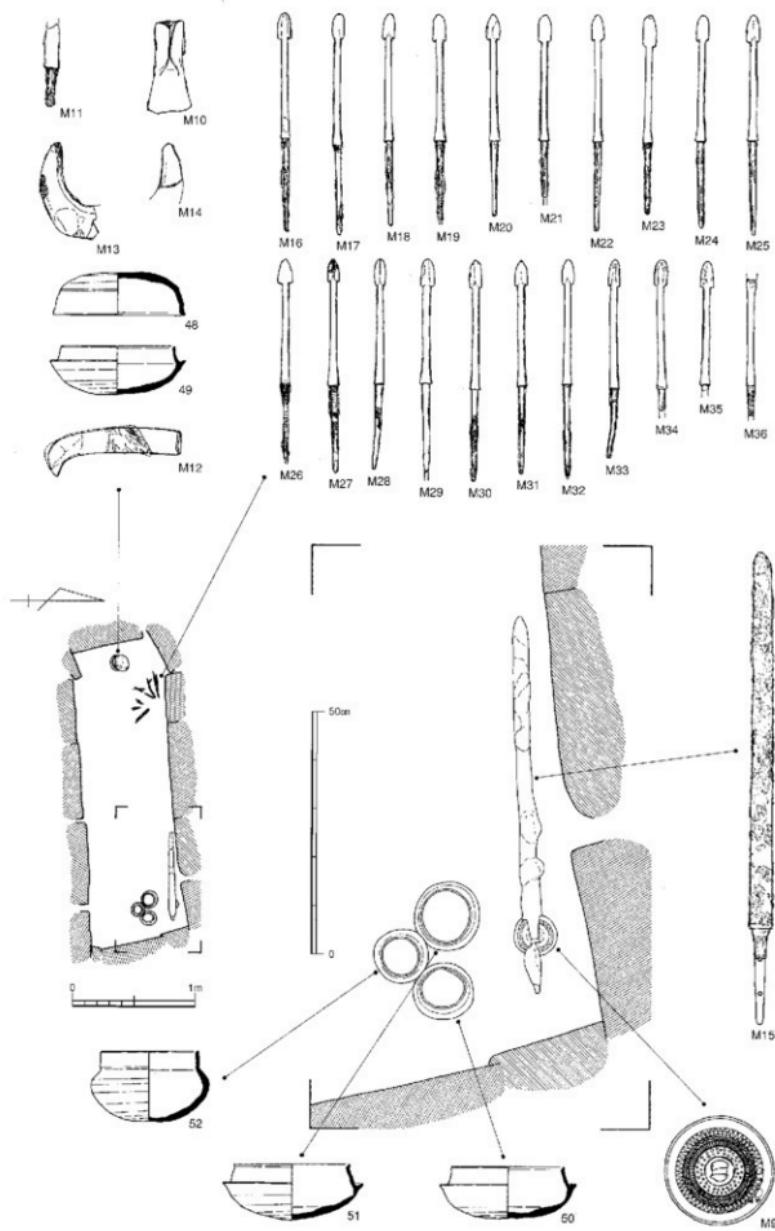




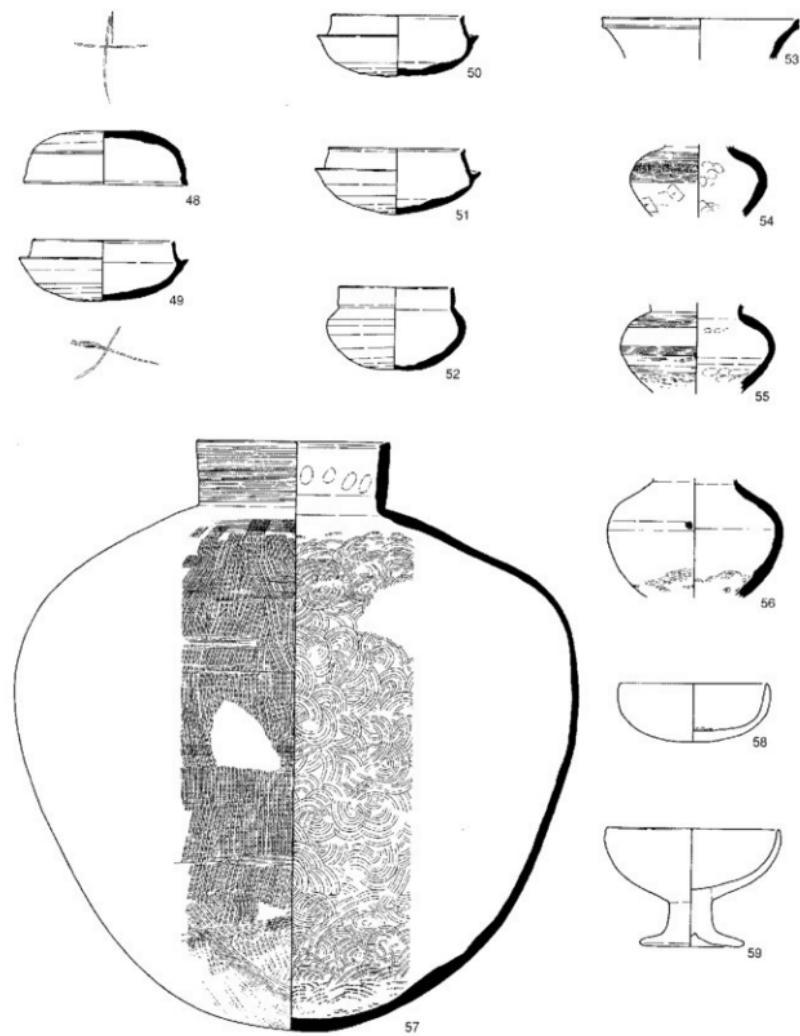
5号填塞状況



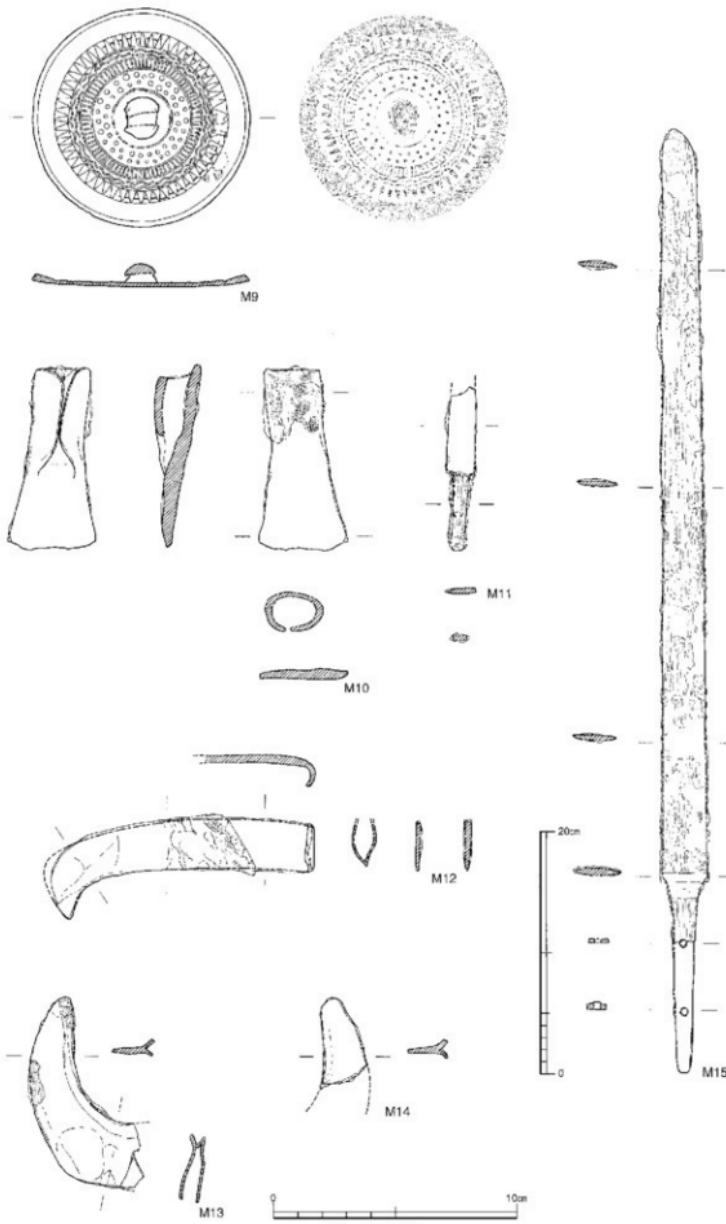
5号墳石室構築状況



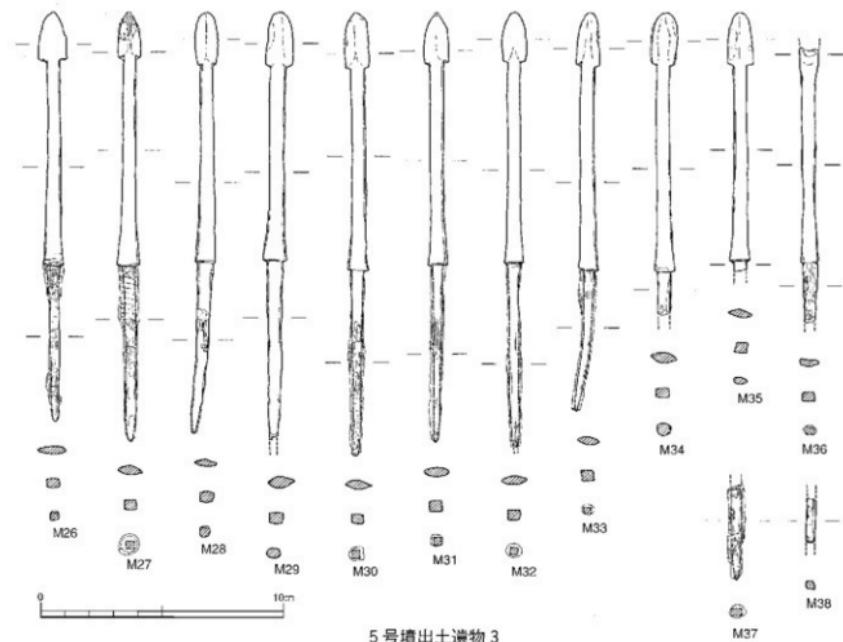
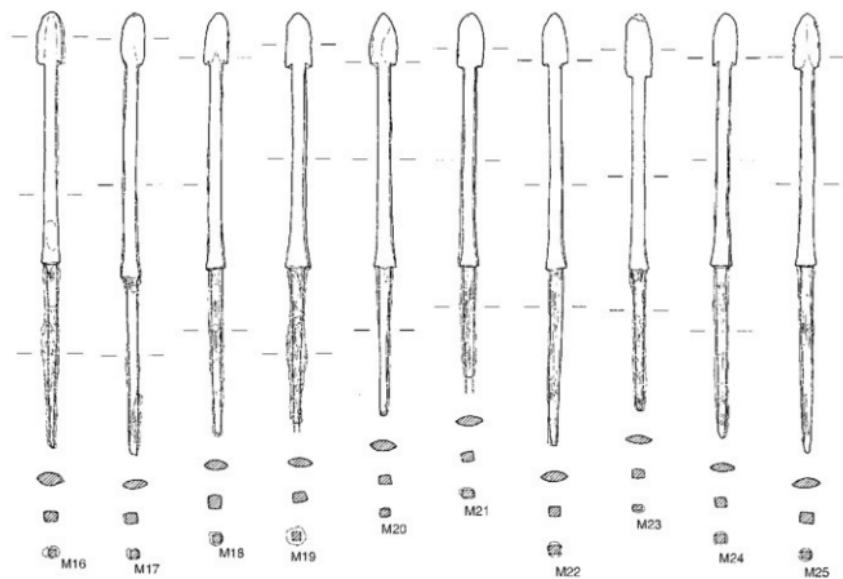
5号墳遺物出土状況



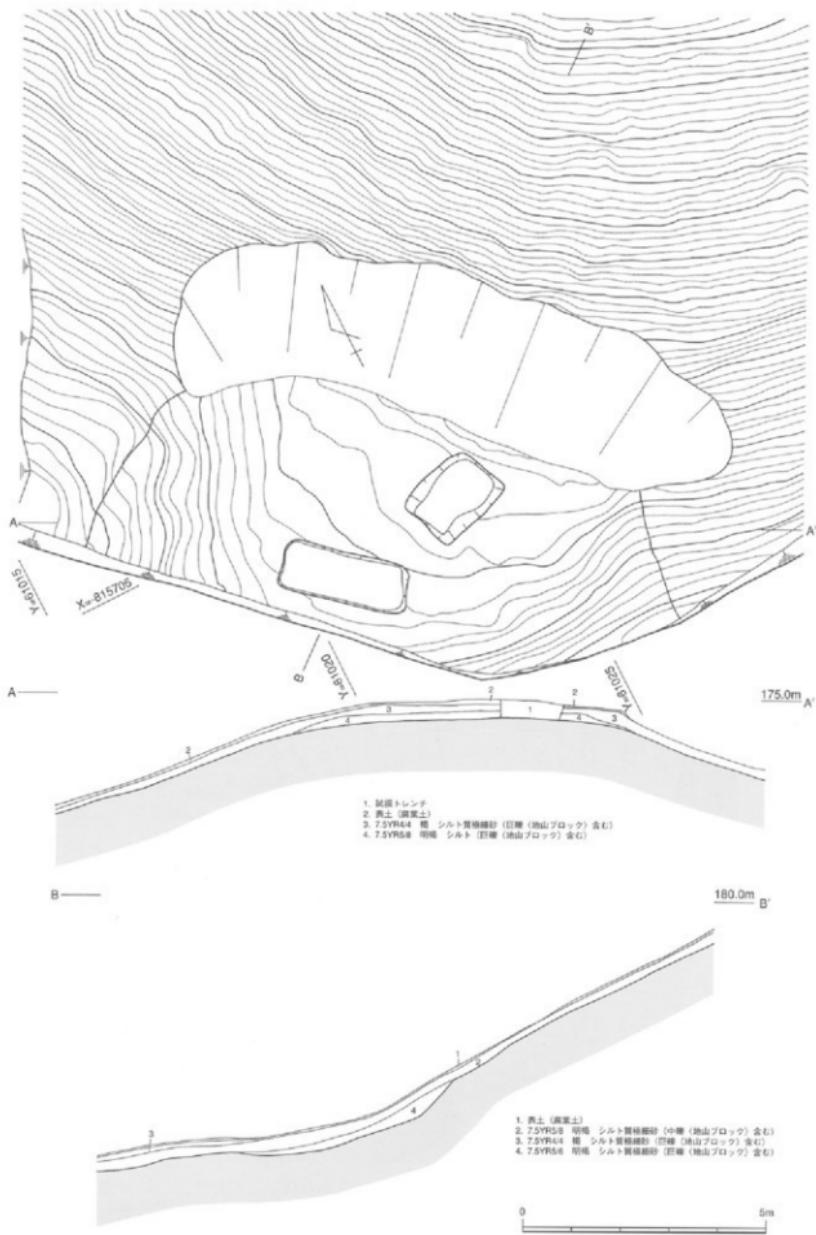
5号墳出土遺物1



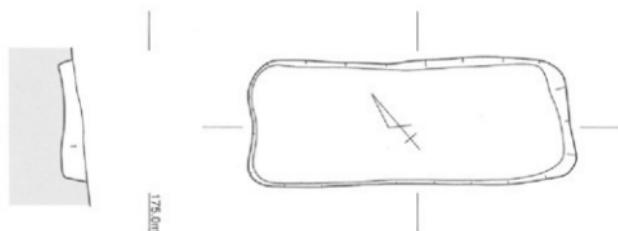
5号墳出土遺物 2



5号墳出土遺物 3



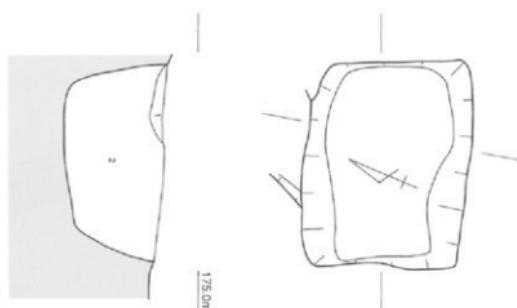
6号墳墳丘、基本土層図



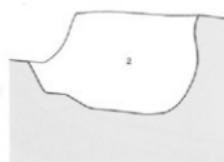
175.0m



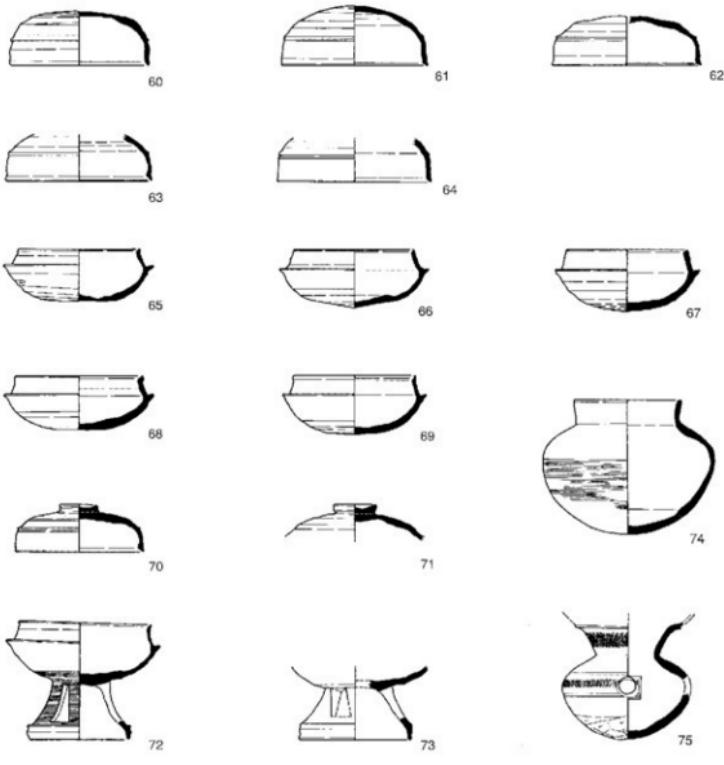
1. 7SYR5-9 明治場 シルト質粘土層（炭塊含む）



175.0m

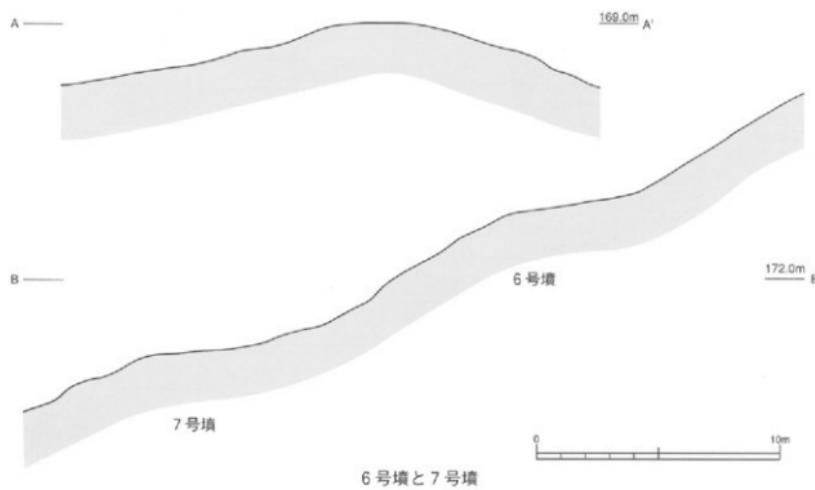
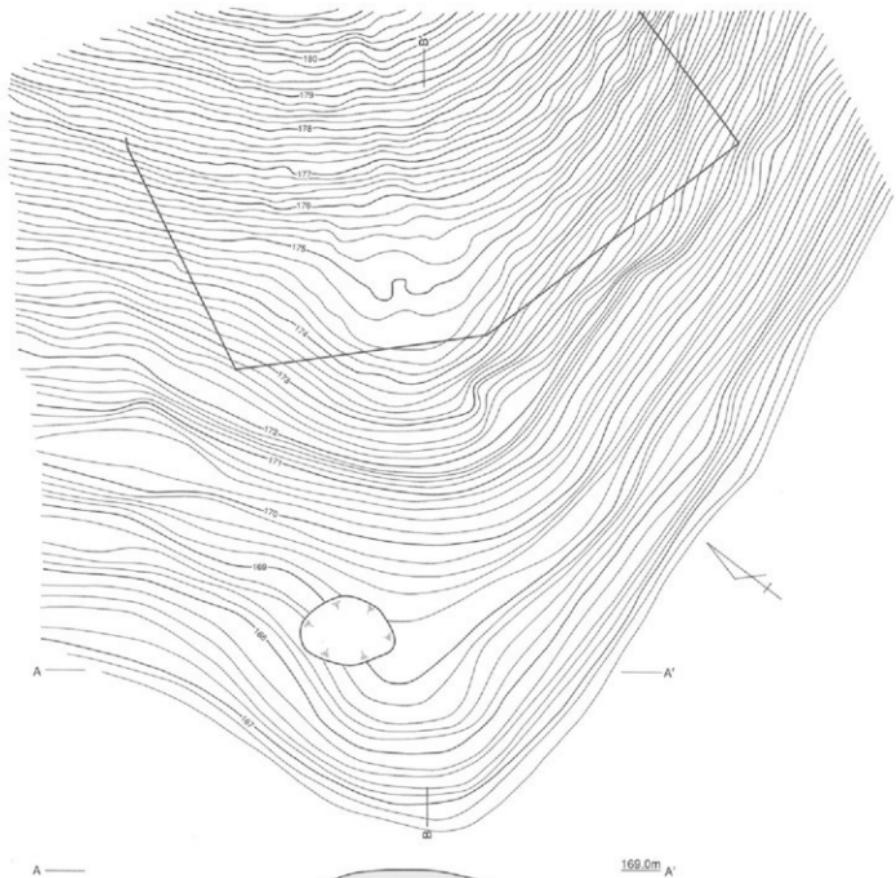
1. 7SYR4-4 基 シルト質粘土層（中層（地山ブロック）および炭塊含む）  
2. 7SYR5-6 明面 粘土層（炭塊多量に含む）

6号墳主体部



0 20cm

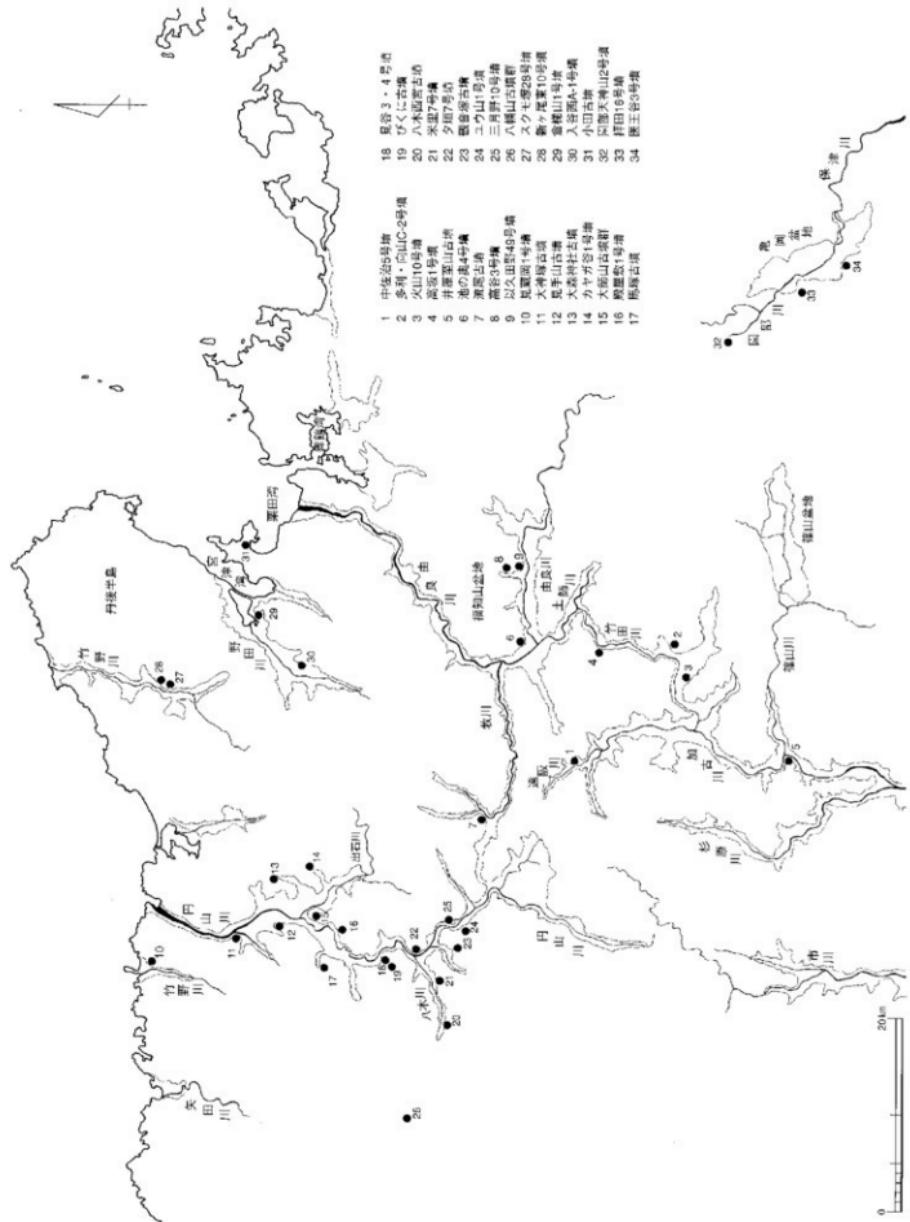
6号墳出土遺物



6号墳と7号墳

20m

但馬・丹波・丹後地域の初期横穴式石室分布



# 写真図版



遠景（南東から）



遠景（南西から）



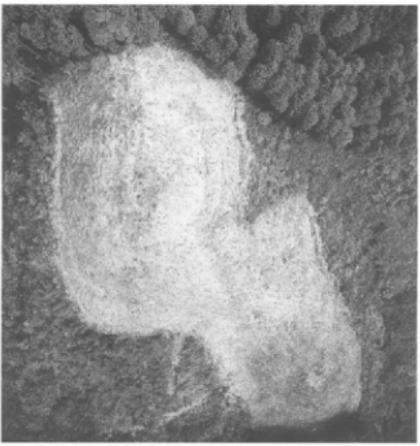
遠景（南から）



遠景（西から）



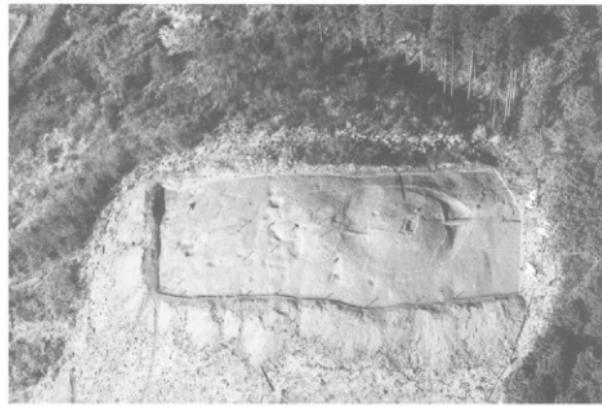
調査前の状況  
(南から)



調査前の全景



主体部検出状況の全景



A区全景（南東から）



B区全景（南から）



全景（北西から）



調査前の状況  
(西から)



墳丘盛土  
(北西から)



墳丘断ち割り状況  
(東から)



主体部埋土  
(南から)



主体部埋土  
(東から)



主体部完掘状況  
(西から)



須恵器出土状況



須恵器出土状況  
No.27・30



填丘上須恵器出土状況  
No.29・31



調査前の状況  
(北東から)



調査前の状況  
(北東から)



調査前の状況  
(東から)



墳丘全景  
(北東から)



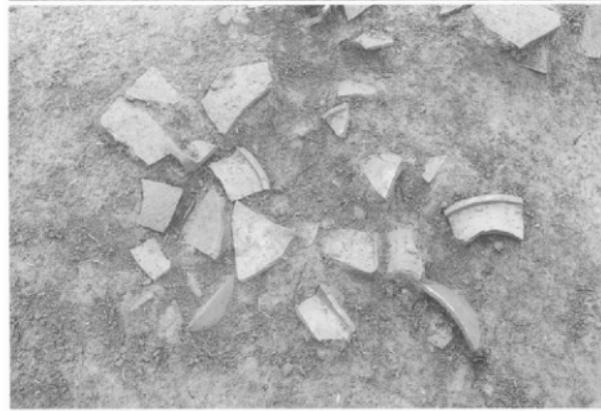
北側周溝埋土  
(北西から)



南側周溝埋土  
(北西から)



墳丘上須恵器出土状況



墳丘上須恵器出土状況



墳丘上須恵器出土状況



木棺検出状況（北西から）



木棺内埋土（南東から）



木棺内埋土（南西から）



木棺内須恵器出土状況



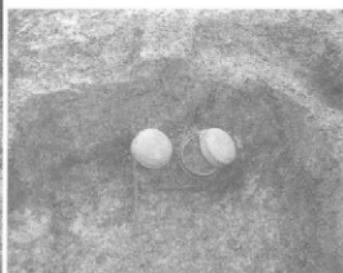
木棺内須恵器出土状況



木棺内完掘状況（南西から）



木棺掘削状況（南西から）



須恵器出土状況



鉄器出土状況



木棺内埋土（南西から）



木棺内埋土（南東から）



木棺掘削状況（南西から）



須恵器出土状況



墓壇検出状況（南西から）



木棺内埋土（西から）



墳丘断ち割り（北東から）



調査前の状況  
(南西から)



調査前の状況  
(南西から)



木棺検出状況  
(南西から)



墓壙埋土  
(南から)



木棺完掘状況  
(北西から)



墓壙下層の焼土坑  
(南西から)



調査前の状況  
(沢野方面を望む)



調査前の状況  
(北から)



調査状況  
(北から)





蓋石除去後  
(西から)



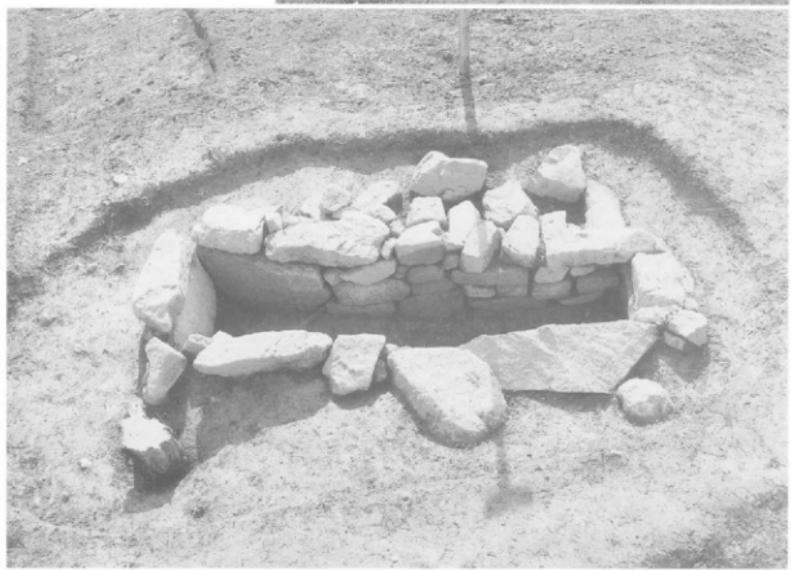
石棺内埋土  
(東から)



石棺内遺物出土状況



石棺完掘状況（東から）



石棺完掘状況（北から）



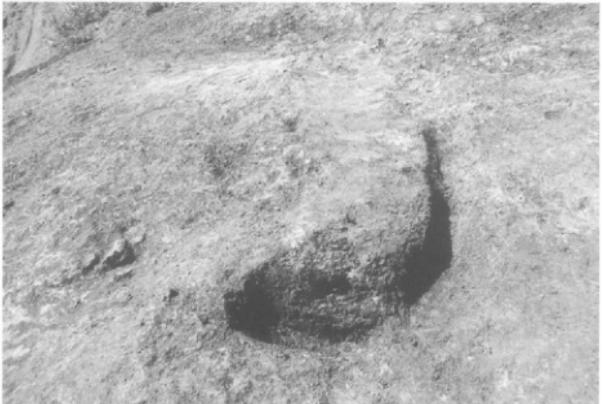
北側周溝  
須恵器出土状況



北側周溝埋土  
(西から)



南側墳丘盛土  
(西から)





調査前の状況  
(北西から)



調査前の状況  
(北から)



墳丘全景  
(北から)



石室検出状況  
(北から)



天井石の状況  
(北から)



天井石・  
控え積みの状況  
(西から)



天井石・  
控え積みの状況  
(奥壁付近)



天井石の状況  
(横口部付近)



石材の加工痕



天井石除去後  
(西から)



天井石除去後  
(東から)



石室内埋土  
(東から)



石室内完掘状況  
(北から)



石室内完掘状況  
(東から)



石室内完掘状況 (西から)



横口部埋土（北から）



横口部埋土（東から）



横口部閉塞状況 1



横口部閉塞状況 2



横口部閉塞状況 3



横口部閉塞状況 4



横口部閉塞状況 5



框石検出状況



横口部南壁



横口部北壁



樞石の状況（東から）



側壁と樞石の状況（南西から）



墳丘南側盛土断ち割り状況（北東から）



奥壁裏の状況（西から）



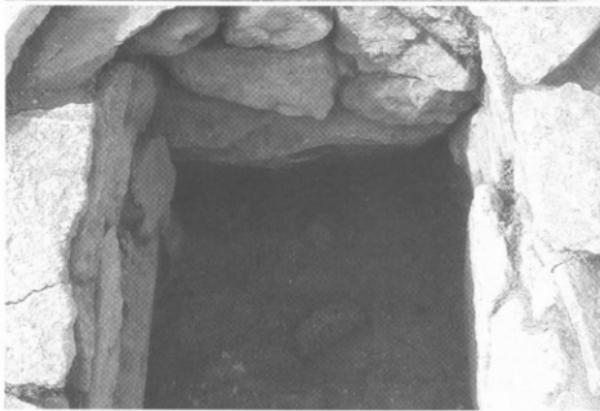
石室北側の埋土（西から）



石室南側の埋土（東から）



奥壁付近遺物出土状況  
(東から)



奥壁付近遺物出土状況  
(東から)



奥壁付近遺物出土状況  
(南から)



横口部付近遺物出土状況  
(南から)



横口部付近遺物出土状況  
(南から)



横口部付近遺物出土状況 (西から)



銅鏡の出土状況  
(西から)



礎床上、  
銅鏡下の木材検出状況



床面下の断ち割り



完掘状況（東から）



床面下の状況（西から）



床面下の状況（東から）



石室内墓壙底の状況（西から）



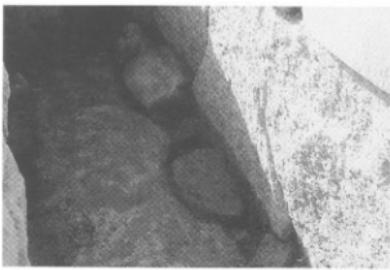
石室内墓壙底の状況（東から）



石室北壁の状況（南から）



石室南壁の状況（北から）



石室北壁基部の状況（南東から）



石室南壁基部の状況（南西から）



葺き石（南西から）



葺き石（南から）



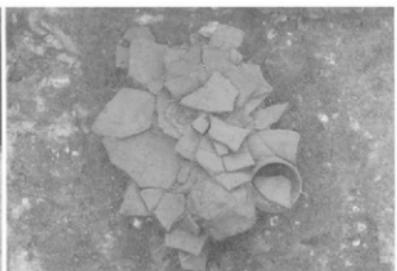
葺き石（東から）



葺き石（西から）



北側周溝埋土（西から）



周溝内須恵器出土状況



墳丘断ち割り状況（南東から）



石室掘り方の状況（東から）



調査前の状況（北西から）



調査前の状況（北から）



須恵器出土状況



須恵器出土状況



全景（北から）



第1主体部検出状況（北から）



第1主体部埋土（北から）



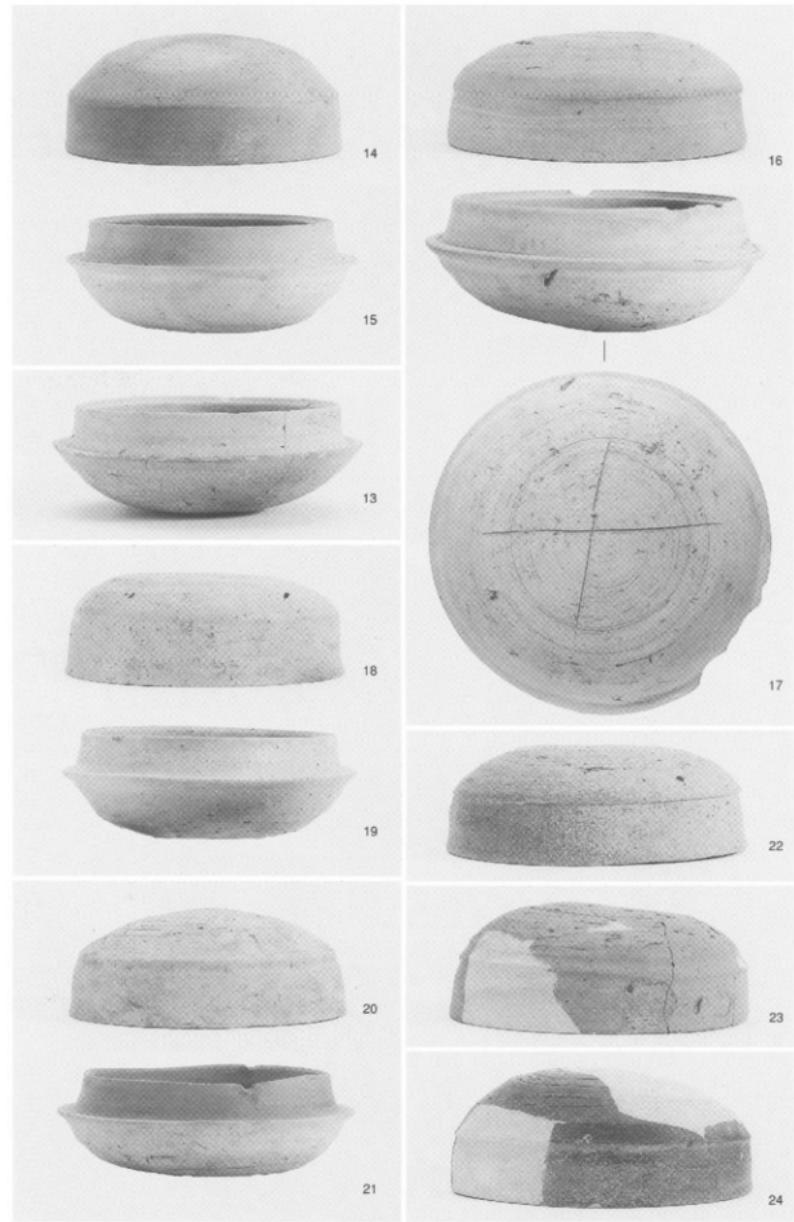
第2主体部埋土（西から）



填丘盛土（北西から）



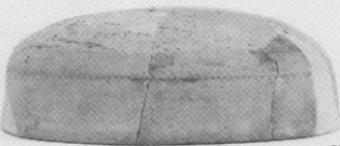
1号墳出土土器



2号墳出土土器 1



25



26



27



28



29



30



31



32



33



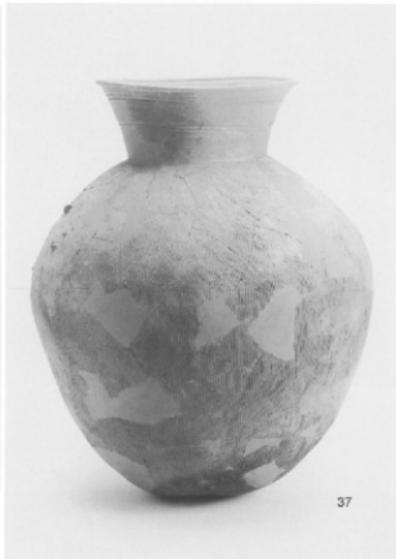
34



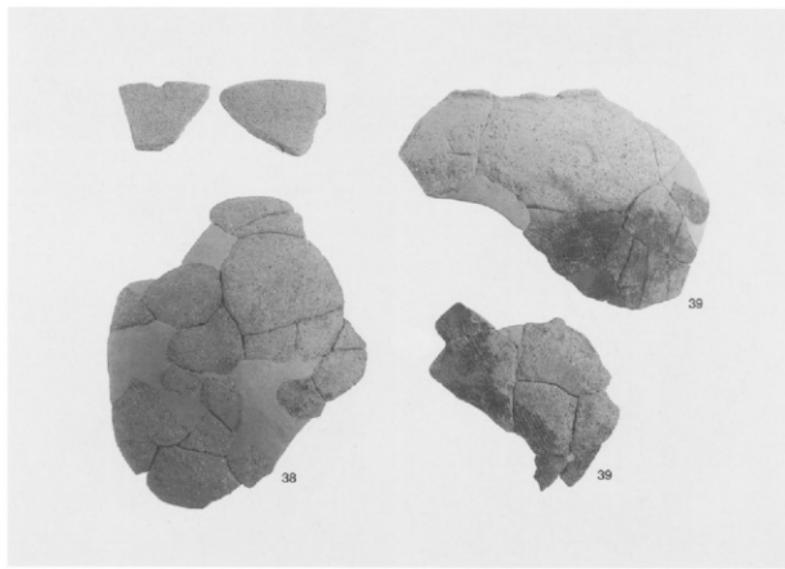
35



36



37



38

39

2号墳出土土器 3



40

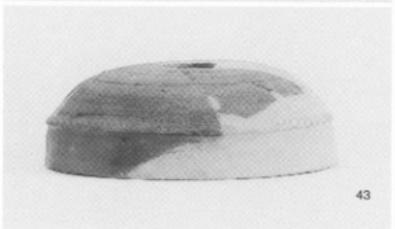
3号墳出土土器



41



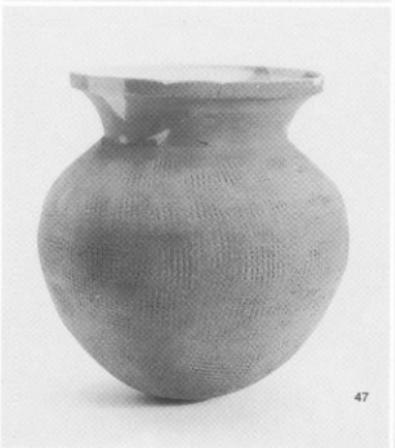
42



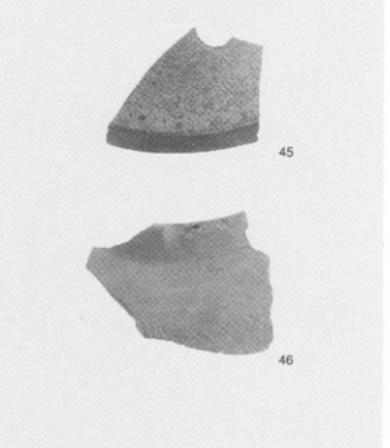
43



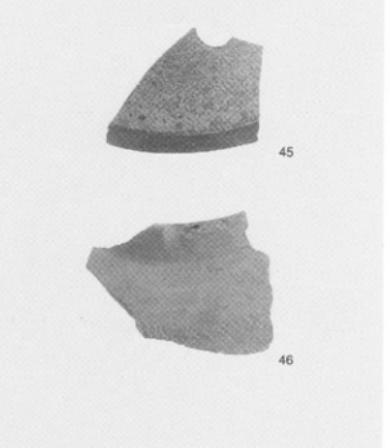
44



47



45



46

4号墳出土土器



48



49



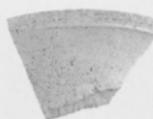
50



51



52



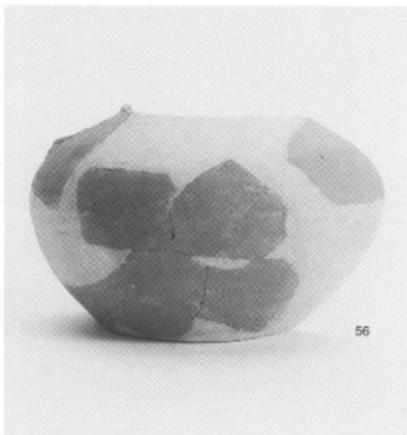
53



54



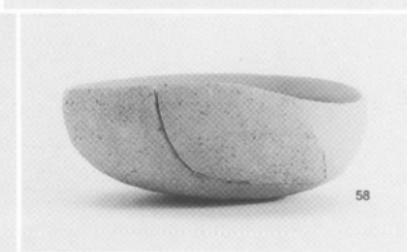
55



56



57

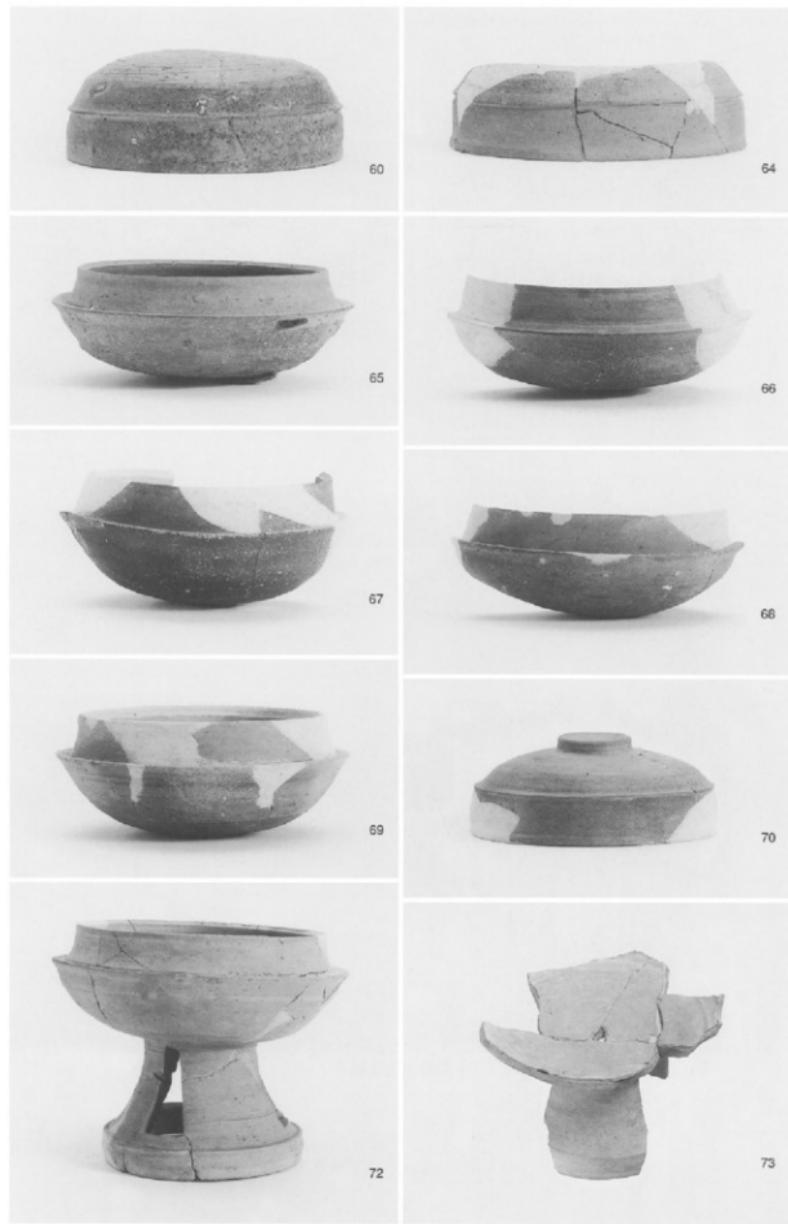


58

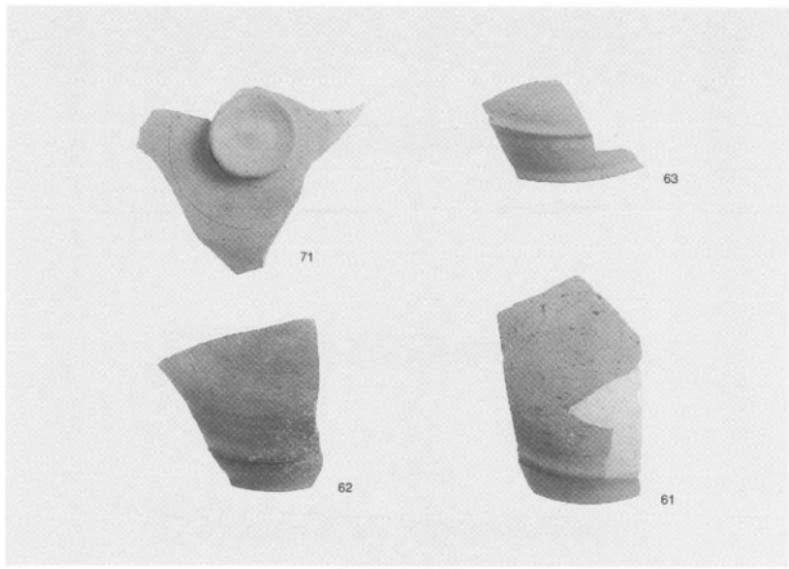
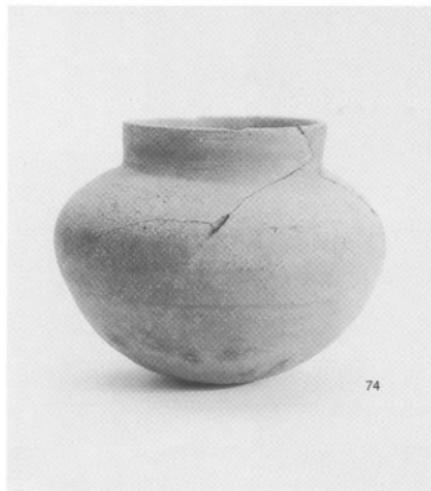


59

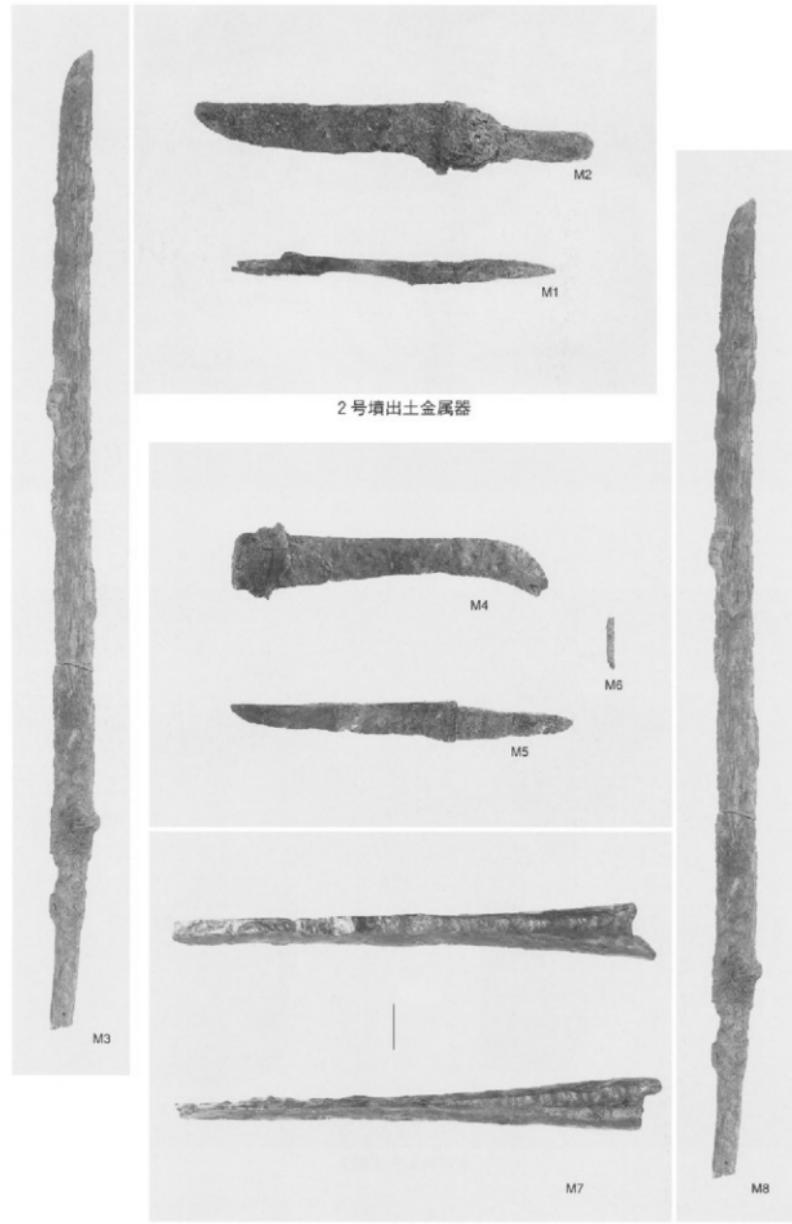
5号墳出土土器 2



6号墳出土土器1

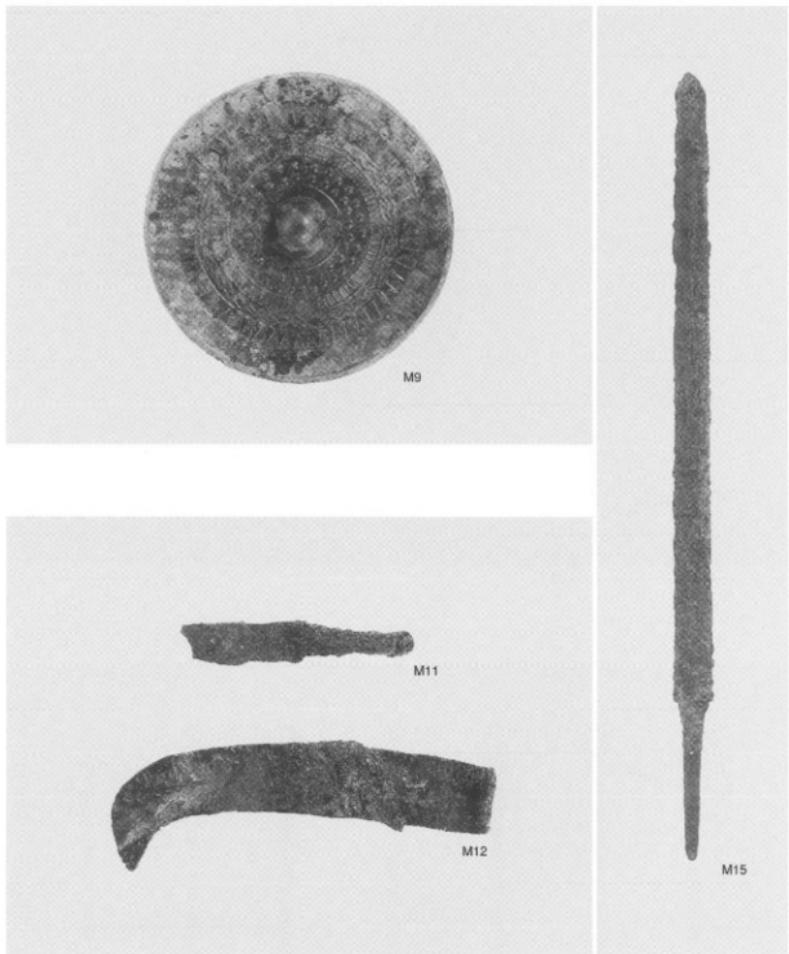


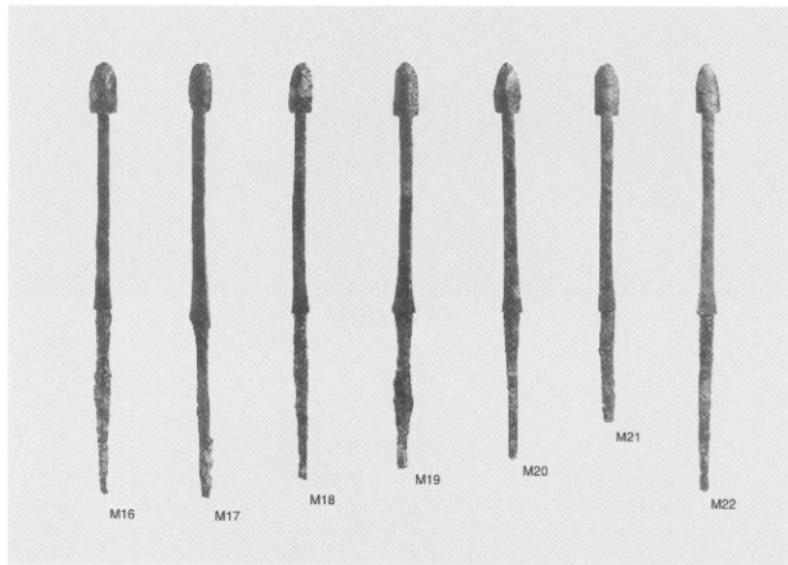
6号墳出土土器2



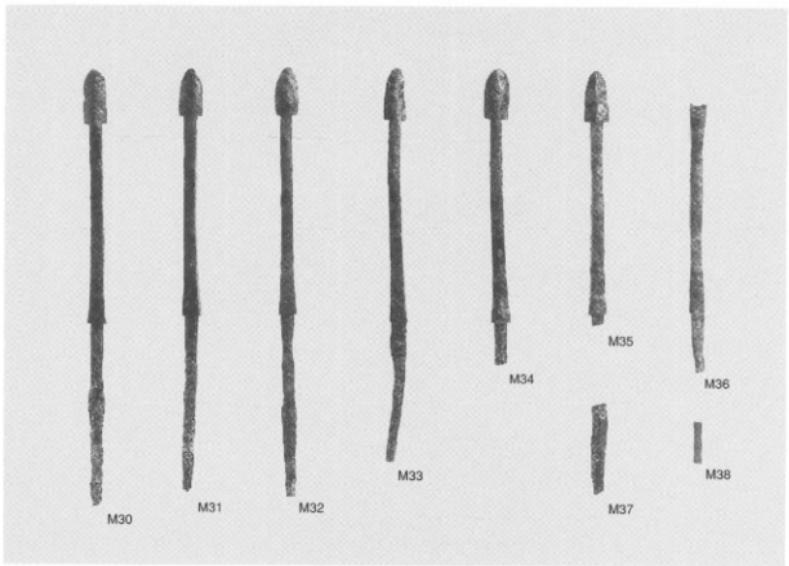
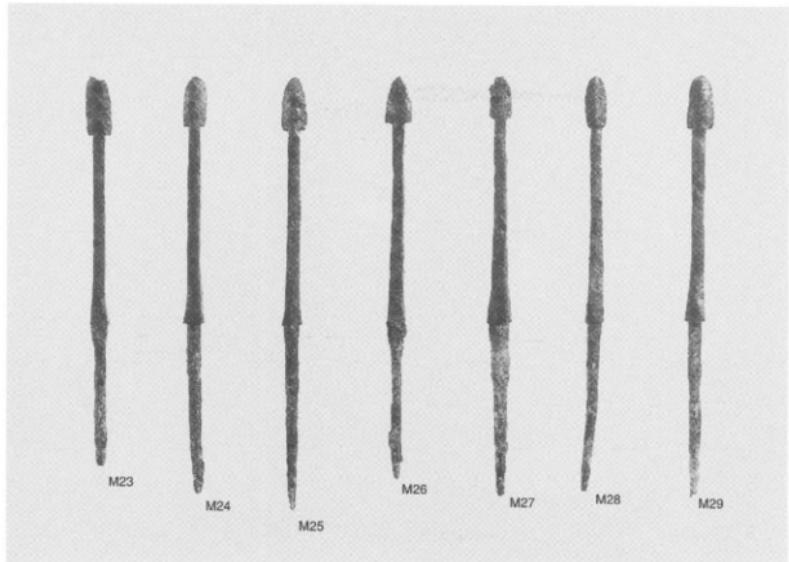
2号墳出土金属器

4号墳出土金属器

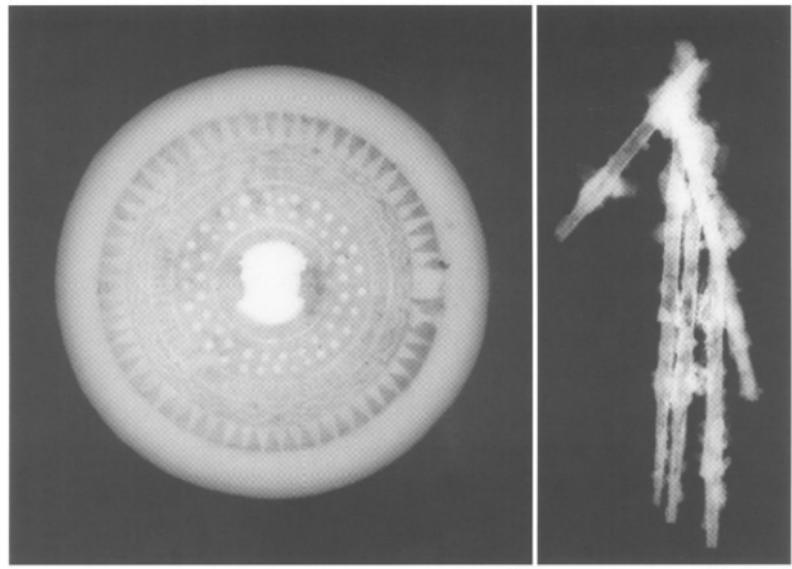




5号墳出土金属器 2

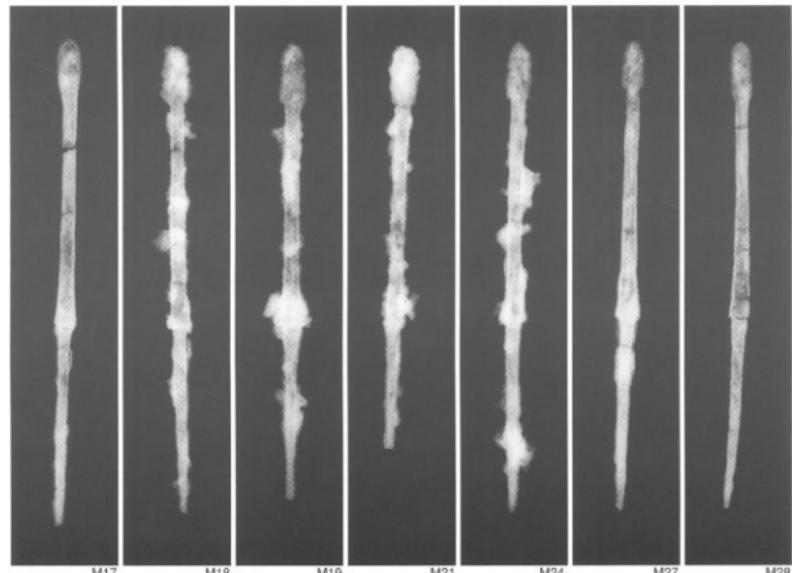


5号墳出土金属器 3



M9

M16-18, 20, 21



M17

M18

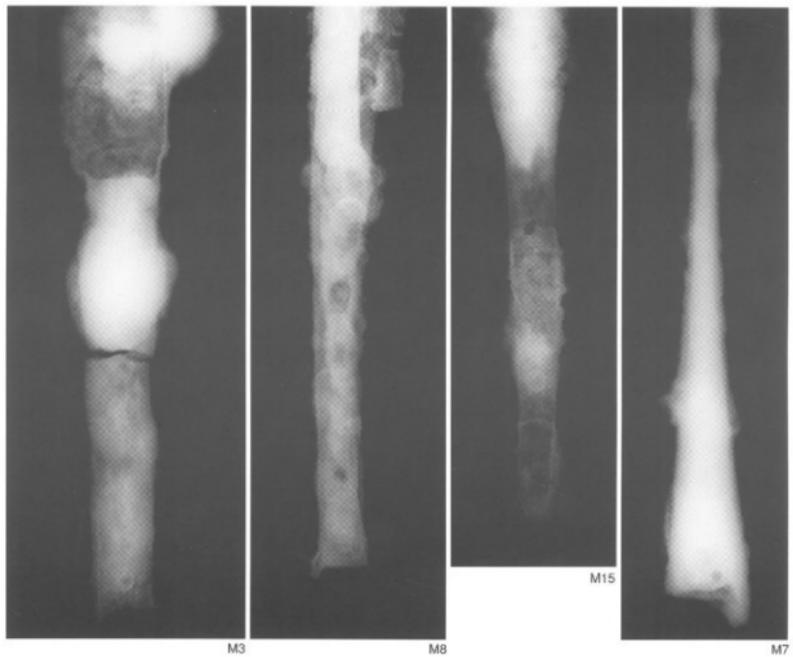
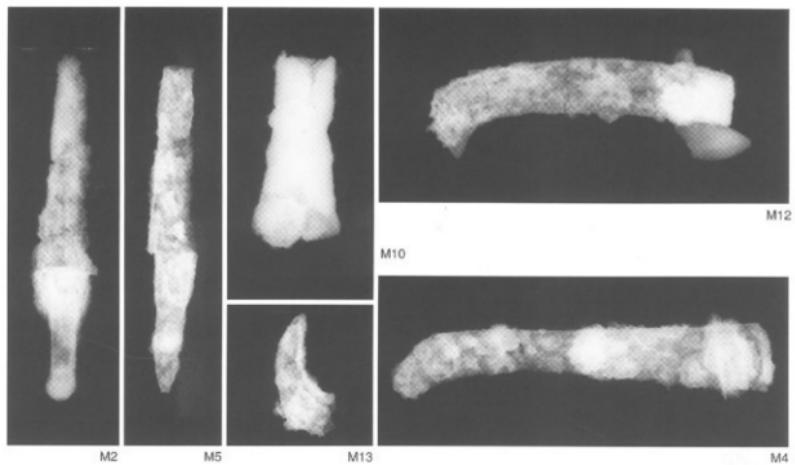
M19

M21

M24

M27

M28



## 報告書抄録

ふりがな	なかさじこふんぐん						
書名	中佐治古墳群						
附書名	一般国道483号北近畿豊岡自動車道春日和田山道路Ⅰ建設に伴う 埋蔵文化財発掘調査報告						
シリーズ番号	兵庫県文化財調査報告 第359冊						
著者名	別府洋二、株式会社古環境研究所						
編集機関	兵庫県立考古博物館						
所在地	〒675-0142 兵庫県加古郡播磨町大中500 Tel:079-437-5589						
発行年月日	2009(平成21)年3月16日						

所 収 遺跡名	所在地			北緯	東経	本発掘調査 調査期間	調査面積	調査原因
		古町村 番号	遺跡番号					
中佐治 古墳群	兵庫県 丹波市 青垣町 中佐治	28223	780072					一般国道483号北 近畿豊岡自動車道 春日和田山道路Ⅰ 建設
			780137	35度	135度	2001.10~		
			780138	15分	00分	2002.02	2,144m <sup>2</sup>	
			780073	58秒	05秒			
所 収 遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
中佐治 古墳群	墳墓	古墳時代	木棺直葬 箱式石棺 竪穴系横口式石室	須恵器(杯内部に 貝・ベンガラを 納めたものあり) 土師器 鉄器(剣・大刀 鉤・刀子・鎌・ 斧・鉢歛先・鍔) 珠文鏡・ガラス玉	丘陵上の6基の古墳を調査。 竪穴系横口式石室から珠文鏡 が出土。			

兵庫県文化財調査報告 第359号

## 中佐治古墳群

一般国道483号北近畿自動車道 春日和田山道路Ⅰ建設事業に伴う

### 埋蔵文化財発掘調査報告書

平成21(2009)年3月16日 発行

編集 兵庫県立考古博物館

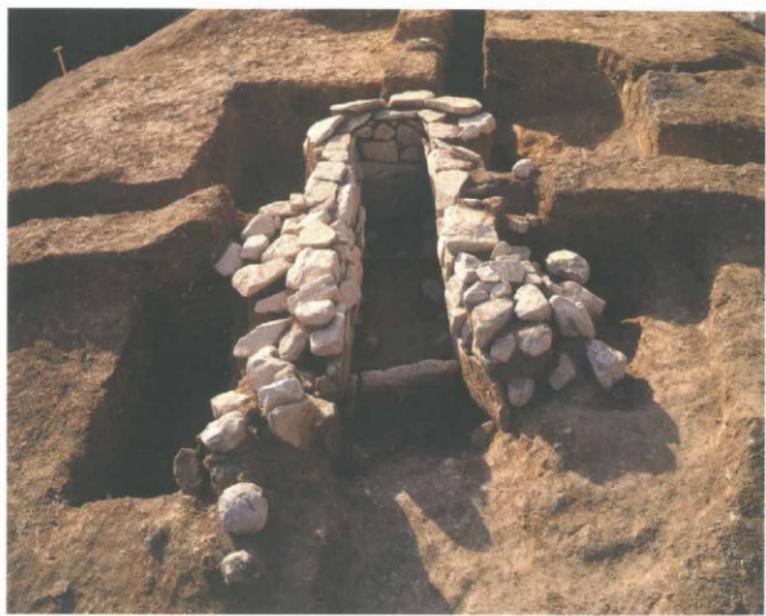
〒675-0142 兵庫県加古郡播磨町500

Tel 079-437-5589

発行 兵庫県教育委員会

〒650-8567 神戸市中央区下山手通5丁目10番1号

印刷 富士高速印刷株式会社



20教 T 1-038A4